関西外国語大学大学院外国語学研究科

博士学位申請論文　2019 年

植物に関する慣用表現の認知言語学的研究

―日中対照分析―

関西外国語大学大学院

外国語学研究科　言語文化専攻

916303　段 静宜

目次

第 1 章　序論.....1
1.1 研究目的と背景.....1
1.2 先行研究と問題点.....2
1.2.1 植物に関する意味的研究.....2
1.2.2 植物に関する文化的研究.....4
1.2.3 植物に関する認知的研究.....6
1.3 研究の流れと方法.....8
1.4 まとめ.....11
第 2 章　認知言語学のアプローチ.....12
2.1 認知言語学のメタファー理論.....13
2.1.1 メタファーの身体的基盤.....15
2.1.2 経験のゲシュタルト.....16
2.1.3 メタファーと類似性.....18
2.2 メトニミーとシネクドキ.....18
2.2.1 参照点構造.....19
2.3 カテゴリー化.....21
2.3.1 プロトタイプと拡張事例.....24
2.3.2 イメージ形成とスキーマ.....25
2.4 メタファーと文化.....28
第 3 章　植物の慣用表現についての認知的分析.....30
3.1 記号化と意味拡張.....31
3.1.1 漢字記号の位置づけ.....31
3.1.2 漢字とイメージスキーマ.....32
3.1.3 漢字と連想プロセス.....35
3.1.4 漢字と植物の社会•文化的背景.....37
3.2 植物と認知プロセス—「木」と「草」を中心に.....41

3.2.1 「木」と「草」のカテゴリー化 41
3.2.2 身体的経験と意味拡張 42
3.3 植物と認知プロセス—〈花〉を中心に 49
3.3.1 〈花〉のイメージ形成 50
3.3.2〈花〉のカテゴリー化 51
3.3.3 〈花〉と意味拡張のメカニズム 61
3.4 まとめ 67
第 4 章 日中両言語の植物のメタファー 69
4.1 「人間は植物」の概念メタファー 69
4.1.1 植物のメタファーの身体性 69
4.1.2 「生」と「死」のメタファー 73
4.2 植物の人体領域への写像 80
4.2.1 女性に関するメタファー 80
4.2.2 男性に関するメタファー 92
4.3 植物は感情領域への写像 96
4.4 植物の精神領域への写像 105
4.4.1 「植物は美徳」のメタファー 105
4.4.2 「植物は性格」のメタファー 118
4.5 植物の社会構造への写像 121
4.5.1 身分と地位のメタファー 121
4.5.2 勢力のメタファー 125
4.6 まとめ 126
第 5 章 植物の詩的表現と認知プロセスの諸相 127
5.1 自然描写と認知プロセス 127
5.1.1 自然描写と言葉の身体性 127
5.1.2 自然描写と感情移入 133
5.1.3 五感の身体性と共感覚の修辞性 138
5.2 レトリックと認知プロセス 141
5.2.1 花言葉のレトリック性 141
5.2.2 連想プロセスと主観性 142

5.2.3 知識フレームの制約.....145
5.3 ブレンディングと認知プロセス.....146
5.3.1 イメージのゲシュタルト性.....148
5.3.2 日中文化の繋がりと変容.....154
5.4 まとめ.....155
第 6 章　結語と展望.....157
6.1 本論文の研究成果.....157
6.2 今後の研究の展望.....162
6.2.1 文化的意味と異文化コミュニケーション.....162
6.2.2 言語教育の場への応用.....162
参考文献.....164
日本語参考文献.....164
中国語文献.....167
例文出典及び使用するコーパス.....172

第 1 章　序論

1.1 研究目的と背景

長い歴史の中で、植物は人間に影響を与え続け、今日でも我々の日常生活を彩るかけがえのない存在である。人間の文化は、いろいろな面において植物の文化によって特徴づけられている。言葉は文化の反映であり、植物の文化とのふれあいは我々の言葉の世界に深く浸透している。主体が外界を知覚し、外界を理解していく認知プロセスには、外界に対する主体の主観的なパースペクティヴ、主体の身体性にかかわる視点が反映されている。我々は植物に対する身体経験に基づいて、「芽が出る」、「花が咲く」、「葉が落ちる」など、基本的には植物の成長過程や変化を描写する言語表現を、比喩的な意味で人間の世界の意味づけに取り入れてきている。花木の意味がこのように創造的に拡張されるのは、メタファー、メトニミー、連想のプロセス、等と密接に関連している。植物を含む自然界を通して世界を解釈し、意味づけしていく人間の修辞的な認識により、日常言語の豊かな意味が可能になっている。

植物に関する言葉は単に言語表現として機能するのではなく、その背後に人間の認知プロセスが働いている。この種の認知プロセスは、厳密には歴史や文化、各時代の宗教や政治と深く結びついている。

植物に関しては、中国は日本との交流に長い歴史がある。「桃」、「梅」、「菊」、「牡丹」等は中国原産の植物であり、中国文化の一面を特徴づけている。これらの植物は日本に伝わった後、日本独自の文化的な意味が付与され、日本文化に定着することとなった。特に、「桜」、「椿」、「紅葉」等は日本の伝統的な植物として、日本文化のシンボル的な存在になっている。また、「バラ」、「カーネーション」のような西洋の代表的な植物文化は世界中に広がっている。植物文化はその国の民族や社会、風習、歴史などと深い関係を持っている。植物に関する言葉は、社会文化的な背景や民族文化の心理などの特徴を反映している。文化背景や自然環境の相違によって、各地域や国の植物文化に多様性が認められる。このような差異を理解することは、各地域や国の社会文化と民族心理をより深く理解することに

通じる。

本研究では、認知言語学の視点から、日中両言語における植物の慣用表現を体系的に分析することにより、植物に関する言葉の意味拡張、イメージ形成、メタファー、メトニミー、連想等の認知ロセスの諸相を明らかにしていく。また、「人間は植物」の概念メタファーの表現を中心に、植物の概念に関わる言葉の概念体系を分析し、日本語と中国語の共通性と相違点、両言語の植物に関わる発想の違いを考察していく。さらに以上の考察に基づいて、植物に関わる日中両言語の修辞表現を考察し、両言語の植物の文化的な意味の諸相を明らかにしていく。

1.2 先行研究と問題点

以下では、代表的な先行研究を取り上げ、植物に関する研究の現状を踏まえ、先行研究の問題点を指摘する。植物の研究は、言語学、人類学、社会学、植物学、民俗学等の領域で研究がなされている。言語学的視点からの研究は、主に意味的研究と文化的研究の二つの研究が存在する。以下では、これまでの植物に関する意味的、文化的研究を批判的に検討し、認知言語学の視点から、植物表現の新たな研究の方向を探っていく。

1.2.1 植物に関する意味的研究

植物に関する言語表現は、植物それ自体を表現するために使われるだけでなく、人間の多様な生活世界を表現するために使用される。植物に関する概念は、人間の概念体系の一部を特徴づけている。植物はわれわれの身近な存在として、認知主体が外部世界を理解する際の伝達の道具の役割を担っている。換言するなら、植物は、人間世界と外部世界を繋ぐ媒介である。植物に関する意味研究としては、以下のような研究がなされている。

(1) 言語分野に基づく研究

a. 植物表現に関する言語学的研究

b. 植物表現に関する文学的研究

c. 植物表現に関する比較的研究

(2) 時間的視点からの研究

a. 通時的研究

b. 共時的研究

(3) 植物のカテゴリーに基づく研究

a. 上位カテゴリーの研究 (例:「花」、「草」、「木」...)

b. 下位カテゴリーの研究 (例:「梅」、「松」、「桜」...)

(4) 言語表現レベルに基づく研究

a. 語彙レベルの研究 (例:四字熟語、ことわざ等)

b. 句レベルの研究 (例:慣用句、イディオム、詩歌等)

植物の意味研究においては、特にメタファー表現の分析がなされている。例えば、籾山(2005)は、(1)人間の目的を達成すること、(2)人間の一生の諸段階、(3)女性の成長、(4)精神面の変化という四つの面から、人間と植物の成長過程の類似性に注目し、「人間(の営み)を植物(の営み)を通して捉える(植物としての人間)」というメタファーが存在することを明らかにしている。特に籾山は、構造的類似性の視点から、「人間は植物」の概念メタファーを提唱し、植物に関するメタファー研究の重要な方向を提示している。また、陳(2015)は、中国語と英語における植物のメタファー表現を考察し、植物に関する表現の人体領域、抽象領域への写像を分析し、中国語と英語における植物メタファーの共通点と相違を明らかにしている。

メタファー研究以外には、日本では、大石(2010)が、植物の慣用表現の使用状況を調査した結果に基づいて、「花が咲く」、「開花」、「花を咲かせる」のような植物に関する表現を分析し、この種の表現に、人間の主観的感情が比喩的に表現される事実を明らかにしている。大石の研究以外には、日本では、植物に関する言語表現の意味的研究は殆ど見られない。一方、中国では、植物に関する言語表現の多義性や意味拡張の分析として、陳(2016)の研究が挙げられる。

日中対照研究の面では、田(2014)が、中日の樹木に関する慣用表現における比喩イメージの対比研究を行っている。また張(2015)は、中国語と日本語の「花」の慣用句の対照研究を行い、日中両国の「花」に関する表現の一致と相違を明らかにしている。しかし、日中対照研究においては、田(2014)、張(2015)のいずれも修士論文のレベルの研究に留まっている。

文学や翻訳の面では、中国では詩歌や文学作品における植物の意味研究がなされている。

特に『詩経』、『楚辞』のような古典文学に現れる植物の意味解釈についての研究が多く、また漢詩、唐詩、宋辞に詠われる植物に関する研究も広範になされている。また、『万葉集』、『源氏物語』を代表として日本の和歌、文学作品における植物に関する言語表現の対照研究も見られる。

以上、現時点では、植物についての意味的研究は、中国側は言語学、文学、中英比較の側面から一定の研究成果が見られるが、日本では、この方面の研究はまだ本格的にはなされていない。

1.2.2 植物に関する文化的研究

植物は人間の身近な存在であり、人間の日常生活に不可欠な存在である。社会の発展とともに、植物は人間の感情を伝える媒介となり、文化的意味を持つようになる。植物に関する表現は多種多様であり、言語や文化に関する研究の重要な研究テーマにもなっている。また植物とのふれあいは、われわれの文化に浸透している。植物に関する文化的研究としては、以下のような視点からの研究が挙げられる。

(5) a. 植物に関する文化的歴史
b. 植物に関する神話伝説、物語
c. 植物に関する民俗（風俗習慣、年中行事等）
d. 植物に関する芸術創作（植物をモチーフとするデザイン等）
e. その他（園芸等）

中国では、朱（2010）が、植物に関する物語や伝説の著書を出版し、中国の植物に関する民間伝説を収録している。《花之语》(何 2008) は、中国の花文化を詳しく紹介している。また、植物のネーミングに関しては、(段、曲、朱 2009) の専門的な研究がある。さらに、（譚 2004）は、古代中国語における植物の命名の文化背景について論じている。

日本では、法政大学出版局から出版された『梅』、『桃』、『蓮』等の本は、植物の文化史を記載している。また、『柳の文化誌』（柳下 1995）、『新桜の精神史』（牧野 2002）は、それぞれ日本の柳、桜の文化を記述している。川口（1982）は『花と民俗』で、植物の民俗を紹介している。また、植物に関する風習は、民俗、年中行事の紹介にも関係している。

従って、植物についての文化的研究は、多くの側面と関わっている。植物文化についての研究は、これらの専門的な著書が貴重な資料を提供している。

日中の植物文化の比較に関しては、専門的な研究はないが、中国では、桃、菊、梅、椿等の植物文化についての日中対照研究に関する論文が存在する（姚 2001、久保、津田、周 2015、呉、張、白 et al.2015）。植物文化についての著書、論文、記述等を踏まえた場合、中国と日本の植物文化の関連性については、以下の三つの特徴をまとめることができる。

Ⅰ.〈中国の植物文化は日本文化に定着する〉

中国と日本の植物文化は、部分的に融合するところが見られる。モモ、ウメ、キク等の薬用と食用価値が高い中国原産の植物は、日本伝わり日本の土地に定着した。モモ、ウメ、キク等の植物が日本に伝来した時、これらの植物に関する中国文化の一部も日本に伝えられた。

例えば、『古事記』に記載される伊邪那岐命が、桃の実で黄泉国から追ってきた悪霊を撃退する伝説は、中国において桃の木が厄払いの神樹であるという信仰に由来する。このような民間的な植物信仰のほか、中国文人の間の「賞梅」、「賞菊」の流行は、日本の貴族階層から入ってきている。また、日常生活の面では、日本では節句に食べられる「七草粥」は、中国の風習からきたものである。このように、中国の民間信仰、政治的色彩、日常生活等に関する植物文化の諸相が、日本文化と日本人の生活に反映されている。

Ⅱ.〈中国の植物文化は日本文化に変容する〉

農林技術の発展によって、中国伝来の植物が改良され、新たな文化が生み出されている。例えば、3 月 3 日に行われる日本の雛祭りは「桃の節句」とも呼ばれ、日本独特の文化的、民族的行事として行われる。この日は、女の子のお祝いの儀式として人形に桃の花を飾る風習になっている。この「桃の節句」の由来は、中国の「上巳」である。古代中国では、上巳の日に川で身を浄めて邪気を祓う習慣があり、もともと邪気を祓う行事が行なわれていた。この行事が日本に伝わり、川に人形を流して厄災を祓う流し雛の風習となった。特に、桃の花を用いるのは、桃の花と女性の関係、そして桃には健康長寿の意味が附与されることと密接に関わっている。このような文化的な意味の変容は、松、柳、牡丹、蓮等の植物文化にも見られる。これらの植物も日本に伝わり、新しい文化的意味が附与されるようになり、日本文化を豊かにしてきている。

Ⅲ.〈日本の植物文化は中国に逆輸入〉

逆に、日本独自の植物文化が、中国にも影響を及ぼしている。梅、桃、牡丹、菊等の中国の伝統的な花と比べて、「桜」のイメージが薄かった中国では、日本の「花見」の影響で、現在中国では、春に桜を見る場所も増え、桜を楽しむ人が多くなっている。それだけではなく、日本の「華道」、「茶道」における「侘び寂び」の美意識も、中国に影響を与えている。このように、歴史的には、植物そのものではなく、植物に附与される文化的な価値が、外国文化にさまざまな影響を与えている。「食文化」が国々の象徴である同様に、「植物文化」も文化の歴史と生命力に密接に関わっている。

現時点では、植物文化に関しては、「東洋文化」と「西洋文化」の対照研究が多く行われている。一方、同じ東アジアの国である日本と中国は、それほど大きな相違がないと思われ、植物文化についての対照研究は十分に重視されていない。このような現状を踏まえ、本研究では、ケーススタディを通して、日中両国における植物文化の諸相を考察をしていく。

1.2.3 植物に関する認知的研究

従来の植物についての研究は、主に植物に関わる言語表現と文化現象を中心に行われている。植物に関しては、言葉のレトリック表現として修辞学の面から分析する研究が存在するが、人間の認知プロセスの視点から、植物の言語表現についての体系的な考察はまだ少ない。認知的な視点に基づく研究としては、陳（2015）、陳（2016）が、代表的な研究として挙げられる。以下では、まずこれらの代表的な研究を紹介する。

陳（2015）は、概念メタファー理論に基づいて、第二言語習得の視点から、中英両言語における植物のメタファーを考察している。この研究では、植物メタファーの理解に、心理的要因と文化的要因が働いていることを考慮し、アンケート調査により、植物メタファーの異文化コミュニケーションにおける重要性を明らかにしている。また、以上の考察から得られる知見を、第二言語教育に適用している。

陳（2016）は、認知意味論の視点から、中英両言語における植物に関する語彙の語構成、意味拡張、カテゴリー化、文化的意味等を研究し、特に植物のネーミングを中心に考察を行っている。具体的には、植物名の「擬人化」と「擬動物化」の現象の例を挙げながら、

このようなネーミングの心理の一致と相違を分析し、中英両言語における植物語彙の意味研究に貴重なデータを提供している。

陳（2016）の研究により、1994 年以降、中国では中英言語比較の領域において、認知的視点から、植物語彙と植物メタファーを中心として、言葉の意味拡張の研究が試みられている。この方面の研究は、表 1-1 にまとめられる。

表 1-1

研究テーマ	論文の数
中英両言語における植物語彙の比較研究	21 点
中英両言語における植物のメタファー研究	11[1]点
具体的な植物語彙を中心とする研究	約 20 点
海外で英語で発表される植物語彙に関する研究	約 10 点

植物に関する以上の現状から分かるように、近年、植物語彙についての研究は注目されているが、まだ研究の余地があると言える。現時点では、認知言語学の観点からの、日中の植物表現についての対照研究は、まだ本格的に触れていない。

以上の先行研究の現状を考えた場合、植物に関する言語学的な研究は、以下の線に沿って考察する必要がある。

Ⅰ．従来の研究では、植物に関する言葉の意味的研究は見られるが、辞書に載せている意味を羅列したり、慣用句等を分類するのが一般的である。植物に関する言語表現の意味拡張のプロセスや多義的な意味の内在的な関連性については研究されていない。植物表現はデータは膨大であり、その使用状況は、植物それ自体だけでなく、人体領域、抽象領域にまで拡張している。従って、本研究は、認知的意味研究の視点から、植物の基本語彙の意味拡張のプロセスに関わる身体性と主観性の分析を通して、植物表現の意味拡張のメカニズムを明らかにしてく。

Ⅱ．植物のメタファー表現の研究は、カテゴリー別に考察するのが一般的であり、概念メタファーの視点から見た、植物の概念体系と人間の概念構築の関係について

[1] 11 本の論文の中に修士論文 3 本、博士論文 0 本

の体系的な研究はなされていない。この現状を踏まえ、本研究では、植物に関する概念メタファーを研究対象として、言語主体が外部世界を理解する際に、重要な役割を担う身体性と主観性の諸相を明らかにしていく。

Ⅲ. 先述したように、日中植物の交流には長い歴史がある。本研究では、蓮、桃、梅、牡丹、松、竹、菊、桜、椿等の日中両国の文化に関わる植物のケーススタディを試みる。また、これらの植物の日中両国における文化的意味を考察し、植物に関わる日中の言語表現の文化的、社会的背景を明らかにしていく。

1.3 研究の流れと方法

本研究は、先行研究を踏まえ、認知言語学の理論を用いて、以下の側面から、日中両言語における植物に関する言語表現を考察する。

Ⅰ. 植物の慣用表現に関する認知のメカニズム

考察に入る前に、本研究で扱われる「慣用表現」の範囲を明確にする必要がある。中国語には、慣用的な言語表現は語彙レベルの“俗语”、“成语”、“歇后语”等がある一方、認知度が高ければ、文レベルの詩句、歌詞、名言等は慣用表現として使用する場合もある。また、日本語には、語彙レベルの表現と文レベルの表現の厳密な定義がなされている。日本語には、「頭にくる」、「猫をかぶる」、「足を洗う」のような表現は、一般に「慣用句」とみなされる。「慣用句」の特徴について、石田（2015 : 2）は、以下の二点を指摘している。

a. 二つ以上の語から構成されている。

b. 句全体の意味が個々の語の元来の意味からは決まらない。

以上の定義から分かるように、慣用句の本質は句であること、そして特別な意味を有することであり、この点で、語彙レベルの表現と違っている。また、石田（2015 : 3）は、従来の慣用句研究に基づいて、「慣用句」（あるいは「広義の慣用句」）を以下のようにまとめる。

a. 挨拶語･応答語（森田（1966），白石（1969，1977））

おはようございます，いい加減にしなさい，お変わりございませんか，

すみません

b. ことわざ･格言（白石（1969，1977））

牛は牛連れ馬は馬連れ，果報は寝て待て，知者は一を聞いて十を知る

c. 連語（森田（1966），白石（1969，1977））

汗をかく，電報を打つ，将棋をさす，世話をやく，溜息をつく，麦をひく，

木を割る，火をたく

d. 狭義の慣用句（森田（1966），白石（1969，1977））

油を売る，鼻にかける，鯖を読む，頭にくる，エンジンがかからない，

骨が折れる，気が利く，半日をつぶす，頭をかく

e. 複合語･単語（白石（1969，1977））

苦手，天下り，大通り，とりあえず，恐れる，逃がす

f. 擬音語･擬態語（白石（1969，1977））

こけこっこう，ごくっと，ぎじぎじ，にこにこ，すたすた

このような分類に関しては、文レベルの表現と語彙レベルの表現を区別していない、という批判がなされている。本研究は「慣用句」という言い方をせずに、以下の森田（2010）の「慣用表現」についての解釈を参考にし、本研究で扱う日本語の慣用表現の範囲を規定する。

> 著者が考える「慣用表現」とは、狭い意味での慣用句のみにとどまらず、広く慣用化されている種々の言い回し、慣用的な表現、決まり言葉の類、さらには格言や諺の類、表現の中にちりばめる個々の語は異なっていても、全体としての言い方にある程度のタイプを有している文の骨組みともいうべき、いわゆる文型に至るまで、個人の創造になる自由なことばの統合とは別に、ある程度表現の型が固定している句や文の表現も含めるということである。そのため、時には挨拶語や、特定の状況の時には誰しもが用いる一定の言葉遣いなど、言い方の型が社会の習慣として定まっていれば問題の対象とする。
>
> （森田 2010：12）

本研究では、『日本国語大辞典』、『大辞林』、『広辞苑』、『新明解国語辞典』、『三省堂国語辞典』に収録する植物についての意味解釈に基づき、『動植物のことば辞典』、『動植物のことわざ辞典』から植物についての表現を収集し、植物に関する慣用表現を整理する。中国語における植物の意味解釈は、《现代汉语辞典》、《新华词典》に基づいき、それに関する言語表現は《俗语 10000 条》、《惯用语 10000 条》等から資料を収集する。また、新聞記事、文学作品、さらにコーパスを利用して、植物の慣用表現に関する具体的な使用例を取り上げ、認知言語学的な視点から分析していく。

第三章では、辞書の意味に基づく植物（特に、「草」と「木」）のカテゴリー化の認知プロセスの諸相を考察していく。さらに、植物の「花」を中心に、イメージ形成、プロトタイプ的意味、意味拡張等の認知プロセスの分析を試み、植物に関する基本語彙の認知メカニズムを解明していく。

Ⅱ．植物に関する概念メタファーの考察

第三章の考察に基づいて、「草」、「木」、「花」の認知プロセスを考察し、植物に関する慣用表現の意味拡張には、人間の身体性と主観性が働いていることを明らかにする。この種の植物の意味拡張では、特に植物領域から人間領域への拡張が注目される。植物に関する言語表現は、人間の概念体系の構築に影響を及ぼす。従って、第四章では、「人間は植物」という概念メタファーに注目し、植物に関わる人間の概念体系の一面を考察する。さらに、この章では、植物の基本カテゴリーの〈草、木〉、部分カテゴリーの〈種、芽、花、葉、実、根〉、植物の成長過程などに関わる言語事例の分析に基づいて、植物の概念領域から人間の人体領域、感情領域、精神領域、社会生活領域への写像の諸相を分析していく。

Ⅲ．植物に関する詩的表現の認知プロセス

植物に関する言語表現としては、日常言語の事例だけでなく、詩歌その他の文学に関わる植物の表現も、言語研究の重要な考察対象になる。人間の「嬉しい」、「悲しい」、「寂しい」等の心理的世界の叙述は、植物に関わる表現によっても可能になる。また、「花言葉」に見られるように、植物には特定の意味が与えられ、人間社会の感情伝達や社交的機能を果たすことも可能である。そして、植物は他の存在と組み合わせて、人間の生活を彩ることもできる。換言するなら、人間にとって、植物は単なる生活の材料ではなく、感情を託

し気持ちを伝え、生活を楽しむための重要な存在になる。このような植物に関する言語表現のかなりの部分は、「詩的表現」によって構成されている。

従来の研究では、これらの表現に関し修辞学、社会学、民俗学などの分野での考察はある程度なされているが、認知言語学的な分析はされていない。本研究では、このような修辞的な植物表現を特徴づける認知プロセスの諸相も分析していく。

1.4 まとめ

本研究では、植物に関する先行研究を参考にして、認知言語学的な視点から、植物に関する慣用表現を中心に、日中両言語の植物表現の比較を試みていく。本研究では、まず辞書等に記載されている植物表現の意味解釈に基づき慣用表現を収集し、植物の基本語彙の意味拡張の認知プロセスの諸相を考察していく。この意味拡張の認知プロセスは、植物に関する言語主体の身体的経験と密接に関わっている。植物に関する言語表現の意味拡張のプロセスには、さらにメタファーに関わる身体的な経験が重要な役割を担っている。本研究では、メタファー的な植物表現（例えば、「人間は植物」の概念メタファーに関する言語表現）を通して、植物と人間の概念構築の関係性を考察していく。この種の修辞的な言語表現は、人間の生死観、審美観、価値観等の社会・文化的要因に密接に関係している。また本研究では、日常的な植物の言語表現から、修辞性が高い詩的表現の意味拡張のプロセスを考察し、言葉の創造性と認知のメカニズムの相互関係を明らかにしていく。

植物に関する言語表現は、その国の民族や社会、風習、歴史などと深い関係をもっている。本研究は、認知言語学の枠組みに基づき、日中両言語の植物表現の対照研究を通して、特に日本語と中国語における言葉の創造性と認知のメカニズムの解明を試みていくが、この考察を通し、さらに両言語の文化・社会的な相違と共通性も明らかにしていく。本研究から得られる知見は、認知言語学を中心とする言語研究の分野に貢献するだけでなく、日中両言語の言語教育の分野や異文化コミュニケーションの分野にも重要な知見を提供する。

第 2 章　認知言語学のアプローチ

言語学は、人間の知のメカニズムの解明に関わる認知科学の重要な研究分野の一つである。山梨（2012）は、これまでの認知科学の研究を以下のような三期に区分し、各段階の認知科学の研究の特徴を示している。記号操作を重んじる生成文法はこの第 1 期のパラダイムに基づく言語学として位置付けられる。これに対して、本研究の背景となる認知言語学のアプローチは、日常言語の発生の根源を問い直し、認知主体と外部世界の相互作用を重視する点で、下記の第 3 期のエコロジー的、環境・身体論的な認知科学のパラダイムに基づく言語学のアプローチとして位置付けられる。

第 1 期：　記号主義的、計算主義的な認知科学

第 2 期：　脳科学的、コネクショニスト的な認知科学

第 3 期：　エコロジー的、環境･身体論的な認知科学

（山梨 2012：1）

本研究では、以上の第３期の認知言語学の枠組みに基づき、日中両言語における植物表現の概念体系と意味拡張のメカニズムの諸相を考察していく。

植物は人間に身近な存在である。植物は人間が外部世界を理解し、表現するための修辞的な手段としての役割を担う場合がある。植物に関する言語表現は、人間と植物の相互作用を反映している。植物についての修辞的な言語表現には、植物の基本的領域から、人間の身体領域のような具体的な領域（あるいは、精神概念のような抽象領域）への比喩的な拡張が見られる。この種の修辞的な意味拡張は、外部世界に関するわれわれの具体的な経験に動機づけられている。

本研究は、認知言語学の視点から、日中両言語における植物に関する言語表現の意味構造と創造的な意味拡張のメカニズムを解明していく。以下では、まず本研究の分析の背景となる認知言語学の基本的な枠組みとして、メタファー、メトニミー、等の意味分析に関わる理論的な枠組みを概観する。

2.1 認知言語学のメタファー理論

Lakoff and Johnson（1980）は、メタファーは単なる修辞的表現ではなく、その背後には、「概念メタファー」と呼ばれる認知のベースが存在すること明らかにした。そして、認知言語学の観点から、比喩の考察を含む新しい言語学の研究を提唱した。谷口（2003 : 7）は、Lakoff and Johnson（1980）の「概念メタファー」の理論の基本的な特徴を、次のようにまとめている。

A. 従来の客観的意味論に対し、「主観的意味論」を打ち出した。

B. 認知意味論は、思考体系を構成している概念メタファーが経験に根ざしたものであることから、「経験基盤」、「身体性基盤」の立場をとる。

この Lakoff and Johnson の概念メタファーの研究は、言語の研究を、文字通りの言葉の意味研究から、メタファーを含む創造的な意味体系の研究に、研究のスコープを拡げた点に重要な意義がある。

Lakoff and Johnson（1980）は、人間の思考を特徴づける概念メタファーを「構造のメタファー」（structural metaphor）、「方向のメタファー」（orientational metaphor）、「存在のメタファー」（ontological metaphor）の三種類に区分している。

（1）の例は、ARGUMENT IS WAR という概念メタファーは構造メタファーの代表例である。

(1) ARGUMENT IS WAR

a. Your claims are *indefensible*.

b. He *attacked every weak point* in my argument.

c. I *demolished* his argument.

d. I've never *won* an argument with him.

e. You disagree? OKay, *shoot*!

f. He *shot down* all of my arguments.

（Lakoff and Johnson 1980/1986： 4-5 （渡辺ほか、訳））

このメタファーでは、戦争に関する「守る」、「弱点」、「勝つ」、「攻撃」のような表現が、「議論」の意味を喩えるのに用いられている。

Lakoff and Johnson（1980）は、「参加者」、「構成」、「段階」、「因果関係」、「目的」等の側面から、「戦争」と「議論」という二つの概念体系の間に構造的類似性が存在する点を明らかにしている。この種のメタファーでは、「戦争」の概念に基づいて、「議論」の概念を理解することができる。また、TIME IS MONEY、LOVE IS A JOURNEY のような概念メタファーの場合にも、「時間」と「金銭」、「恋」と「旅」の概念の間に、構造的な類似性が認められる。この場合には、「金銭」と「旅」の経験に基づいて、「時間」や「恋」のような抽象概念を理解することができる。

次の例は、方向のメタファーの例である。

(2) **HAPPY IS UP ; SAD IS DOWN**

a. I'm feeling *up*.

b. My spirits *rose*.

c. I'm feeling *down*.

d. I *feel* into a depression.

e. My spirits *sank*.

（Lakoff and Johnson 1980/1986： 19-20 （渡辺ほか、訳））

方向性に関する「上」、「下」、「前」、「後」の空間概念は、人間の心理状態、感情、地位、善悪の叙述に用いられる。(2) に挙げている「楽しいことは上、悲しいことは下」のような方向のメタファーは、このような心理状態が発生する際の身体的経験に基づいているからである。（さらに、Lakoff and Johnson（1980）は、このような空間概念から、時間概念への拡張を示唆している。）

山梨（2012：62-64）は、空間認知に関わる経験の次元（特に、上と下の次元）は、日常言語の意味の発現の背景として重要な役割を担っている点を指摘している。この空間概念の比喩的な意味の拡張は、以下の表 2-1 に示される。

表 2-1 （山梨 2012：64）

〈上〉：	増	良	幸	理性	支配	繁栄	尊大
〈下〉：	減	悪	不幸	感情	被支配	没落	謙虚

第 3 の「存在のメタファー」は、抽象的な存在を具体的に喩えるメタファーである。例えば、IDEAS ARE OBJECTS、LINGUISTIC EXPRESSIONS ARE CONTAINERS というメタファーは、思考や言語表現のような抽象的な存在を、具体的なモノや容器によって喩えている。容器に関する概念について、谷口（2003：26）は以下のような特徴を指摘している。

A. 容器の境界線によって、「内側」と「外側」という領域ができる。
B. 容器の外側から内側へ、あるいは内側から外側へ、内容物（content）を出し入れする。
C. 容器も内容物も、ともに「物体」である。

（3）に示されるように、容器の概念は、人間の行動や心理的状態の叙述に用いることができる。

（3） a. He's *in* love.
b. We're *out of* trouble now.
c. He *fell into* a depression.
d. How did Jerry *get out of* washing windows?
（Lakoff and Johnson 1980/1986： 48-49 （渡辺ほか、訳））

（3）の例では、love、trouble、depression 等の抽象的な概念が、具象的な容器によって喩えられている。

2.1.1 メタファーの身体的基盤

以上の例から明らかなように、人間の概念体系の一部は、「構造のメタファー」、「方向の

メタファー」、「存在のメタファー」によって構築されている。これらのメタファーは、人間の身体的経験に根ざしている。概念体系と身体的経験の関係に関しては、山梨（2012）の次の指摘が参考になる。

> 日常言語の概念体系は、言語主体の身体的経験に根ざしている。その中でも、特に日常生活の伝達に関わる主観的な意味のかなりの部分は、言語主体と環境との相互作用に基づく身体的経験をその発見の背景的な基盤としている。また、一見したところ抽象的な概念として慣用化している意味のかなりの部分は、身体的経験によって動機づけられている。（山梨 2012：61）

この種の身体的経験としては、少なくとも（ⅰ）空間認知に関わる経験、（ⅱ）五感に関する経験、（ⅲ）運動感覚に関わる経験、（ⅳ）体感に関わる経験の四種類の経験が考えられる。（ⅰ）の身体経験は「上」、「下」、「前」、「後」等の空間概念に関わる。（ⅱ）の身体経験は、視覚、嗅覚、聴覚、味覚、触覚の基本的な五感に関わる。また、（ⅲ）の身体経験は、「走る」、「歩く」等のスピードやバランスと関わり、（ⅳ）の身体的経験は、「暖かさ」、「涼しさ」、「暑さ」、「寒さ」等の身体感覚に関わっている。ただし、これらの身体的経験感覚は独立して存在するわけではなく、これらの経験が相互に作用しながら、人間の概念体系の一部を特徴づけている。

本論文で、考察の対象とする植物に関わる概念の場合も、視覚、味覚、嗅覚など感覚を通して、その特徴を把握し、個々の植物独自のイメージを形成している。また、この種の身体的経験に基づいて、植物に関する言葉の概念体系が豊になっている。

2.1.2 経験のゲシュタルト

日常言語の概念体系を特徴づけるメタファーは、以上の考察から明らかなように、われわれの身体的経験に密接に関わっている。前述した ARGUMENT IS WAR、TIME IS MONEY、LOVE IS A JOURNEY のメタファーの場合には、具体的な身体経験を通じて、より抽象的な「議論」、「時間」、「恋愛」等の概念が喩えられている。

厳密には、「戦争」と「議論」との関係、「お金」と「時間」との関係、「旅」と「恋愛」との関係の概念は、完全に対応する訳ではない。例えば、TIME IS MONEY の場合、現実

には時間は取り戻せないし、時間の銀行は存在しない。このように、メタファーの概念には、完全には重なり合わない部分が存在する。このように、メタファーは、ある世界の一面には焦点を当てるが、他の一面は隠してしまう。

「戦争」や「議論」といった概念や経験は、多くの部分から構成されているものの、われわれは、それを 1 つのまとまった全体としてコンパクトに記憶に納めている。一般に、この種の記憶は「経験のゲシュタルト」（experiential gestalt）と呼ばれている。経験のゲシュタルトは、その構成要素は複合的であるが、その全体は単純であるという特徴を有している。このような経験のゲシュタルトを用いて、われわれは二つの概念の間に対応関係を見出すことができる。経験のゲシュタルトはあくまでも総合的経験であり、完全に他の経験に一致する必要はない。

経験のゲシュタルトの特徴から、一つの概念は複合的なものであることが分かる。次の例を見てみよう。

(4) a. LOVE IS A PHYSICAL FORCE（ELECTROMAGNETIC,GRAVITATIONAL, etc.）
b. LOVE IS A PATIENT
c. LOVE IS MADNESS
d. LOVE IS MAGIC
e. LOVE IS WAR

（Lakoff and Johnson 1980/1986： 78-80 （渡辺ほか、訳））

(4) の LOVE に関するメタファーの例から明らかなように、「恋愛」という抽象概念は、a～e のような多様なメタファーが可能である。(4) の例は、「恋愛」のような概念が、複数の経験のゲシュタルトによって解釈されることを示している。メタファーは、このような経験のゲシュタルトの多面性に基づいて、抽象概念の理解を可能としている。

以上のメタファーに関わる経験のゲシュタルトは、本論文で考察の対象とする植物のメタファーの分析にも重要な役割を担う。植物に関する多種多様なメタファー表現は、以上に考察した経験のゲシュタルトによって特徴づけられている。経験のゲシュタルトの概念を植物のメタファーの分析に適用することにより、日常言語におけるメタファーの体系性の一面を明らかにしていくことが可能となる。

2.1.3 メタファーと類似性

伝統的なメタファーの研究では、メタファーは客観的な類似性に基づくという前提で分析がなされている。これに対し、Lakoff and Johnson（1980）は、メタファーの類似性は、ゲシュタルト的な経験に基づく主観的な類似性に根ざしている、と主張している。

認知言語学のメタファー分析で注目する「類似性」は、客観的に存在する類似性ではなく、人間の具体的な経験を通して認知される主観的な類似性を意味する。具体的に、メタファーが創造していく場合、言語主体は、主観的に類似性を認知し、問題の対象世界を叙述していく。

植物のメタファー（例えば、「女性は花」のメタファー）の場合、この比喩表現は〈女性〉と〈花〉の間の類似性に基づいている。しかしここでの類似性は、形や外観などの類似性だけでなく、人間の主観的な評価や判断に関わっている。従って、「女性は花」の場合、人間の主観的な類似性の認知のプロセスを介して、メタファー表現が可能となっている。本研究では、植物についてのメタファーを考察する際に、以上の主観的な類似性の観点から考察を進めていく。

2.2 メトニミーとシネクドキ

メトニミーは、ある存在を、それに関係した他の存在によって示す言葉の綾の一種である。この場合、問題となる二つの存在の間の関係は、空間的な近接性、時間的（ないしは、因果的）な近接性に基づいている。この種の近接関係の典型例は、以下に示される。

容器－中身	材料－製品	主体－手段
主体－付属物	作者－製品	原因－結果

（山梨 1988：94）

以上の例から明らかなように、メトニミーに関わる近接性としては、「容器と中身」のような空間的な関係だけではなく、原因と結果のような因果関係も考えられる。また、メトニミーは、文脈の依存性とフレーム知識の共有にも関わっている。

シネクドキの例としては、以下の例が挙げられる。

（5）部分－全体

a. 手を貸す（［部分］手→［全体］人）

b. 赤鉛筆（［全体］鉛筆→［部分］鉛筆の芯）

（6）種－類

a. 花見（［類］花→［種］桜）

b. 人はパンのみに生きるにあらず（［種］パン→［類］食べ物）

（5）の例には、部分で全体を指すパターンと全体で部分を指すパターンが見られる。これに対し、「著者と著作」等のような関係は一方的な関係である。

（6）における「種–類」の関係は、厳密には人間のカテゴリー化の能力と関係している。このような分類的カテゴリーの概念自体は、容器のメタファーに基づいており、ここにメトニミーとメタファーの融合が見られる。

2.2.1 参照点構造

人間の心的操作には、参照点構造が反映されていると指摘している（cf. Langacker（1993））。参照点構造は、認知主体（C）があるターゲット（T）を示す場合、より注意を向けやすい参照点（R）にアクセスして、間接的にターゲットを認知することを可能とする。参照点構造の基本的な枠組みは、図 2-1 に示される（Langacker 1993：6）。

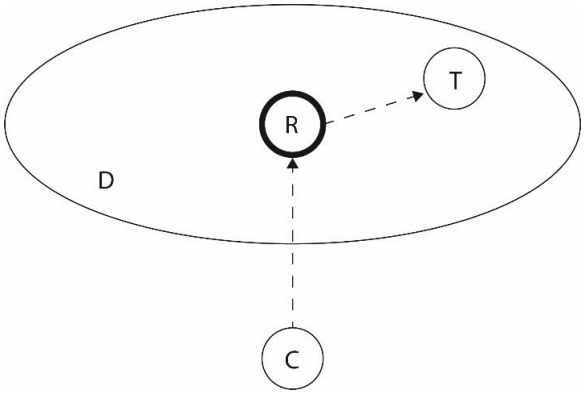


図 2-１ 参照点構造

この参照点構造には、参照点からターゲットへの一方向の心的経路（mental path）が関わっている。この場合、ターゲットよりも参照点のほうが認知主体にとってアクセスしやすい存在である。

この参照点による認知能力は、私たちの基本的な認知能力の一つである。前述したメトニミーやシネクドキのような言語現象にも、参照点構造に関わる認知プロセスが反映されている。

参照点構造によるメトニミーの解釈の例として、以下の例が挙げられる。

（7） a. He’s in the phone book.（彼（の名前）は電話帳にある.）

b. He ate an apple.（彼はリンゴを 1 個食べた.）

c. She ran out the clock.（彼女は時間を使い果たした.）

d. That car doesn’t know where he’s gone.（あの車（の運転手）は、どこへ向かっているのかわかっていない.）

（谷口 2003：129）

参照点構造においては、(8) に示されるように、基本的に認知的な際立ち（salience）が高い方が参照点となる。

（8） a. human > non-human（人間がそれ以外のものより際立つ）

b. whole > part（全体が部分より際立つ）

c. concrete > abstract（具体的なものが抽象的なものより際立つ）

d. visible > invisible（目に見えるものが見えないものより際立つ）

（谷口 2003：129-130）

この参照点構造に関わる際だちは、メトニミーの認知プロセスを特徴づける際だちと照合している。

また、「部分と全体」のシネクドキの認知プロセスは、参照点構造によって図 2-2 のように規定することができる。

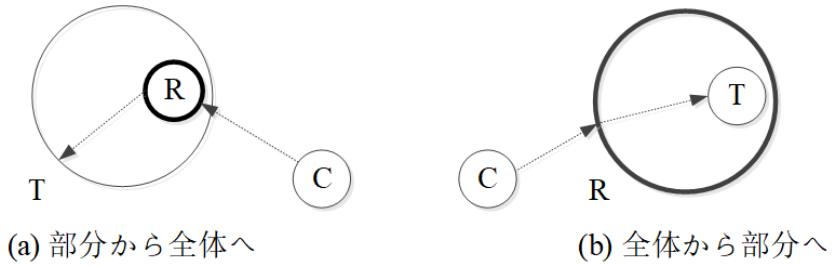


図 2-2 （谷口 2003：132）

この場合、「部分と全体のどちらが際立ち、参照点として選ばれるかは、それぞれのゲシュタルト性や、カテゴリーのプロトタイプ、さらに基本レベル･カテゴリーを中心とするカテゴリー階層での位置づけにも関係する」（谷口 2003：132）。

一般に、われわれが外部世界を認知していく際には、身近な分かりやすい、際だった対象を通して認知していく。この種の認知プロセスには、知覚の情報処理に関わる経済性が反映されている。

以上､本節で考察した参照点理論は､植物の意味拡張の分析にも有力な道具立てとなる。「椿」、「桜」、「紅葉」、「花が咲く」、「葉が落ちる」のような植物に関わる現象は、この種の参照点構造の認知のメカニズムによって捉えていくことが可能である。

2.3 カテゴリー化

植物学には、植物を門、綱、目、科、属、種等の分類が存在し、この分類に基づいて植物のカテゴリーの従属関係を規定している。このタイプの分類は、必ずしも外部世界に関する人間の主観的な分類と一致するとは限らない。例えば、われわれの植物に対する分類は、日常の経験等に基づいており、以上の植物学のような分類とは必ずしも一致しない。

陳（2016）は、植物の生物学的分類と日常的分類を、図 2-3 の（a）と（b）のように表示している。

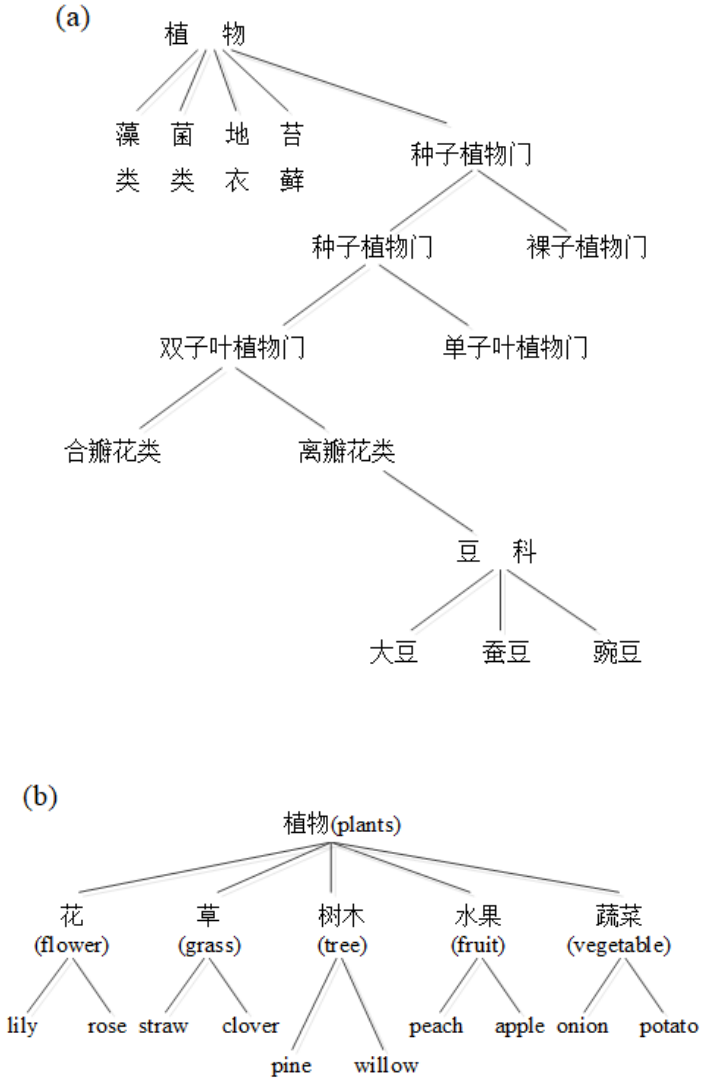


図 2-3

この図から、植物のカテゴリー化に対して、われわれは植物に対する日常的な概念と植物学上の概念の間に、大きな差異が存在することが分かる。カテゴリーに対する認識は単なる外部世界を区分するのではなく、われわれの知覚経験に基づいて、能動的に世界を解釈する際の主観性に根ざしている。

陳（2016）は、カテゴリー化は植物概念の構築、そして植物語彙の意味拡張に対して重要な役割を果たすと述べている。われわれの植物に対する概念の構築は、単純に上位レベルのカテゴリーに属する「植物」、下位レベルのカテゴリーに属する「バラ」、「桜」、「松」等に基づいて形成されるのではなく、基本レベルのカテゴリー（例えば、「花」、「草」、「木」、「実」等）に基づいて形成される。基本レベルのカテゴリーは、人間が植物に対する最も

基本的な認識を反映する植物の概念の基盤である。したがって、植物のメタファー表現に関しては、基本カテゴリーの「花」、「草」、「木」、「実」、「根」等のカテゴリーは、上位カテゴリーの「植物」のカテゴリーの数より多い。

この点について、陳（2016）は、次のように述べている。

> 植物隠喩是基于植物范畴概念进行文化感知的结果，是高于原型范畴之上的范畴化（日本語訳：植物に関するメタファーは、植物のカテゴリーの概念に基づく文化感知の結果であり、プロトタイプに基づくカテゴリー化である。（筆者訳））。
>
> （陳 2016：90）

谷口（2003：76）も、カテゴリーの階層性と同様に、メタファーには階層関係があると主張している。例えば、LOVE IS A JOURNEY のメタファーは、以下のような階層性によるものであると考えられる。

(9) A LONE-TERM PURPOSEFUL ACTIVITY IS A JOURNEY

↓

PURPOSEFUL LIFE IS A JOURNEY

↓

LOVE IS A JOURNEY

人間の認識の特性として、「基本レベル」のメタファーがもっとも活性化されやすい。日常言語では、目的に応じて柔軟に様々なメタファーが活性化される。

以上の点は、植物のカテゴリー化にも関係する。基本レベルのカテゴリーに属する植物は、イメージしやすい特徴を有する。例えば、基本レベルのカテゴリーに属する「リンゴ」は、その上位カテゴリーの「果物」の概念よりイメージしやすく、その下位カテゴリーの「赤リンゴ」、「青リンゴ」等と類似点が多い。換言するなら、基本レベルのカテゴリーに属するものは、人間のイメージ能力にも密接に関わっている。

2.3.1 プロトタイプと拡張事例

われわれは、日常の経験に基づいて外部世界をカテゴリーしている。日常言語においては、このカテゴリー化能力は、音韻レベル、形態レベル、統合レベル、意味レベルにわたり広範に観察される。山梨（2000）は、人間のカテゴリー化能力と認知プロセスの関係を以下のように記述している。

> 我々には、ある存在を一般的なスキーマによって特徴づけられるカテゴリーの一例として理解する能力がそなわっている。この種の能力は、一般に、スキーマにもとづくカテゴリー化の能力の一面を示している。カテゴリー化の能力としては、さらに、あるカテゴリーの典型的な事例（すなわち、プロトタイプ）と類似している新たな事例が存在する場合、類似性の認知プロセスを介して、後者の事例をそのカテゴリーの拡張事例としてとりこんでいく能力が考えられる。一般に、この種の能力は、プロトタイプにもとづくカテゴリー化の能力を反映している。カテゴリー化にかかわる能力は、これらの能力にかぎられるわけではない。複数の事例の間に認められる類似性の認知プロセスを介して、これらの事例からより一般的なスキーマを抽出していく能力も、カテゴリー化の能力の一面として注目される。（山梨 2000：180）

この種のカテゴリー化の能力の諸相は、次の図に示される。

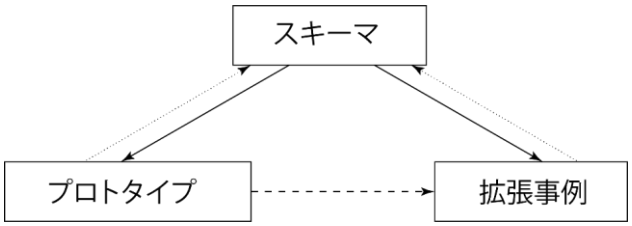


図 2-4 スキーマ、プロトタイプと拡張事例 （山梨 2000：181）

図 2-4 の、実線の矢印は、スキーマから具体事例への認知プロセスを示している。図 2-4 のプロトタイプと拡張事例は、いずれも上位レベルのスキーマからの具体事例として位置づけられる。破線の矢印は、プロトタイプとしての典型事例から拡張事例への認知プロセスを示し、点線の矢印は、プロトタイプの典型事例と拡張事例の類似性、共通性に基づ

いてスキーマを抽出していく認知プロセスを示している。

以上のカテゴリー化の問題との関連で、花のカテゴリー化を考えてみよう。例えば、日本語の場合、花の典型例としては、桜、菊、椿、梅の花などが考えられる。このうち、桜の下位類としては、枝垂れ桜、カンザクラ、染井吉野などが考えられる。これが、日本語の〈花〉の語彙体系の一面である。また、「～花」、「～木」、「～草」のような植物のネーミングには、語彙レベルのネットワークの拡張が観察される。

2.3.2 イメージ形成とスキーマ

われわれは外部世界の対象に関して、様々なイメージを作り上げ、このイメージを通して、外部世界の対象を把握している。またこのように作り上げられたイメージを変形する場合もある。この種の認知プロセスの中でも、特にイメージのスキーマ化の認知プロセスが注目される。

一例として、容器のイメージを考えてみよう。コップ、グラス、バケツなどは、容器の典型例であるが、これらの容器は、スキーマ化して理解される。スキーマ化された容器は、複合的な視点から把握される。そして、この種の複合的な視点が、日常言語の容器のメタファーに使用される。

図 2-5 は、容器のスキーマとこの容器のスキーマに関する複合的な視点を示している（山梨 2012：28－29）。

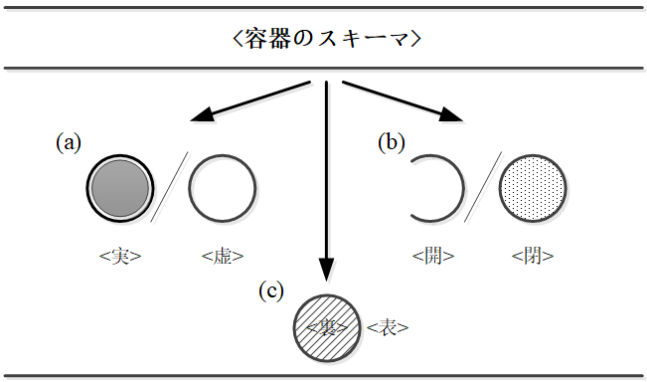


図 2-5

日常言語では、この容器のイメージスキーマに関わる複合的な視点は、（10）の各表現に

反映されている。

（10） a. 鈴木先生の講演は中味がなかった。〈実〉

あの政治家の頭は空っぽだ。〈虚〉

b. 彼はオープンな人だ。〈開〉

この子は心を閉じている。〈閉〉

c. この子は喜びが表に出ている。〈表〉

彼女の裏の面を想像するのは難しい。〈裏〉

（山梨 2012：28－29）

山梨（2000：146－152）は、容器のイメージスキーマのほかに、リンクのスキーマ、部分･全体のスキーマ、遠･近のスキーマ、中心･周辺のスキーマなどの存在を指摘している。この種のイメージスキーマは個々と独立しているではなく、相互にネットワークの関係で結びつけられている。イメージスキーマは、上位レベルのイメージスキーマと下位レベルのイメージスキーマによるネットワークを形成している。この種のイメージスキーマの相互関係は、以下の図に示される。

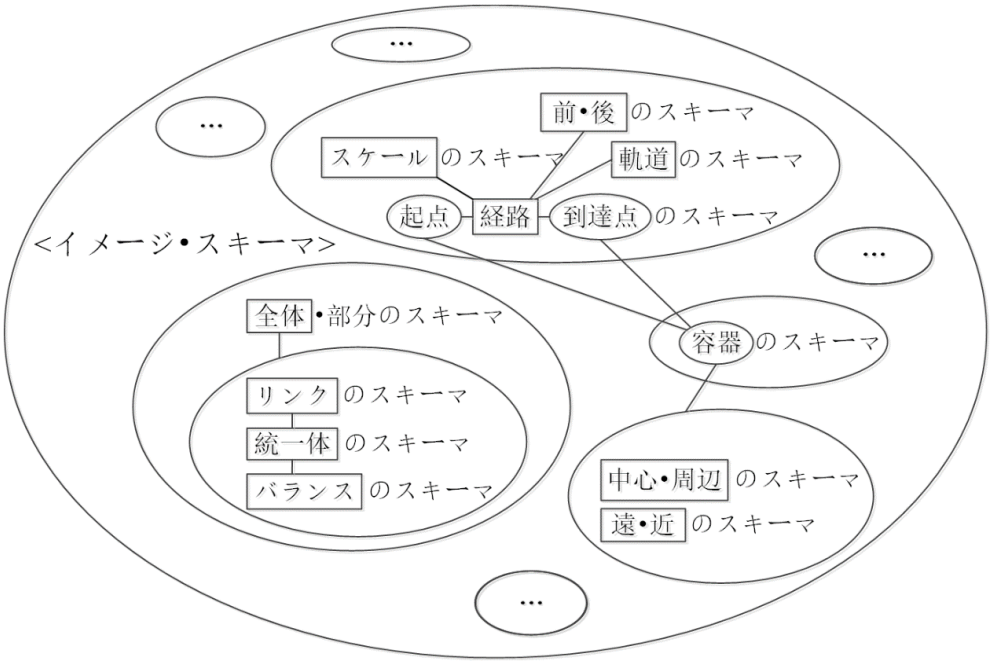


図 2-6 （山梨 2000：153）

谷口（2003：45－105）は、メタファー写像とイメージスキーマの関係を考察し、メタファーは、「起点領域」から「目標領域」へとイメージ･スキーマを写像する点を明らかにしている。例えば、LOVE IS A JOURNEY というメタファーの写像は、次のように規定される。

（11） LOVE IS A JOURNEY（恋愛は旅である）

起点領域：　空間（移動）

目標領域：　恋愛

イメージ･スキーマ：　「起点－経路－終点」のイメージ･スキーマ

（11）に示されるように、「恋愛」の概念から「起点－経路－終点」のイメージ･スキーマが抽出される。「恋愛」は「出会い」、「結婚」、「出産」など段階があり、「旅」の構造と照合する。また、MORE IS UP ; LESS IS DOWN のメタファーでは、「上下」のイメージ･スキーマに基づいている。これらの例を通して、メタファーは、概念領域の間のイメージ･スキーマの写像であることが明らかになる。

メタファーの写像は、図 2-7 のように規定される。このメタファー写像は、起点領域のイメージ･スキーマの構造が目標領域の本来の構造と矛盾しない「不変性原理」に従っている。

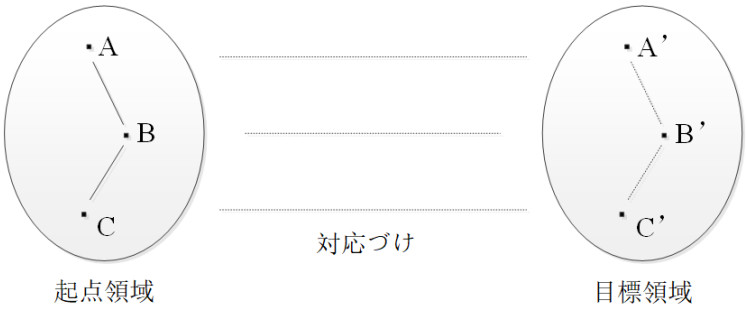


図 2-7（谷口 2003：62）

本論文で分析の対象とする植物に関するメタファーも、この種のイメージスキーマに基づいて、植物領域から抽象的な領域に写像がなされる。本論文では、日常言語の植物のメタファーも、「起点－経路－終点」のイメージスキーマや「上下」のイメージスキーマによ

って分析していく。

2.4 メタファーと文化

言葉の意味は、客観的に存在しているではなく、われわれの身体経験によって特徴づけられている。また、前述したように、言葉の意味の一部は、イメージスキーマによって特徴づけられている。一般にイメージスキーマには、個々の言語に関わる社会･文化的視点が反映されている。

山梨（2000：157－158）は、イメージスキーマと社会･文化背景の関係を図 2-8 ように表示している。

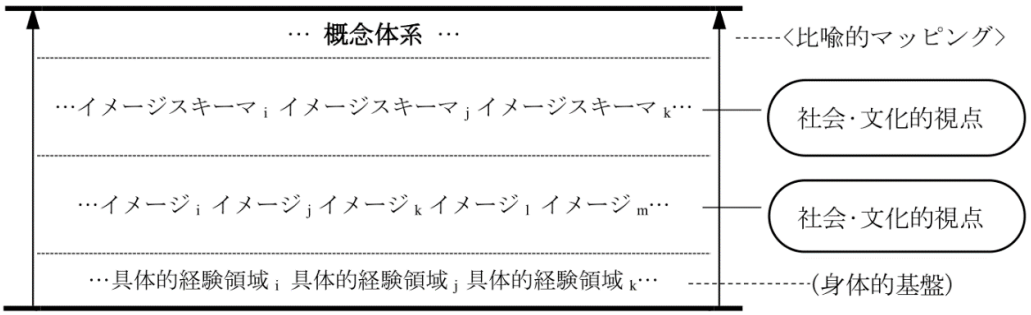


図 2-8 （山梨 2000：157）

基本的に、ある文化における最も根本的な価値観は、その文化の基本的な概念構造を特徴づけるメタファーと密接に関係している。この点で、Lakoff and Johnson（1980）が指摘する次の価値判断は興味深い。

（12） a. MORE IS BETTER

b. BIGGER IS BETTER

c. THE FUTURE WILL BE BETTER

d. THERE WILL BE MORE IN THE FUTURE

e. YOUR STATES SHOULD BE HIGHER IN THE FUTURE

（Lakoff and Johnson 1980：32-33）

（12）に示されるように、＜より多いことはより良い＞、＜より大きいことはより良い＞という価値観は GOOD IS UP のメタファーと関係し、＜未来は良い＞は、MORE IS UP のメタファーと関係している。また、＜地位は上がる＞は＜高い地位は上＞や THE FUTURE IS UP と関係している。また、この種のメタファーには、われわれの文化に浸透している価値観が反映されている。

さらに、メタファーに用いる価値観の優先性には、次の例に示されるように、個々の文化や社会の価値観も関係する（谷口 2003：28）。

（13） a. おのぼりさん

b. 上京する

c. 上り電車･下り電車

d. 都落ち （＝都から地方へ行かされること）

谷口（2003：28）は、メタファーと文化の関係について、（13）の日本語に特有の用例を挙げ、日本文化における「上と下」の方向のメタファーを指摘している。（13）の場合、首都は「上」、地方は「下」の概念は、「権力と地位は上」の価値観を反映している。

以上の考察から明らかなように、個々の言語の概念体系を特徴づけるメタファーは、その言語の文化･社会的な背景と価値観に密接に関わっている。本研究の考察対象である植物のメタファーも、個々の言語の文化･社会的な背景と価値観に密接に関係している。換言すならば、植物に関するメタファーは、その国の民族や社会、風習、歴史などと深い関係を持っている。本論文では、植物に関するメタファーの体系的な分析を通して、日中両国の言語と文化を特徴づける価値観や発想の違いを明らかにしてく。

第 3 章　植物の慣用表現についての認知的分析

認知言語学のアプローチでは、言語表現を、認知主体から独立した自律的な記号系としてとらえるのではなく、外部世界の主体的な解釈の直接的な反映としてダイナミックにとらえていく（山梨 2000 : 11）。言葉には、外部世界を解釈していく言語主体の様々な認知プロセスが反映されている。また外部世界の理解には、具体的な解釈のレベルからより抽象的な解釈レベルにいたる認知プロセスが関わっている。

本章では、認知言語学の視点から、日中両言語における植物表現の概念体系と意味拡張の諸相を考察していく。植物に関わる言語表現は、日常言語の意味の世界を豊かにしている。例えば、「花」、「草」、「木」のような言葉は、植物の物理的側面を叙述するだけでなく、イメージ･スキーマ、メタファー、メトニミー、連想等の認知プロセスを介し、人間の精神世界や抽象的な意味の世界を豊かにしている。特にこの種の認知プロセスは、日常言語の意味拡張のプロセスの基盤になっている。以下の 山梨（2000）の指摘から明らかなように、日常言語には意味拡張に基づく多様な表現が存在する。

> 日常生活のコミュニケーションの場で使われる言語表現のなかには、その言語の共同体によって標準的に容認されている適切な表現（ないしは慣用化された表現）、その共同体のなかで容認度がゆれる表現、その場において初めて創造される拡張的な表現まで、多種多様な表現が使われている。　（山梨 2000 : 199）

これまでの言語学の意味研究では、語彙レベル、句レベル、等のいずれの言語レベルであれ、言葉の文字通りの意味に関する研究は広範になされているが、言葉の創造的な意味の拡張に関わる言語現象の考察は本格的にはなされていない。この点は、日中両言語の植物表現の研究に関してもあてはまる。

このような現状を踏まえて、本章では、日中両言語における植物の基本カテゴリーの「草」、「木」、「花」を考察対象として、植物に対するイメージ形成、意味拡張の認知プロセスを分析し、植物表現の概念体系と創造的な意味拡張の諸相を明らかにしていく。また、植物

に関する以上の分析を通して、日中両言語における植物の慣用表現とこの種の植物表現に反映される日中の文化的な側面の共通点と相違点を明らかにしていく。

3.1 記号化と意味拡張

3.1.1 漢字記号の位置づけ

中国の漢字は、音声、字形、意味を組み合わせることで、中国語を記録するための視覚符号として機能する。最古の象形文字の時代から、漢字は、中国人が天地万物に対する認識を直接反映する記号であったが、人間の歴史の変化とともに、漢字の意味機能も変わってきている。中国語は、漢字が持つ意味を拡張するこにより、生命力を保ってきている。

漢字に関わる基礎語彙の意味研究には、まず表記体系の研究が必要不可欠である。日本語の表記体系について、阿辻（2010）は以下のように述べている。

> 日本語は、「漢字」と「ひらがな」と「カタカナ」という、それぞれ属性がことなった三種類の文字を、より正確にいえば、「漢字」という表意文字と、「ひらがな」、「カタカナ」（それに「ローマ字」） という表音文字を交ぜて書く言語である。このような表記方法は、世界的に見てもほとんど例がない。（阿辻 2010：23）

また、石川（2016：40）は、漢字に音読みと訓読みの違いがあるが、日本語の実体は、漢字語とひらがな語があって、ひらがな語に漢字がついていると主張している。いずれにせよ、阿辻と石川の主張は、日本語における漢字の表意的機能の重要性を示している。

漢字は、日本に伝わって以来、日本文化の影響を受けて日本語の一部として取り入れられ、新たな形や意味を生みだしている。また、漢字は日中言語と文化の接点の一部であると言える。

ここでは、植物に関わる漢字の一面を考察する。植物の面において、日中両言語における植物に関する表記は多様である。例えば、「ハナ」の場合、中国語の“花”は日本語の「花」、「華」、「はな」、「ハナ」等とどのような繋がりがあるのか。この種の漢字を使用する際には、どのような動機が働いているのか。これらの問題は、日中の漢字の使用に関する興味深い問題である。

蒋（2016）は『説文解字』に収録した植物に関する漢字を統計している。その統計結果によれば、植物に関する漢字で、「艸」（草かんむり）を部首とする漢字は 445 字、「木」を部首とする漢字は 421 字、「竹」を部首とする漢字は 144 字、「禾」を部首とする漢字は 87 字あり、収録した総計文字数の約 11.7%である。それに「瓜」、「米」などの植物と関係がある漢字を加えて、植物に関わる漢字は全体の 20%に達する。

この植物に関する漢字の膨大な数量から、人間と植物の密接な関係が理解される（図 3-1 を参照）。また、漢字の表形と表意機能に基づいて、植物に関する人間の認識の一面が理解される。

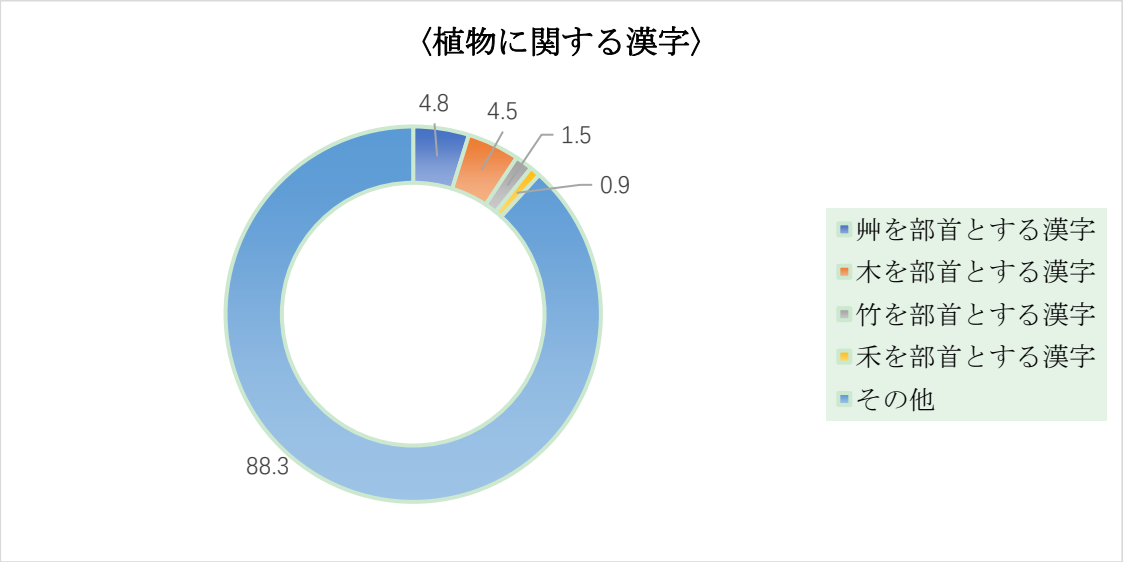


図 3-1 『説文解字』に植物に関する漢字の割合

3.1.2 漢字とイメージスキーマ

前節で述べたように、植物に関する漢字には、「草」と「木」に基づいたものが多い。そこでここでは、まず「草」と「木」の漢字字源を考察していく。

〈屮〉： 一棵草。甲骨文写作 ，金文写作 ，小篆写作 。象形字，像一颗草的形状：中间一竖为草茎，两侧为草叶。《说文》：“屮，草木初生也。象|出形，有枝茎也。”徐铉曰：“屮，上下通也。象草木萌芽，通彻地上也。”

〈草（艸）〉： 草类植物的总称。“艸”是“草”的本字。会意字，双屮为“艸”，表示草比较多。今天的“草”字，小篆写作，形声字，从艸，早声，原是“皂角”的本字。《说文》：“草，草斗，栎实也。”栎实即栎树的荚果，皂角也。后来“草”字被假借用以代替“艸”字来表示“草木”义，“艸”字就废弃了，并另造出“皂”字来代替“草”字表示“草斗，栎实”义。

（蒋 2016：11）

日本語訳：甲骨文の中に、一本の草はと表記され、土から出て、茎の両側に小さな葉っぱがついている植物の様子からである。漢字の変形とともに、金文のを介して、小篆にはのように変わった。『説文解字』には屮という漢字は草や木が生れた初期の状態に基づいたのである。

そして、草類の総称は艸のように表記され、艸は二本の屮が並列である様子から、草が多いの意味を表し、現在使用している草の本字となった。今 の草という漢字は、小篆にはと書いてあり、形声字である。『説文解字』にはの字は最初に草の意味ではなく、栎という木の実を表した。借りって草木の意味を表すようになった。

（筆者訳）

「草」の字についての解釈から分かるように、「草」の本字とする屮は、土から出てきた小さな植物という草のイメージを忠実に反映する。そして、「木」という字の意味は、下記のように、草の字形に基づいて地下から出てきたものであり、下は根の様であると説明されている。蒋（2016）の考察によれば、「草」、「木」の漢字は、言語主体の植物に対する素朴なイメージを反映している。

木冒也。冒地而生。东方之行, 从屮, 下象其根。 （《说文解字》p:114）

〈木〉： 木本植物的总称。甲骨文写作，金文写作，小篆写作。象形字，像一棵树木的形状；中间一竖为树干，上部为枝条，下部为树根。 （蒋 2016：2）

日本語訳：木本植物の総称である。甲骨文には、金文には、篆文にはと表記され、象形文字であり、木の様である。中に書いている縦線は木の幹を表し、上部は枝、下

部は根を表す。　（筆者訳）

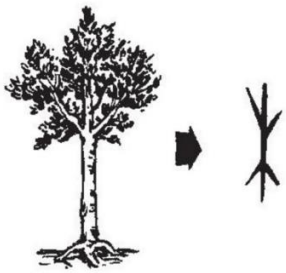


図 3-2 「木」の漢字字源 （《汉字演变 500 例》p：226）

山梨（2012：16）は、漢字の象形文字の変容プロセスは、スキーマ化の認知プロセスに関わっている事実を明らかにしている。例えば、「上」、「下」のような指示文字には、空間の方向性に関する認知プロセスが反映される。

本論文では、以上の考察を背景にして、植物に関する漢字の語彙に関わる意味拡張の諸相を考察していく。

> 外部世界との相互作用に基づいて形成されるイメージのレベルは、具象性をともなう表象レベルの一種として位置づけられる。このイメージ形成の能力は、われわれの認知能力の一部として重要な役割をになっている。人間には、この種の具象的なイメージのレベルからより抽象的なイメージの認知図式、すなわちイメージスキーマ、をつくりあげていく能力が備わっている。この種の能力は、外部世界の創造的な理解を可能とする人間の認知能力の根幹にかかわっている　（山梨 2000：140）。

「草」、「木」の漢字の意味変化は、草や木に対するイメージの抽象化のプロセスと関係している。この抽象化した草や木のイメージは、一種の記号として中国語に定着している。この抽象化のイメージは、イメージスキーマであり、人間の認知能力と関わっている。例えば、「草」、「木」のような漢字から、漢字にはイメージスキーマの機能を持つことが理解できる。このようにイメージスキーマ化される漢字は、一部に限られるが、言語主体は、外部世界に対する基本的な認識を通して、対象物の基本的意味を把握する。従って、植物の意味とこれにともなう植物のイメージの研究においては、植物に関する認識のプロセスが重要な役割をになう。

3.1.3 漢字と連想プロセス

「草」、「木」の漢字は、イメージスキーマ化されたものである。このイメージスキーマに基づいて、一定の連想を引き起こすことができる。「草」の字の場合、草に関する漢字表記とこれに関連する漢字の発展過程から、草に対する言語主体の認知プロセスを推測することができる。

屮は人間が草に対する視覚体験に基づいており、直接的に草について「小さい」、「目立たない」等のイメージを反映している。艸を用いて草木の総称を表す場合には、重複することを通して数量が増やすことを示す、という素朴な思考方式が働いている（図 3-3 を参照）。

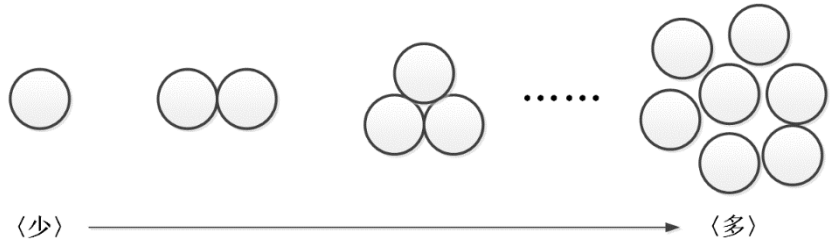


図 3-3

屮から艸への変化は、一本の草から草木の総称の意味拡張が伴って、〈部分―全体〉の認知プロセスも反映されている。寥（2015 : 12）によれば、現在使用している草の字は、「草」、「太陽」、「月」三つのスキーマを組み合わせたもので、植物と自然条件の関係を反映している。

『説文解字』の花についての記述は“本作华”である。つまり、花の字は“华”という字に基づいて作られている。“华”の字は最初に金文に現れ、咲いている花のようである。『説文解字』の中に“华，荣也”と記述して、植物が咲いている華やかなものは“华”であると定義も見られる（図 3-4 を参照）。

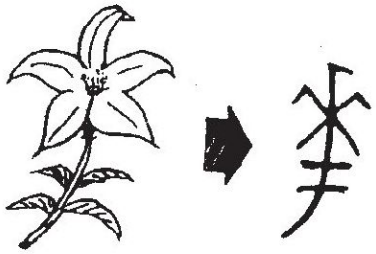


図 3-4 金文の「花」に関する図式（《汉字演变五百例续编》p：133）

《诗经•周南•桃夭》の中に桃の花が咲く時、盛んになった様子は“桃之夭夭，灼灼其华”のように描写し、ここでの“华”は桃の花の意味である。現在使用している花の字は、北朝に現し始め、“华”の俗体字である。その後、“花”は具体的な植物の生殖器官という意味を表し、“华”は抽象的な華麗、繁栄の様子を表すようになっている。

日本語には、「先端」の意味を表す「はし」の語から、咲いている植物に「はな」という言葉を当てる。このひらがな語に「花」の漢字が使われている。従って、日本語では、「花」の字は植物の生殖器官の意味と繋がっている。これに対し、綺麗な様子を表す場合は「華」がよく用いられる。この点は、以下の例から明らかである。

(1) A. 〈花がある〉の使用例

a. 植物は律義なもので関東地方より西では、ちょうどいまごろ、早春の光を集めて咲く花がある。

b. カジュアルなコップに１輪だけでも、間近に花があるのはとてもうれしく、おもてなしの心が伝わります。

B. 〈華がある〉の使用例

a. 落ち着いた色合いの中にも、上品で華がある気品が漂っているんです。

b. できれば桜庭さんみたいに華がある選手になれるように技術を勉強して、それを試合に出せるように頑張ります。

(1) の例が示すように、〈花がある〉の a と b は、植物の花そのものについてのイメージが引き起こし、〈華がある〉の a と b は、抽象レベルの「華やかさ」に関する連想を引き起こす。日本語では、漢字は唯一の表記符号ではない。従って、漢字語を使用する際には、必ず何らかの動機づけがある。例えば、〈はながある〉の例では、日本語における「花」と

「華」の使い分けが違い、異なる連想プロセスが喚起される。この種の連想プロセスの違いが、漢字の異なる意味拡張の基盤になっている。

3.1.4 漢字と植物の社会･文化的背景

「ウメ」、「モモ」、「ハス」など、中国原産または中国を経由して日本に伝わった植物とともに、「梅」「桃」、「蓮」に関する文化も日本に受け入れられている。このような植物に関する漢字の場合、「ウメ」のような仮名表記より、「梅」のほうが古典的、文学的なイメージを喚起しやすい。

中国の漢字は、中国文化を表すが、日本に入った漢字は日本文化と融合して、日本独特の符号になった。植物についての漢字は、同じ漢字であっても、文化の相違があるため、付与される意味にも大きな差異が生じる。寺井（2000）の研究によれば、「椿」、「柏」、「蓬」、「楓」などの漢字が示す植物のイメージは、日本と中国では大きく違っている。本節では、「蓮」、「椿」などの漢字を取り上げ、この種の漢字の使用に、どのような日中の文化の違いが反映されるかを考察していく。

▸ 「蓮」と「荷」

ハスは、日本と中国の両国において、歴史の長い植物である。日本語では、ハスは「蓮」と表記するが、中国語にはハスについての漢字が数多く存在する（表 3-1 を参照）。

表 3-1 日中両言語におけるハスの漢字表記

日本語		中国語
ヒラガナ	漢字	汉字
ハス	蓮	莲、荷、茄、蔤、菡萏、薏、水芝丹、芙蓉、芙蕖、扶渠

(2) 芙蓉如面柳如眉，对此如何不泪垂。[2]（唐•白居易《长恨歌》）

(3) 予独爱莲之出淤泥而不染，濯清涟而不妖。[3]（北宋•周敦颐《爱莲说》）

[2] 日本語訳：芙蓉は楊貴妃の顔のようで、柳は楊貴妃の眉のようです。これらを目にしてどうして涙を流さずにおられましょう。

[3] 日本語訳：私ひとりが蓮を愛した。泥の中から出ても染まらず、清漣に濯はれてもなまめかしくない。

(4)　接天莲叶无穷碧，映日荷花别样红。[4]（南宋•杨万里《晓出净慈寺送林子方》）

日本語は「蓮」と表記するのに対し、中国語には表 3-1 のように数多くの名称がある。日本語に使用される「蓮」の字源については、『爾雅』や『説文解字』[5]の解釈に基づいて、以下のようにまとめることができる。

“芙蓉”、“芙渠”はハスの全体を指す言葉で、“莲”、“茄”、“蔤”、“菡萏”などはそれぞれハスの一部分を指す。“荷”については、①ハスの葉っぱを指す、②ハスの全体を指すという二つの説がある。寺井（2000：123-144）は、「荷」の漢字の字源を考察し、「荷」の下半の「何」はもともと人が棒のようなものを肩に担う形から、「荷」には「になう」の意味が付与され、大きな葉を担った植物のことを指す可能性が高いと推測し、「荷」はハスの葉っぱから植物全体を代表するようになったと説明している。これは恐らく、中国では、ハスの葉が、人間の日常生活において重要な道具として利用されることに密接な関係がある。「負荷」、「重荷」などの語は、ハスのイメージに基づいて拡張されると考えられる。ハスに関する漢字から、人間はハスという植物をどのように認識しているのかが分かる。

ハスの日本語の語源については、「蜂の巣」という説が有力である。それに、「蓮」の漢字は、ハスの花が散った後に残る、果実の入れ物の部分だけを指すことばである。花や葉だけではなく、ハスの花房が注目を浴びたという事情もあり、昔からハスの実は薬や食における大事な原材料であることに関わっている。

ハスの漢字を考察した場合、ハスに関する漢字は、文化的要因に影響されていることが分かる。植物の漢字表記は、植物のイメージからきたもので、漢字を見てその植物の代表的な特徴を連想することができる。

▸ 「椿」は「ツバキ」か「チャンチン」か

日本では、ツバキの漢字は「椿」である。一方、中国語の“椿”は、「チャンチン」[6]を指すようになった。「椿」について、日本と中国でこのような相違があるのは文化的背景の相違が原因である。ここでは、「椿」の漢字の考察から、日中文化の繋がりを探っていく。

---

[4] 日本語訳：天に接す蓮葉の碧は無窮にして、映日荷花の紅は別の様なり。

[5] 『爾雅』は中国最古の辞書である。『説文解字』は、東漢の許慎が編集した漢字字源について分析した辞書である。

[6] チャンチンとは、中国を原産とする落葉樹である。チャンチンの木全体に特有の香りがあり、中国では葉を食用とする。

ツバキは、『古事記』、『日本書紀』に既に記述されており、『万葉集』には、ツバキを詠う詩歌は 10 首ある。このように、ツバキは日本では歴史の長い植物である。北陸の若狭には、「八百比丘尼」の伝説があり、ツバキは命をよみがえらせてくれる花である。ツバキの漢字については、「椿を用いるは、皇国に製る所の会意字なり」[7]と言う説明がある。日中両国の「椿」の漢字を比較することにより、ツバキが、日本文化と中国文化がお互いに影響を与えている証の一つであることが明らかになる。

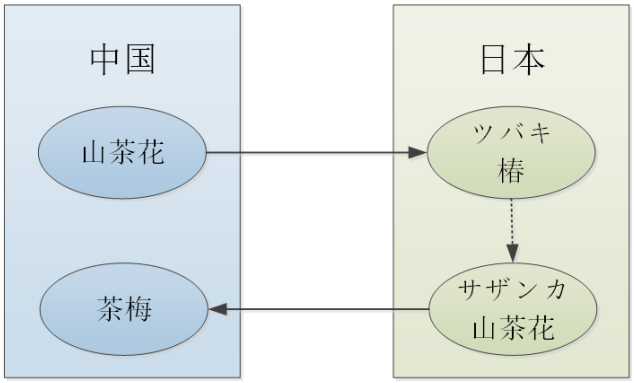


図 3–5 「椿」についての日中対照[8]

ツバキは、中国原産の植物で、唐の時代に日本は中国からツバキを輸入し、多数の品種を育てている（呉 *et al.* 2015：81-84）。中国では“山茶花”と呼ばれるこの植物が日本に伝わって、「椿」と名付けられた。また、「サザンカ」という日本が栽培した新たな品種が、中国に逆輸入され、「茶梅」と呼ばれるようになった（図 3-5 を参照）。

(5) 上古有大椿者，以八千岁为春，八千岁为秋。[9]（庄子《逍遥游》）

(6) 祝萱花椿树，虽则是子生迟暮，守得见这蟠桃熟。[10]（汤显祖《牡丹亭》）

7 其れ豆波岐の椿を用ゐるは、皇国に製る所の会意字なり。蓋し是の木、初春を以て華を開く。故に其の字、木に従ひ春に従ふ。草類の萩の草に従ひ秋に従ふに同意なり。（『箋注倭名類聚抄』巻十、草木部木類）

8 図 3-3 について、実線は日中両国の間に植物の輸入、輸出関係を表す。点線は日本国内のツバキとサザンカの関係を表す。

9 『逍遥遊』は、戦国時代の哲学者、文学者である荘周の著作『荘子(内篇)』の一篇である。ここでの「大椿」は、「八千歳を以て春と為し、八千歳を以て秋と為す」という長寿な樹のことである。

10 『牡丹亭』は、明代の湯顕祖が創作した劇本であり、ここで取り上げた例文は「訊女」の一節である。ここでの「萱花椿樹」は、両親の健康長寿への願いに関係する。

中国文化では“椿”は架空の長寿な神樹で、中国語に“椿齢”、“椿寿”の慣用表現が存在する。また、“椿”は、人間の長寿を喩えるメタファー表現でもある。この“椿”の漢字は、恐らく“春”が拡張した「生命力」の意味から、旺盛な生命力を持っている伝説の神樹のことを指すようになっている。中国のこのような“椿”のイメージに基づいて、日本では「神聖な木」とされ、寒中に強く生き生きと花が咲くため、「椿」の字を使用したと考えられる。

日本の国字説では、「蓋し是の木、初春を以て華を開く。故にその字、木に従ひ春に従ふ」のように、春に花が咲くというツバキの特徴からこの漢字を使用している。「椿」の漢字は、国字であるのか中国の漢字を借用したのか、どれも一理があるが、いずれも決め手が欠けている。寺井（2000）は、「名の背後に広がる意味の世界に至るまで正しく把握しようとしたものは、まことに少ない」点を指摘し、花木の名を訳す場合の問題を指摘している（寺井 2000：5）。しかし、いずれにせよ、「椿」の字から人間が植物と自然の関係を重視していることはが明らかであり、ツバキに関する漢字の考察を通して、日中文化交流の一側面を理解することが可能となる。

▸ **和製漢字の日本文化的な意味**

中国の漢字は日本に伝わってきたが、中国文化を担っている漢字は、日本文化を表現できない場合がある。そのため、日本文化を表現する機能を持たせるように、和製漢字が現われた。朱（2006：20）によると、会意法によって作られた和製漢字が圧倒的に多い。以下に示されるように、会意法を利用して新しく作られた漢字は、主に植物や魚類の表記に用いられ、日本独特の文化を反映している。

笹（ささ）、椙（すぎ）、桝（ます）、椚（くぬぎ）、槙（まき）、樫（かし）、榊（さかき）、栃（とち）、椛（かば）、糀（こうじ）

地名や苗字における植物に関する和製漢字は、植物が日本人の生活と密接な関係があることを示している。その中でも、「椛」は、① かば（樺の略字）、② もみじという二つの意味を持つ。「椛」は、「樺」に基づいて作られた和製漢字で、「樺」のもともとの意味を継いでいる。そして、この漢字は、「木」と「花」を組み合わせることから、「木の葉が花のように変化する様子」を意味し、日本独特の風物詩の「もみじ」の連想につながる。また、「榊」は、神社にサカキを供える習慣により、神様に供える木のことを表しており、日本

文化の独特の表現である。戦後、漢字の使用は制限され、多くの和製漢字が使用されなくなった。動植物の名称はかな書きにするのも多いが、地名や人名の中にまだ残っていて、日本文化の一面を象徴している。この点で、植物に用いる漢字表記は、記号化の一種として、言語と文化機能を担っていることが明らかになる。

次節では、カテゴリー別に基本概念の「木」と「草」の意味を分析し、言語主体の植物に対するイメージ形成の認知プロセスを考察していく。

3.2 植物と認知プロセス—「木」と「草」を中心に

3.2.1 「木」と「草」のカテゴリー化

日常生活では、植物の一部を「草」と「木」のカテゴリーに区分する。このような傾向は、前述したように、草と木の漢字の字源、そして植物に関する漢字の割合にも反映される。人間のカテゴリー化の能力は言語主体が外部世界を理解、解釈する際の重要な認知能力である。「草」と「木」のカテゴリーには、人間の植物に対するイメージ形成の認知能力が反映されている。この種のカテゴリー化は、「草」と「木」の意味の比喩的な拡張のプロセスにも密接に関わっている。

▸ 「木」の基本概念

前述した木の漢字の字源から分かるように、初期の木は、樹の意味を表す。次の例を見て見よう。

(7) 庄子行于山中, 见大木, 枝叶盛茂。(《庄子・山木》) (木—樹)

(8) 朽木不可雕也。(《论语》) (木—材料)

(9) 无边落木萧萧下，不尽长江滚滚来。(唐•杜甫《登高》) (木—葉っぱ)

(10) 他们家种有十五六棵板栗树。(《总书记来到俺山村》) (木－樹)

(7) の“大木”は大きい樹の意味である。(8) の“朽木”は、具体的な樹の意味から、木材の意味に拡張している。また、〈原材料—製品〉の関係で、木で製造されるものは“木～”とネーミングする場合が多い。この種の関係に基づいて、「木」の概念は、木材、木製

品、葉、さらに棺等の意味に拡張されている。

現在の中国語では、「木」の意味は主に木材の意味を表し、この「木」の抽象化とともに、中国語には“树”の字が、生きている植物としての木の意味を表すようになった。日本語には、「木」と「樹」が両方とも使用される。この使い分けは、中国語にも見られる。

▸ 「草」の基本概念

中国語では、「草」は、“草是对茎秆柔软的植物的统称，广义上也包括部分庄稼和蔬菜”と考えられる[11]。日本語では、「植物で、地上部が柔軟で、木質の部分が発達しないもの」（『大辞泉』1998：745）と述べられているように、草は木に対して、茎が柔らかい植物の総称でである。

次節では、以上の考察を背景にして、「草」と「木」のイメージ形成とカテゴリー化の関係を分析していく。

3.2.2 身体的経験と意味拡張

▸ 「大」と「小」のイメージ

1980 年代、中国では名映画《芳草心》により《小草》という曲が流行ってきた。歌詞の中には“没有花香没有树高，我是一棵无人知道的小草”（花のようないい匂いがなく、樹のように高くないが、私は誰も知らない小さな草である。 筆者訳）の句があり、“小草”は、名無しの普通の人間の喩えとして使われている。実は、古代中国語には既に“草民”などの表現があり、庶民のことを指していたが、これは「草」に関する「小ささ」のイメージに基づいている。

（11） 她也想转回北京来，怎奈她的爹娘都是平头百姓，一介草民，没有后门可走。

（《孤村》）

（日本語訳： 彼女も北京に戻りたがっているが、両親は普通の人間で、ほかの方法がなかった。 （筆者訳））

[11] ここでの定義は漢典（http://www.zdic.net/ 2019/02/21）を参照したものである。また、《现代汉语词典》（第七版）には「“高等植物中栽培植物以外的草本植物的统称”（高等栽培植物以外の草本植物の総称）と定義している」（2016:129）。

これに対して、「木」の場合には、“大树”は権威、頼りの意味があり、また“背靠大树好乘凉”は頼りを見つかるという意味に拡張している。この種の意味形成は、樹に対する「大きい」のイメージに基づいている。

（12） 如有这条裙带，她男人和儿子就有大树乘凉了。 （《重婚记》）

（日本語訳：こんな関係が持っていれば、彼女の夫と息子は頼りがある。（筆者訳））

以上の「大きい」と「小さい」のイメージは、言語主体のモノの知覚に関する身体的経験に基づいて形成される。この場合、以下の図 3-6 が示すように、木、草に対する視線変化がこの身体的経験の基盤になっていると考えられる。

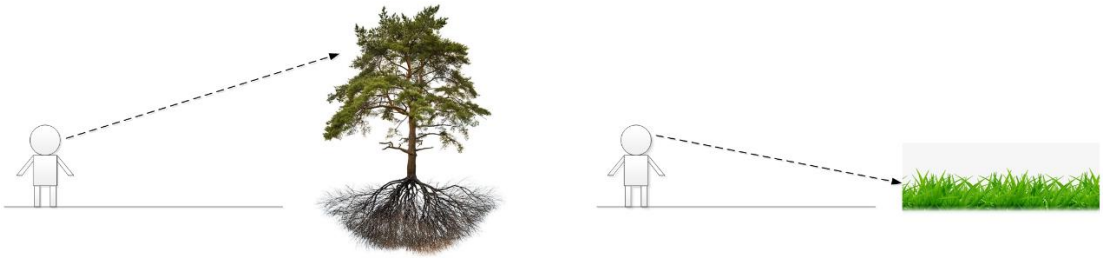


図 3-6 「大」と「小」の判断基準

大小、高低に関する感覚は相対的な概念であり、「大きい」という概念がなければ、「小さい」という概念も存在しない。大と小に関する判断基準は、一定しているわけではない。ここでの植物に対する「大」と「小」のイメージは、主体の視点の高さによって相対的に形成される。

Lakoff & Johnson（1980/1986： 23－24 （渡辺ほか、訳））では、「地位が高いのは上、地位が低いのは下」の方向のメタファーを論じ、この種のメタファーが身体的経験の基盤に基づいていると主張している。

本節で考察する「草」と「木」の場合は、言語主体の視線が左右される。上から下への視線で考えた場合、草は、地面に近くて、小さいから目立たない存在である。政治的な支配階級から見る場合は、庶民は目立たない草のような存在である。そのため、“草民”、“草芥”は、封建社会で庶民のことを指した言葉で、現在は殆ど使用しないが、“小草”は普通の人間であるという意識がまだ残っている。逆に、「木」に対する「高い」というイメージ

に基づいて、権威がある人間、権力への連想が引き起こされる。従って、「草」の空間的「小」、「低さ」、「木」の「大」、「高さ」は、抽象的な意味に拡張され、人間の権威、身分を表すようになっている。また、ここでの「小」と「大」は、人間の年齢、身長などの外的な条件ではなく、地位、身分、権力など社会関係に関わっている。

▸ 「堅さ」と「柔らかさ」のイメージ

山梨（2012：75）は、形状モードと人間の内面世界の関係に関し、（13）の例を挙げている。そして、この種の表現には、図 3-7 のような形状のモードが関係しているとしている。

（13） a. 彼女はまっすぐな人だ。

b. 彼女は屈折している。

c. あの男は性格的にねじれている。

d. 彼の心は曲がっている。

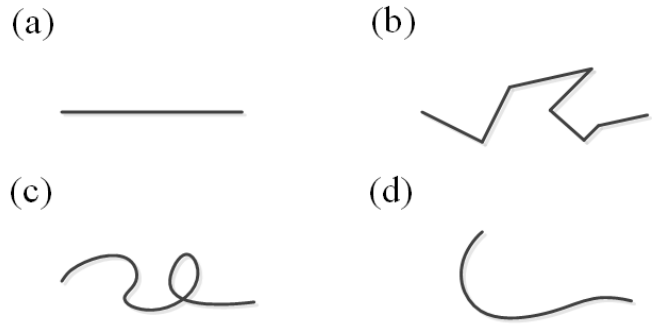


図 3-7 （山梨 2012：75）

このような形状による人間の内在的特性を描写する表現は、英語にも straight、twisted 等があり、この種の表現は中国語にも見られる。このように、形状のイメージは、抽象的な概念領域に拡張することができる。

前述した「草」の定義から分かるように、草の「柔らかい」という特徴は、われわれに意識されている。これは「草」と「木」を区別する根本的な違いである。草の「柔らかさ」と木の「堅さ」に対するイメージは、主体の視覚、触覚等の身体的経験と関わっている。この種の感覚は、図 3-8 のように形状として表現することができる。木に対するイメージ

は形状モード（a）で表すことができ、草に対するイメージは形状モードの（b）で表すことができる。このような「草」と「木」に関する形状的なイメージは、人間の内面世界の表現に比喩的に用いられる。

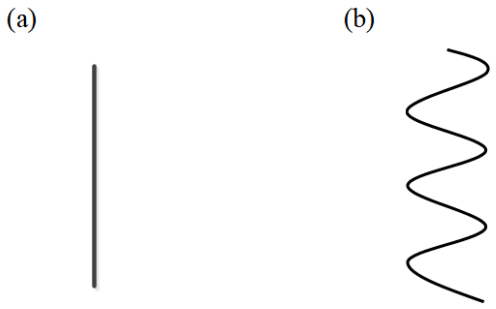


図 3-8

中国語には“随风草”、“墙头草，两边倒”などの表現があり（例（14））、意志が弱い、自分の主張を伸ばせず、強い方に偏る人間の喩えとして使われる。草の「柔らかい」というイメージから、「動揺しやすい」性格への連想が引き起こす。この場合には、草に対するマイナス的な評価が与えられる。また、草の「細長い」、「柔らかい」という特徴は人間の感情領域にも拡張して、繊細な感情（主に恋の気持ち）の表現となる。特に、秋の草は「離れがたさ」、「悲しさ」の感情を引き起こしやすい。この植物に関する形状モードと感情の関係は、4.3 で詳しく分析していく。

（14） 她与我以往碰见过的那些墙头草式的人物太不一样了！ （《约稿记》）

（日本語訳： 彼女は、以前と出会った動揺しやすい人間と全く違うタイプである。（筆者訳））

（15） 他常对润格说：做人要象高树迎风傲立，莫管它残秋向尽，金风劲吹…（《女伶》）

（日本語訳： 彼は潤格によくこんなことを言った：人間は木のようにまっすぐに生きるべきだ。秋が近づいてきても、風に吹かれても… （筆者訳））

一方、（15）のように、「木」の「まっすぐ」、「堅い」のイメージは、人間の「動揺しない」、「しっかりする」などの内面世界への描写としても使われる。この場合の「草」と「木」

に対する「柔らかい」と「堅い」のイメージは相対的な概念である。この種のイメージに関わる意味拡張も、外部世界を認識する言語主体の身体性な経験を通して可能となる。

▸ 「順序」と「無秩序」のイメージ

草は場所を問わずどこでも生える生き物で、旺盛な生命力を秘めている。特に、春から夏の気温上昇に伴い成長する。この種の草に関するイメージは、文学の世界にも反映されている。

唐の詩人の白楽天は“野火烧不尽，春风吹又生”[12]の詩句を詠み、春が来て草は再び蘇るという草の生命力に感嘆している。風に吹かれても、人間に踏まれても、草は生き続ける。このような成長の特性は人間の精神領域へ投射し、“坚韧”、“顽强”という性格の喩えとして使われる。「草」の生命力に関する日本語の表現としては、以下の（17）の a における「雑草」の表現が注目される。この種の表現は草の生命力に焦点を当て、「しぶとさ」の性格を喩えている。

（16） a. 说杂，因为这些短文将很杂是毫无疑义的，说草，原因不过是草，自己文章非锦绣，也非名花奇葩，只好是杂草了。 （《三四杂草》）

（日本語訳：雑と言うのは、これらの短篇はばらばらに決まっているからであり、草と言うのは、自分の文章は名作ではないので、雑草のようなものだ。 （筆者訳））

b. 三十多年前的水花生，是人们必欲除之而后快的恶性杂草，真可谓声名狼藉。

（《“绿色钾肥库”——水花生》）

日本語訳：三十年前の水花生は、人間は必ず除く悪い雑草であり、名声はかなり悪いと言える。 （筆者訳）

「草」の「しぶとさ」のイメージは、草の成長は場所を問わず、どこでも自由に生きられることに関係している。このイメージは、「無秩序性」にも関係する。草の「無秩序性」のイメージは、ルールから外れるという連想にも関係する。例えば中国語では、“杂草”は必要ではない価値のない人間や物事の喩えとして使われる。また、生えるべきではない場所に成長するという点で、良いものの邪魔になる悪物の意味も附与される。

[12] 野火烧不尽，春风吹又生。（唐•白居易《赋得古原草送别》） 火に燃やしても絶えず、春風が来てから再び蘇るの意味であり、草の生命力を表現している。

草の「無秩序性」は、場所を問わず生きる特徴を有する以外に、前述した曲線の形状モードにも関与している。日本語には、このような「無秩序性」について、不安定への連想もあり、(17) の b のように、人間の仕事や生活の不安定を喩えている。

(17) a. 「政治家になりたくてなったタイプ」も、自己愛は強い。でも、その自己愛には、もっと雑草のようなしぶとさがあるように思う。

b. 「浮草稼業はいい加減にやめて、郷里へ帰って身を固めろ」父にいわれたのは一九七六 …

ここまでの「草」の意味拡張は、草に対する「無秩序」のイメージに基づいたものである。このようなイメージが形成されるのは、山梨 (2000) の指摘する〈統合的視点〉と〈離散的視点〉の認知プロセスと関係している。この二つの視点は、以下の図に示される。

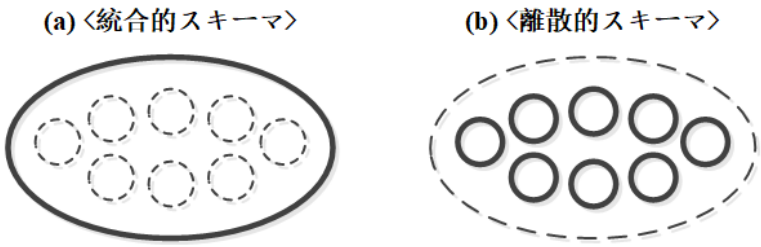


図 3-9 (山梨 2000： 77)

統一体と離散体のスキーマは、一体性の有無に関わる抽象的な概念が理解される際の背景的なスキーマとして機能する。

植物を認識する場合にも、この統合的視点と離散的視点の認識が関係する。この種の認知プロセスは、植物に関する言語表現の意味拡張に影響を与える。例えば、一本の草の場合は、前述した曲線のような「柔らかさ」のイメージが形成しやすいが、「無秩序」のイメージは形成されにくい。草が盛んに茂っている場合には、乱れている「無秩序」のイメージが形成される。

このようなイメージは、「草」という字の品詞性の拡張にも影響が与える。統合的視点から、草の生き生きとする姿は「乱れる」、「フォーマルではない」への連想につながる。「草」が副詞、形容詞として使用する場合、中国語には“草草了事”、“草拟”、“草书”、“草稿”、

“草案”等の表現があるが、日本語には「草書」、「草々」など似たような表現もある。「詠草」は、和歌、俳句の草稿を表すが、その後、和歌や俳句の専門的な格式の意味となっている。

また、日本語では、「草」は接頭辞として非正式の意味を表す。「草芝居」、「草競馬」、「草野球」などは、地方的、非政府的、非専門的の芝居、競馬、野球を表す。また中国語には、“草台班子”（地方的、非専門的な集団、特に劇団のことをいう）のような言い方がある。ここでの「草」は、場所のメトニミー関係による意味拡張とも考えられる。また、接尾辞とする「草」の場合、「言い草」、「語り草」は会話の素材の意味であり，「お笑い草」はネタの意味を表す。ここでの「草」は、ルートの意味で、空間的な隣接性に基づくメトニミー表現と考えられる。メトニミーと意味拡張の関係については、次節で詳しく考察する。

一方、「木」の場合は、主幹から幹や枝等が広がっている状態はプロトタイプ的な状態である。このように各部分が繋がっている状態には連続性がある、一定の「秩序性」があると言える。従って、このイメージに基づいて、「樹形図」、family tree のような表現が生み出されている。このような「木」のイメージは、「幹」、「枝」、「節」等が統合して形成され、一つの全体として観察される。「木」に対する「秩序性」や「草」に対する「無秩序」のイメージは、視線の <統合> と <離散> の認識に関係する。

以上の考察に基づき、「草」と「木」に関するイメージは、以下のようにまとめることができる。この種のイメージは、言語主体の外部世界の認識に関する身体的経験と深くかかわっている。例えば、「草」と「木」に対する高い、低い、大きい、小さい等の評価基準は相対的な基準であり、言語主体の主観性とも関係がある。

「草」と「木」の意味は、「草」と「木」のイメージに基づいて、メタファー的／メトニミー的に拡張することができる。

〈草のイメージ〉： 柔軟、目立たない、地味、無価値、生命力がある etc.

〈木のイメージ〉： 堅い、大きい、高い、連続性がある etc.

また、人間の生活の面から見た場合、農作業では除草作業が行われるため、草は殆ど生えない。このような状況では、「草」は人間の生活以外の範囲をマークする。中国語では、“草木深”という表現は、草や木が茂っていて人間がいないことを暗示で、衰落の意味を表す。日本語では、「草葉の陰」は墓地の場所を暗示し、また「草深い」を用いて農村、田

舎などの状況が意味される。このように、草に関する「農村」、「衰落」のイメージは、人間の活動範囲と深く関わっている。この認識は、人間の空間認知の経験に関わっている。以上の問題に関しては、山梨（2012）が指摘する以下の図が参考になる。

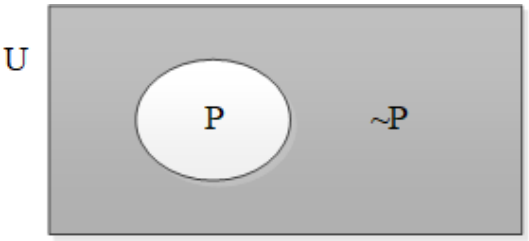


図 3-10 （山梨 2012：85）

図 3-10 は、空間認知が関わる領域の図式である。この場合、全体集合は U で示し、集合 P を除いた部分は～P で示す。P の集合の白いサークルの外の領域は、P の〈否定〉の領域として規定される。

この図との関連で、上述の人間の生活領域を考えた場合、U はわれわれが生活しているこの「世界」、人間の生活領域は P、P 以外の空間領域は、人間の生活範囲を越える外の領域と規定することができる。また、～P は、「草」を代表とする「自然界」の領域と考えられる。この図から分かるように、空間に対する認識の領域は、〈生活活動の領域〉と〈生活活動以外の領域〉に区分することがでる。

3.3 植物と認知プロセス—〈花〉を中心に

陳（2016：96－115）は、「樹」、「枝」、「果」、「種」、「葉」、「根」、「花」、「草」、「核」、「茎」、「苗」、「刺」、「竹」の 13 の基本語彙を中心に、中国語と英語における植物に関する語彙の多義性を考察している[13]。その統計結果によると、〈花〉の拡張意味が、中英両言語ともに一番多いという報告がされている。以下では、この統計結果を背景として、日中両言語における〈花〉の意味拡張の認知プロセスを分析していく。

[13] 陳(2016)は、英語国家コーパス(BNC)と北京大学現代漢語コーパス(CCL)に基づいて、植物に関する語彙の使用頻度を統計し、この 13 コの基本語彙を抽出している。また、《现代汉语大词典》、《英汉大词典》の解釈により、これらの基本語彙の意味拡張の統計を出している。

3.3.1 〈花〉のイメージ形成

われわれは、外部世界の対象に関して何らかのイメージを作り上げ、このイメージを介して外部世界の対象を把握している。イメージは、具体的な経験に基づいて形成される心的表象の一種である。われわれは、具体的な経験によって作られたイメージを介して世界を把握しているだけではなく、状況によって具体的なイメージを操作し、このイメージ操作を介して世界を理解し意味づけしている（山梨 2012：12）。

本節では、まず、容器のイメージを考えてみる。容器の例としては、コーヒーカップ、ペットボトル、缶、紙コップ等が、その典型例として挙げられる。図 3-11 の（a）から（c）ように、これらの容器には、材質や大小など相違が存在するが、個々の特徴を捨象し、容器の共通性を抽出することができる。この抽象化した概念は、イメージスキーマとして、図 3-11 の（d）のように規定される。

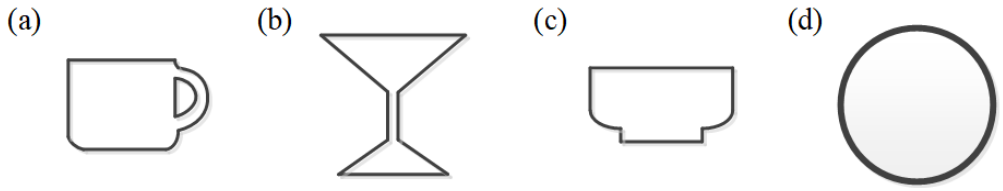


図 3-11 （山梨 2012：13）

このスキーマ化の認知プロセスを参考にして、花に関するイメージスキーマを抽出することができる。例えば、図 3-12 の（a）から（c）のように、バラ、キク、ハス等の形はそれぞれ異なるが、これらの花に関し、花の共通のイメージスキーマを、図 3-11 の（d）のように抽出することができる（図 3-12）。

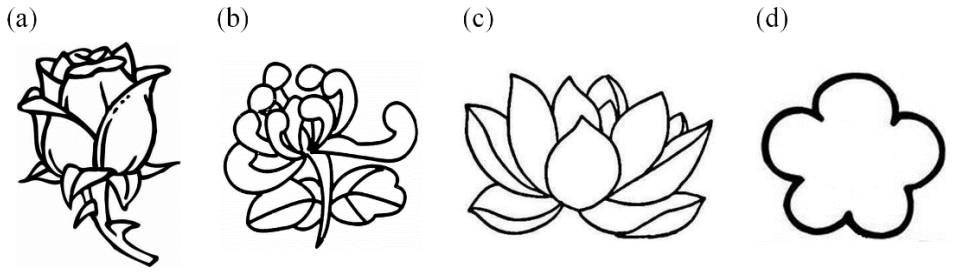


図 3-12 〈花〉のイメージスキーマ

3.3.2〈花〉のカテゴリー化

〈花〉について、中国語には“种子植物的繁殖器官。有各种形状和颜色”（種子植物の繁殖器官。さまざまな形や色を持つ。　筆者訳）というように定義する。日本語には、〈花〉の定義は「植物器官の一つで、茎、枝の先に時定めて開く物。一定の時期に美しい色彩を帯びて形づくるもの。植物で一番目立ってきれいな部分」とまとめることができる。以上のような定義から分かるように、生物面では〈花〉というものは植物の生殖器官の意味を表す。しかし、日常会話などの場では、〈花〉は以下の用例のように捉えられる。

▸ メトニミーと隣接関係

次の（18）の例をみて見よう。（18）の a の花は、「花そのもの」と「初夏に花が咲く植物」という二通りの解釈ができる。

（18）　a. 喜庵のある山崎の天王山、園城寺の長等山に時鳥の声をきき、卯の花・藤・蹲蹲と初夏の花々が咲きほこる。

b. それを隠すためには室内ならば花や観葉植物、外部ならば木や花を植えたり、ガーデニングで補うことができます。

c. また、すみれやつくしなど季節の花々を象ったガラス細工のような飴はお土産にも喜ばれる。

また、b の二つの花のうち、前者は盆栽、後者は草花の意味として捉えるのが自然である。さらに、c の花はすみれ、つくしという具体的な植物を指す一方、より広い範囲の季節の植物（花が咲かなくても）を指す可能性もある。また、「花を活かす」という生け花や生け花に使う材料、そして「仏花」、「供花」のような神仏に供える花や枝葉（花のついていない枝葉などをもいう）も〈花〉と言える。このように、〈花〉に対する理解には柔軟性があり、「花そのもの」、「茎や葉が付く花」、「鉢や庭に植える開花植物」、さらに「花が咲かない一般的な植物」等は、全て〈花〉のカテゴリーに取り入れられている。

植物を表す場合には、〈花〉の意味は、以下のように分けられる（図 3-13 を参照[14]）。このような〈花〉の意味変化は、イメージの焦点化･背景化と関わっている。「花そのもの」

[14] 図 3-13 は、それぞれ〈花 1〉、〈花 2〉、〈花 3〉を示す。〈花 4〉は、これらの意味から抽出する抽象概念と考えられる。

と「植物体」の間の視線の焦点化によって、〈花〉の意味は柔軟に変わっている。視線の焦点化だけではなく、〈花〉の意味拡張は、認知能力の他の側面も反映している。

〈花 1〉： 植物の生殖器官、花そのもの。

〈花 2〉： 花が咲いている植物、茎や葉が付く。

〈花 3〉： （花が咲かなくても）一つの植物体。

〈花 4〉： 自然美の代表として植物を総称する。

図 3-13

Lakoff & Johnson（1980）は、メトニミーへの研究を参考して、この近接関係に基づくメトニミーのパターンを以下のようにまとめている。

〈製作者—製品〉

〈物品—使用者〉

〈コントロールするもの—コントロールされるもの〉

〈機関—責任者〉

〈場所—機関〉

〈場所—出来事〉

〈部分—全体〉

〈容器—内容〉

〈主と従の共存性〉

〈主体—手段〉

〈原因—結果〉

メトニミーに関するこれらのパターンは、〈容器―内容〉のような空間的な隣接性のほか、〈原因―結果〉のような時間的順序が関与するパターンも存在する。このように、メトニミー表現が成り立つのは、空間や時間概念に関する理解に基づいている。

花は植物の生殖器官を表すが、空間的な隣接関係で、生け花や仏花のような葉や枝がついている部分も、花のカテゴリーに取り入れられている。そして、〈材料―製品〉のメトニミー的関係により、花に因んだものも花とも呼ばれる。中国語には、“花青色”は花の搾り汁を原料としたところからきた言葉であり、日本語の「頭には花を塗り」の花は、ツユクサの花びらから搾り取った青色の絵の具のことを指す。花は顔料、化粧品などの原材料として幅多く使用されるので、製品名の中に含まれ、人間の日常生活と密接な関係がある。近接性と意味の拡張は、記号化の問題として考えられる。言語主体が世界を伝える際に、問題の対象の全てを描くことが不可能である。このような伝達のプロセスには、言語主体の認知の制約だけではなく、伝達の効率性も関わっている。山梨（1988）は、以下に示されるように、この種の言語的ストラテジーは、言葉の意味を変化させてく重要な原動力であると指摘している。

> 言葉の歴史的な変化の過程をみた場合、このようにその対象世界の一部に焦点をあてながら、しかも同時に背景的その全体像を伝えていくプロセスが言葉の意味作用に大きな影響をおよぼす。（山梨 1988 : 148）

▸ **シネクドキと認知の柔軟性**

前述の〈花 3〉は、〈花〉が、具体的な花から植物全体の意味として捉えられることを示しているが、このような〈部分―全体〉の関係はシネクドキとして考えられる。シネクドキの特徴は、〈部分―全体〉の関係と〈種―類〉の関係に基づく。

まず、〈部分―全体〉の関係で、花を用いて植物体を指すような〈部分〉で〈全体〉を表す場合がある一方、（19）の a と b のような表現がみられる。

（19） a. 明るい初秋の宮殿の中庭だ。柔らかな風には、キンモクセイの香りが混ざっている。

b. ひと重のバラはひらひらとした花びらの軽さがいちばんの魅力。

（19）の a のキンモクセイは、キンモクセイの枝や葉ではなく、いい匂いの花のことを指す。これはキンモクセイという植物には、香りがある花が咲くという知識に基づいている。また、b のバラは、一つの植物体を指すのではなく、ひと重の花そのものの形を指している。

言語主体が知覚するのはバラの花であり、かならずしもバラ全体が視界の中に入っているわけではない。（19）の a と b は、いずれも〈全体〉で〈部分〉を表示する。このような解釈は、〈部分〉と〈全体〉に関する認識レベルの知識に基づく解釈である。従って、これらの表現は、主体の認識レベルの機能に関わっている。〈部分―全体〉の表現と認識レベルの関係に関し、山梨（1998）は以下のように述べている。

> 提喩として問題になるこれらの表現は、外部世界の部分･全体の知識から見れば、省略をともなう指標的な表現と解釈できるけれども、認識のレベルからするならば、その表現が、その知覚され視界の中に入ったものを直接的に生き生きと描写している文字通りの表現と解することもできる。（山梨 1988：106）

（20）の例は、京都にある歴史的名所醍醐寺の「花見」に関する記事である。日本では「花見」は春が訪れの行事で、ここでの「花」は春を代表する花であるところから、ほかの花ではなく桜である。「花見」以外の「花便り」、「花が咲く」の花も基本的に桜を指す。

> （20） 平安時代から「花の醍醐」と呼ばれるほどの桜の名所です。この時期、世界文化遺産の境内を背景に枝垂れ桜、染井吉野、山桜、八重桜など数多くの桜が順番に咲き誇ります。豊臣秀吉が行った歴史上有名な花見といえば、「醍醐の花見」。慶長 3 年（1598）の春、秀吉は花見に際して畿内から 700 本の桜を植え、三宝院の建物と庭園を造り、盛大な宴を開きました。息子・秀頼や正室・北政所（きたのまんどころ）、側室の淀、三の丸など女房衆 1300 人余りが参加したといわれています。この故事にならって、毎年 4 月の第 2 日曜日に「豊太閤花見行列」が開催され、終日境内は賑わいます。（豊太閤花見行列　2019/01/25）

この例における〈花〉は上位カテゴリーと見なされ、桜は具体的な花であるので、下位カテゴリーに属する。このような〈類―種〉の関係で、〈花〉という概念は特定の花を指す

ことができる。段（2016b）は、「奈良時代、花といえば、梅の花を指す。日中交流が盛んになった平安時代、中国の賞梅の影響を受け、日本でも梅を見ることが風雅な遊びとなる。『万葉集』には梅を詠う詩歌は萩に次いで 118 首[15]あり、桜に関する歌はわずか 40 首である」とし、日本では〈花〉は梅を指す歴史があったという事実を指摘している。

中国では、(21）の例のように、唐の時代には〈花〉は特に牡丹のことを指し、〈種ー類〉のシネクドキの表現となっている。

（21） a. 云想衣裳花想容，春风拂槛露华浓。（唐·李白《清平调其一》）
（雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ　春風　檻を拂うて　露華濃かなり）

b. 名花倾国两相欢，常得君王带笑看。（唐·李白《清平调其三》）
（名花傾国　兩つながら相歓ぶ　長に得たり　君王の笑を帯びて看るを）

〈花〉の概念は、言語主体の主観性と関わっている。また、〈花〉のカテゴリーは、主体の空間に対する解釈を反映するだけではなく、歴史文化的な要因で、このカテゴリーが変容することもある。しかし、注意しなければならないのは、「花は桜」、「花は牡丹」のようなシネクドキは、一定の文化的背景によって可能な表現である（図 3-14、参照）。

〈花〉

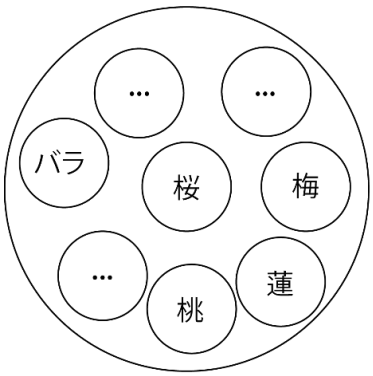


図 3-14

[15] 林(2015)により、『万葉集』には梅を詠う詩歌は 119 首あり、そのうち、白梅を詠う詩歌は 118 首、紅梅を詠う詩歌はわずか 1 首である。

〈花〉の概念は、生殖器官の基本的意味からメトニミー、シネクドキの認知プロセスを介して、花そのもの以外の植物の部分や植物全体に拡張する。主体の植物としての〈花〉の認識は、基本レベルのカテゴリー（花）、隣接カテゴリー（植物ほかの部分と全体）、下位カテゴリー（桜、梅、牡丹など）に柔軟に切り替えられる。そこには、言語主体の主観性と創造性がみられる。

▸ 〈花〉のプロトタイプとメタファー

前述したように、〈花〉のカテゴリーは、メトニミー的な空間の隣接関係によるカテゴリー、シネクドキ的な〈類－種〉/〈部分—全体〉の関係による下位カテゴリーや部分カテゴリーの植物を包含している。以下では、〈花〉のカテゴリーの中心例を分析してく。花と言う場合、梅、菊、蘭、桃、牡丹などが中国人が馴染んでいる花であり、日本では、梅、菊など中国から伝わってきた植物以外に、桜、椿、コスモスのような植物も好まれている。

中国では、牡丹のような大輪で華やかな花は典型的な花と思われるが、日本では桜のような清楚で清らかな花が典型的な花とされる。このような連想は、文化と密接に繋がっている。中国では、牡丹が栽培される唐の時代以前に、桃の花が咲くのは、長江流域の江南一帯の春の季節である。しかし、桃の花を植えない地域には、決してこのような連想が起こらない。従って、花のプロトタイプは相対的であり、自然環境、文化的要因と密接に関係している。

以下では、歴史的、文化的関係を背景として、プロトタイプと比喩表現の関係を考察していく。山梨（1988）は「男はオオカミである」を例として、メタファー表現に関わる概念を、主題の中核概念と顕現特性に区分している。

【中核概念】: その表現の指示対象を生物学的に特徴づける部分

【顕現特性】: その表現の指示対象のプロトタイプを特徴づける部分

例えば、動物（「+animate」）、哺乳類（「+mammal」）のような生物面の特徴はオオカミの中核概念で、基本的には文化的、社会的な要因の影響はない。一方、顕現特性は、指示対象のプロトタイプを規定する部分で、文化的、社会的な要因によって左右される。山梨（1988 : 21）は、「比喩の修辞的な叙述で重要な役割をになうのは、むしろこの意味でのプロトタイプを規定するのは顕現的特性の部分である」としている。また、山梨（1988）は、

顕現的特性と比喩的な叙述の制約に関し、次のように述べている。

> 比喩によることばのあやの基本は、たとえる対象としての A を B に見たて、この B の特性にもとづいて、A を叙述する点にある。しかし、B のすべての特性が、この比喩的な叙述に使われるわけではない。この叙述にかかわる特性には、ある一定の認知的制約がある。（山梨 1988 : 26-27）

〈花〉に関する比喩的な意味拡張は、〈花〉の顕現特性と関係する。〈花〉の（a）生物、物理的な特性と、(b）顕現特性に関しては、次のような定義が可能である。ここでの（b）は、花のプロトタイプを規定する。

〈花〉:　(a)　植物の生殖器官、萼・花びら・雄しべ・雌しべおよび花軸を有する etc.
　　(b)　目立つ、複雑、美しい、貴重、鮮やか、壊れやすい etc.

〈花〉に関するメタファー的な意味拡張は、(a）の生物的、物理的特徴ではなく、〈花〉のプロトタイプに関係する（b）の特性に関係している。以下では、花の顕現特性に基づいて、〈花〉のメタファー的な意味拡張の諸相を考察していく。

▸ メタファー写像の身体性

認知言語学の研究では、特にメタファーは、修辞的な認知的プロセスが関わる現象として注目されている。認知的な規定では、メタファーは、異なる領域の間の写像であるというように定義されている。その特徴は、谷口（2003 : 45）は、この写像を以下のように説明している。

A. メタファーは、起点領域（source domain）から目標領域（target domain）への写像である。
B. 写像される対象の主要なものが、イメージ･スキーマである。

メタファーは領域間の写像であり、この写像は恣意的なものではなく、言語主体の経験や知識に関わっている。前節で考察した「男はオオカミである」のようなメタファーの場

合、このメタファーを可能にするのは、ひつじのような「温順」なイメージではなく、オオカミのような「危険」なイメージに関わる経験である。また、メタファーの認知プロセスは、具体的な世界から抽象的な世界を理解する認知プロセスである。従って、メタファーを使う言語主体には、世界の認識に関わる具体的な経験が必要となる。

▸ **類似性とメタファーの主観性**

日本語の身体部位のイディオムにおける感覚のモダリティの意味拡張に関しては、図 3-15 のような視覚 ＞ 聴覚 ＞ 嗅覚という順位の優位性の相違がみられる（山梨 2012 : 106－108）。

感覚のモダリティの拡張の傾向
視覚 ＞ 聴覚 ＞ 嗅覚 ＞（？味覚）（？触覚）

図 3-15

植物の世界の理解にも、このような知覚の傾向が見られる。外部世界の認識においては、特に視覚経験に優位性が認められる。このような視覚経験の優位性は、〈花〉に関するメタファーの意味拡張とも関係している。

一般に、花の形と似たような存在は〈花〉とも呼ばれることがある。中国語には“雪花”、“烟花”などの言葉が存在し、日本語には「花火」、「雪の花」、「氷の花」、「波の花」、「湯の花」のような表現が存在する。

（22） a. 白梅に雪が重なり、天上の花を咲かせているような清らかさに驚いた。枯木はことごとく雪の花に輝いていた。寂庵は屋根も苔の庭も石仏もすべ てが雪に荘厳されていた。

b. 多くの市民やお盆で帰省した家族らが会場に駆けつけ、色とりどりの美しい花火に魅了されました。

（22）の「雪の花」、「花火」は、形状の類似性に基づくメタファーと考えられるが、現在このような表現は、メタファーであることが意識されずに、普通の表現として使用されている。このような表現は既にメタファー性を失っており、「死んだメタファー」と考えら

れる。しかし、メタファーが死んでいるかどうかは、表層レベルの意識に関係するのではなく、深層レベルの概念体系の認識と関係している。この点を、谷口（2003）は次のように述べている。

> 比喩的であると意識できるか否かだけでは、メタファーが生きているか死んでいるかの判断はできない。その産出元である写像の機能が、私たちの概念体系において生きているか死んでいるかをを考慮しなくてはならないのである。　　（谷口 2003:74）

「雪の花」の場合、植物の〈花〉のイメージを雪の一部に写像しているとは考え難い。この場合には、類似性の写像は生命力を失っていくとともに、メタファー性も失っている。また、「雪の花」の場合には、〈花〉との間に形状的、客観的な類似性が存在する。この類似性は、視覚経験による主体の身体性に反映されている。〈花〉に関する視覚経験は、このような形以外には、花の色と関わっている。一般的に、花は華やかで人目を引くものであり、花の色による視覚経験に基づいて、「鮮やか」、「美しい」等のイメージが形成される。このような花の美しさに基づいて、〈花〉の意味は拡張されている。次の例を考えてみよう。

（23）　【中国語表現】花容月貌、如花似玉、闭月羞花 etc.
　　【日本語表現】解語の花、主ある花、職場の花、社交界の花 etc.

（23）の〈花〉の慣用表現は、花を用いて女性を喩える表現である。“花容月貌”のような表現は、特に美女のことを喩える。このようなメタファーが成り立つのは、〈花〉と〈女性〉の間に類似性が存在するからである。しかし、〈花〉と〈女性〉の間に形状のような客観的な類似性は存在しないと考えられる。ここでの類似性は、〈花〉の美しいイメージからの連想プロセスを介する言語主体の主観性に基づいている。「華やかさ」は、主体の心理的評価と関わり、花の「華やかさ」は、美しい女性への連想を引き起こすことが可能である。従って、メタファーに関する類似性には、客観的な経験だけではなく、主体の主観性も関与している。尚、メタファーに関わる類似性に関しては、Lakoff and Johnson の次の言明が参考になる。

> メタファーと関連ある類似性だけが人々によって経験される類似性なのだと言いたい。

客観的な類似性と経験に基づく類似性との違いはすこぶる重要である。

（Lakoff and Johnson 1980/1986：224 渡辺（訳））

〈女性は花〉のメタファーについては、次章の 4.2.1 でさらに詳しく考察する。

▸ レトリックの複合性

以上の考察から明らかなように、言葉の創造的な意味拡張は、メトニミー、シネクドキ、メタファー等の認知プロセスが関わっている。日常言語の事例によっては、一つの言語表現にこの種の認知プロセスが複合的に関わっている。山梨（2012）は、その一例として、メタファーとメトニミーが複合的に関わるケースを指摘している（図 3-16、参照）。

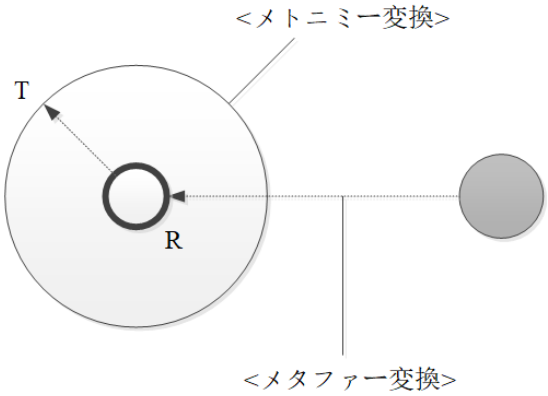


図 3-16 （山梨 2012：135）

このようなレトリックの複合性は、〈花〉の慣用表現の修辞性にも見られる。この種の複合性は、花と女性の意味関係にも反映している。前節では、花は女性のメタファーとして使用される事例を考察した。女性のカテゴリーの中でも、〈遊女〉という女性は特殊的な存在である。このような女性との関係で、〈花〉は豪勢な遊び、遊興、特に色事を指すようになったと考えられる。

（24） 夫妻不和，长白渐渐又往花街柳巷里走动。 （《金锁记》）

（日本語訳：夫婦の関係が悪いので、長白はまた花街に行くようになった。（筆者訳））

（24）のように、中国語では、“花街柳巷”、“烟花之地”は風俗街の意味である。また、

日本語には「花をやる」のような表現が存在し、宴席などに呼んだ芸者に払う代金のことは「花代」（ないしは、「花形」）と呼ばれる。このような表現では、〈花〉は女性のメタファーとなっている。〈花〉の意味が、遊び、色事、代金の意味に拡張されるのは、花は女性のメタファーという認知プロセスに基づいて、さらに女性との間にメトニミー的関係が関わっているからである。換言すれば、女性との近接性によって、〈花〉の意味が更に拡張されるからである。

以上の分析から、修辞的な表現には、事例によっては、複合的なレトリックの認知プロセスが関わっていることが理解できる。

3.3.3 〈花〉と意味拡張のメカニズム

▸ 意味拡張の順序

意味の拡張に関しては、一定の順序が存在する。山梨（2012：104）は、英語の back を例として、その意味拡張を分析している。以下の例に見られるように、1 における back は文字通りの背中の意味をするが、2 と 3 における back の意味は空間的隣接性に基づいて、空間概念を表す。また、4 の場合には、back は時間の概念を表すようになっている。更に、5 の場合には、back は形容詞として、抽象的概念を表すようになっている。

（25）1. a. John（curved/hunched）his back.

b. She is sitting on the horse's back.

2. a. That is at the back of the horse.

b. The pond is in back of the hill.

3. a. We found a back garden.

b. They went through a back entrance.

4. a. She is back in payment.

b. The man died two weeks back.

5. a. John met a backward child yesterday.

b. We must support backward countries.

従って、back の意味拡張の順序は、図 3-17 のような順序に対応している。

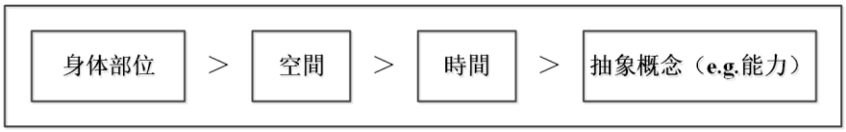


図 3-17 （山梨 2012：104）

図 3-17 は、身体部位の意味から空間、時間、更に抽象概念の意味に変化していく方向性を示している。

また、Heine *et al.*（1991：65-66）は、西アフリカのエウェ語の「背」の意味を分析し、次のような意味拡張の順序を提唱し、この順序は普遍性が認められるとしている。

PERSON ＞ OBJECT ＞ … ＞ SPACE ＞ TIME ＞ QUALITY

基本的に〈花〉の意味も、このような方向性に基づいて拡張していくと考えられる。より具体的には、〈花〉のイメージスキーマに基づいて、〈花〉の意味から、具体的な美しいものや人間（例えば、女性）に拡張していく。

中国語の“春花秋月”、“风花雪月”と日本語の「雪月花」、「花鳥風月」、「花鳥諷詠」などの場合は、〈花〉は美しい季節の風雅の対象物として、空間的または時間的な近接関係によって、自然の美しさ表現する。更に、〈花〉は美しくて際だつという特徴から、「素晴らしいもの」、「精華」の意味を有するようになり、抽象概念の「美しさ」、「素晴らしさ」のような意味に拡張する。このような意味的変化は、日中両言語に反映されるだけでなく、かなりの普遍性が認められる。

（26） 1. 春に花が咲く草は、秋に芽ばえて冬をこしたものがおおい。（花：植物）

2. 職場の花であればよかったＯＬの時代と同じだ。（花：女性）

3. 月はファンタジックな物語には欠かせないモチーフ。花鳥風月を愛でる日本人として、ぜひねらいたい被写体だ。（花：自然美）

4. 歯医者もシアトルから引き揚げてきた人で、治療が終わるといつもアメリカ時代の思い出話に花が咲く。（花が咲く：にぎやかに続く）

5. この時の値段も３０万円以上で、まだまだ一般には高嶺の花。（花：抽象概

念の貴重なもの）

▸ メタファーとイメージ選択

谷口（2003：59）は、メタファーが成り立つ領域間の写像は部分的であり、非対称的であると指摘している。〈花〉の場合、メタファーを特徴づける顕現特性として、〈目立つ、複雑、美しい、貴重、鮮やか、壊れやすい…〉等が挙げられるが、これらの顕現的特性を、全て同時に写像することが不可能である。この種のメタファーの場合には、写像が行われる際に、〈花〉の一側面（「美しさ」、「華やかさ」、「壊れやすさ」等）に関するイメージが投射されるが、それと同時に、ほかの特徴は背景化される。従って、メタファー的な意味拡張は、このようなイメージの選択と焦点化の問題に関わっている。次の例を見てみよう。

（27） いろいろ観察して見ると確かに日本人は非常に抽象的な名目や形式を尊び、欧米人は花より団子といった風に名や形式よりは実質的な利益を追求する民族のように思える。

（27）の〈花〉には、花の美が関係しているが、花の「美しさ」、「華やかさ」というプラス的な評価ではなく、〈花〉に対するマイナス的な評価が関係している。

植物に関する知識の中には、「種が生える」、「苗が出る」、「花が咲く」、「実を結ぶ」などの成長段階に関する知識も含まれる。「花が咲く」と「実を結ぶ」と比べてた場合、「実」の方は食用、薬用的価値が存在する。このような人間の生活経験に基づいて、有用性の視点から、〈花〉の「美しさ」は背景化される。例えば、中国語の“花拳绣腿”、そして日本語には「花多ければ実少し」、「美しい花良い実はならぬ」等の表現は〈花〉はうわべだけであるという意味を表現している。

▸ 〈花〉の概念と意味拡張

前節までの〈花〉に関する意味拡張は、ほぼ静態的な〈花〉に関する視覚的イメージに基づくものである。〈花〉は華やかで美しいことへの連想を介して、豪華なことの喩えとして使用される。また、〈花〉の「華やかさ」、「美しさ」との関連で、具体的な概念から抽象的な概念に拡張していく。

しかし、生きた存在としての〈花〉は静的状態だけではなく、動的な概念にも関係する。

例えば、植物の成長段階から考えてみよう。一つの植物には「種が生える」、「苗が出る」、「花が咲く」、「実を結ぶ」という成長過程が関係する。「花が咲く」ことは、植物の成長段階の一環であり、この過程には時間的概念が含まれる。

次に、「花が咲く」という段階を考えた場合、「花が咲く」という概念にも、動的なプロセスが認められる。「花が咲く」場合には、「蕾」、「咲き始め」、「盛んになる」、「衰える」などの経路を介する。この一連の変化には時間の経過が関係する。

この種の過程は、次の様な〈起点—経路—終点〉のイメージスキーマのメタファーとも関わっている。

図 3-18

〈起点—経路—終点〉のメタファーは、導管メタファーに基づく概念であり、またこのメタファーは、空間的概念に関する抽象レベルのメタファーでもある。また、この空間的なイメージスキーマは、〈原因—結果〉のメタファーに拡張されていく。この拡張は図 3-19 のように表示することができる。概念の意味拡張の方向性に従って、このスキーマは、時間的な隣接性を有する〈原因—結果〉の関係に拡張していく。

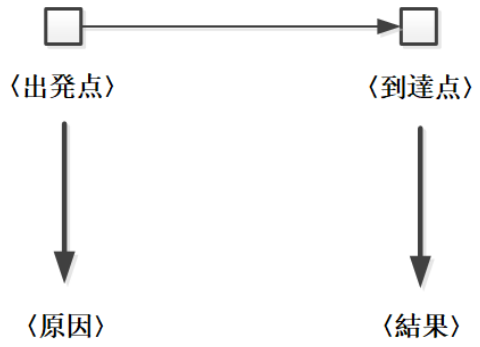


図 3-19 （山梨 2012：83）

〈起点—経路—終点〉のイメージスキーマは高度に抽象化されているが、われわれの外

部世界の理解には、〈起点―経路―到達点〉の概念が関与している。

〈花〉のある側面に関する理解は、このような〈起点―経路―到達点〉の概念と結びついている。

(28) 这种精神，包括在学术上自由地交换意见，自由地提出问题，也包括对不同观点甚至对立意见的开明、宽容的态度，真正做到了百花齐放，百家争鸣。

（《文艺大趋势》）

（日本語訳：このような精神は、学術の面には自由に意見を交換したり、自由に質問を聞いたりすることであり、対立の意見に対する包容的な態度も含め、本当の百花斉放、百家争鳴を実現している。　（筆者訳））

(28) は、“百花齐放”の言葉は、芸術や思想、文化領域に良い成果が作れるの意味で、ここでの意味拡張には、花が閉じてる状態から咲いている状態への変化が関係している。この場合にも、概念的には〈起点―経路―到達点〉のイメージスキーマが関係し、花の〈咲いている状態〉は良い〈結果〉への方向に向かっていく過程が理解される。また、この種の理解により、「開花」、「花が咲く」などの表現には、「成果をとる」、「成功する」などの意味が附与されることになる。

前述したように、「盛んになる」という動的変化に焦点を当てる場合は、「成果をとる」、「成功する」の意味でプラス的な評価になる。しかし、盛んになる時間はわずかであるので、「衰える」の段階に焦点を当てると、花の「衰えやすい」、「変わりやすい」というイメージが形成され、「一時的な栄誉」などのような長く持たない意味になる。

中国語には“昙花一现”、“花无百日红”、“明日黄花”のような表現は人間や物の衰えを喩え、日本語には人の心が変わりやすいことを「心の花」と呼ばれる。従って、花の「衰える」という段階は焦点とする場合、〈花〉の意味は衰えるもの、変わりやすいものに拡張していく。中国語における〈花〉の字は名詞以外に、形容詞、動詞として使用されている。これは、前述した漢字が持っているイメージスキーマの機能と連想プロセスにも関わっている。

〈花〉の字は〈華〉からきたものであるので、使用状況には重なるところが多いが、字形の構造から考察すると、〈華〉と〈花〉の意味的な動機づけは異なる。前述したように、〈華〉は、視覚経験に基づいた花の様子を重んじるので、名詞から形容詞“美丽而有光彩

的”（美しくて華やか)、“繁盛”（盛んな）へと自然に拡張している。

漢字の構造から見て、〈華〉の字は、花や葉が下に垂れる様子に基づいている。これは、花は、植物のほかの部分より目立つという視覚経験に起因するものと考えられる。このような〈花〉に関する字形の変化は、花の形の抽象化でもある。

現在使用している〈花〉の字は形声字であり、草木が変化する意味を表す。「花が咲く」のは、植物の成長過程における重要な変化の一つで、「花が咲く」ことは、ほかの変化より際だつため、ほかの成長段階より、「花が咲く」に焦点が当てられる。

このような〈花〉の字源に基づいて、「花が咲く」ことは、植物の生長段階における重要性を示す。また、〈花〉の字は、植物の生殖器官という基本的意味を表す以外に、植物の花が咲いているイメージもある。そのため、花が咲いている綺麗な様子を連想することができ、この漢字は、形容詞的性質を持つようになった。〈花〉が形容詞として使われる場合には、以下の例に示されるように、「模様または図案で、多くの色を持っている様子」、「さまざまな種類」、「はっきりではない」、「信用性が低い」等の意味に拡張する。

（29） a. 闭塞已久的中国观众从屏幕上看到的是一个陌生的花花世界，但充满人情味的节目又使他们感到亲切。（花：さまざまな様子）

b. 错综复杂的线和面加之色彩丰富的浮雕装饰使人眼花缭乱。（花：はっきりではない）

c. 当然，也要注意说话要切合实际，切忌花言巧语，以免令人生厌。（花：信用性が低い）

また、〈花〉の漢字が草木の変化を表す場合、この変化に焦点が当たり動詞の性質を有する。動詞“用掉，消耗”（かかる、使用する）への拡張は、「花が咲く」ことに関する時間や空間概念に基づく意味拡張と考えられる。

（30） a. 花一晚上的时间。　（一晩の時間をかけた。　筆者訳）

b. 不能乱花钱。　（お金の無駄遣いをしないでください。　筆者訳）

c. 花了很多力气。　（たくさん力を使った。　筆者訳）

〈花〉は、そのイメージに基づいて、「花」、「花が咲いている様子」、「花が咲くことは時

間をかかる」など、花に関する状態や動的な過程に関わっている。この点で、〈花〉は形容詞や動詞の機能を持つようになっていく。このような漢字の機能は、中国語における漢字の意味拡張に大きく関わっている。また、この機能により、〈花〉に関する造語が生産的に作られることになる。

3.4 まとめ

本章では、まず日中両言語の植物に関する漢字の字源を考察した。また、認知言語学の視点から､植物に関する漢字の構造と意味に関わる認知メカニズムの一面を明らかにした。特に、漢字の意味に関しては、どのような認知プロセスを介して意味の拡張がなされるかを検討するとともに、日中両言語における植物に関する文化の共通性と違いを明らかにした。

次に、認知言語学の視点から、漢字の形と意味拡張の関係を探り、表記符号としている漢字のイメージスキーマと連想機能を明らかにした。中国語の場合、植物に関する漢字の大多数は「草」と「木」に基づいており、この種の基本的な漢字を背景に、植物に関する多様な語彙が作られている。「草」と「木」は、人間の植物に対する基本的な対象であり、植物に関する基本的なカテゴリーでもある。このカテゴリーの判断基準は、言語主体の知覚経験（主に視覚）に根ざしている。植物の各部位と生長過程の各段階では、「花」は最も注目される。従って、植物に関する基本レベルのカテゴリーの中でも、「花」のカテゴリーの意味拡張には多様性が見られる。

この事実を考慮し、さらに本章では、日中両言語における「花」の慣用表現を収集して、その意味拡張のプロセスを分析し試みた。この分析から、「花」に関わる多様な意味は無関係ではなく、メタファーの認知プロセスを介して多義的なネットワークを構成している事実が明らかになった。さらに本章では、植物の品詞のカテゴリーの分布関係を考察した。その結果、中国語の「草」、「木」、「花」等は、動詞、副詞、形容詞として多く使用されるのに対し、日本語にはこの種の品詞の拡張は広範にはみられない点が明らかになった。中国語におけるこのような品詞性の拡張は、漢字のイメージスキーマ機能と関わっていると考えられる。

以上本章では、認知言語学の観点から、植物に関する語彙レベルの言葉（特に、「木」、「草」、「花」、等の語彙）の創造的な意味拡張の諸相を考察した。従来の意味研究では、植

物の語彙の意味記述は羅列的にはなされているが、各語彙の創造的な意味拡張の分析はなされていない。これに対し本章では、植物の語彙の多義性が、メタファー、等の認知プロセスに基づいて体系的に結びつけられ、創造的な意味の拡張ネットワークを形成している事実を明らかにした。

第 4 章　日中両言語の植物のメタファー

4.1 「人間は植物」の概念メタファー

4.1.1 植物のメタファーの身体性

長い歴史の中で、植物は人間に影響を与え続け、今日でも我々の日常生活を彩るかけがえのない存在である。人間の文化は、いろいろな面において植物の文化によって特徴づけられている。言葉は文化の反映であり、植物の文化とのふれあいは、我々の言葉の世界に深く浸透している。主体が外界を知覚し、外界を理解していく認知のプロセスには、外界に対する主体の主観的なパースペクティヴ、主体の身体性にかかわる視点が反映されている（ cf. 山梨 2000)。我々は植物に関する身体経験に基づいて、「花が咲く」、「根を下ろす」、「落ち葉」など、基本的には植物の成長過程や変化を比喩的に描写する。この種の描写は、次の例に見られる。

(1)　小孙子诞生的喜酒提前喝了，可他被几杯二锅头浇得心花怒放，忘了一件大事。

（《楼基下沉》）

（日本語訳：早めに孫の誕生をお祝いしたが、彼はお酒を飲んで興奮しすぎて、大事なことを忘れてしまった。(筆者訳)）

(2)　他对周总理所宣达的德意，感谢不遑，自愿回到祖国，安度晚年，落叶归根。

（《政坛回忆》）

（日本語訳：彼は周恩来総理に感謝の気持ちを抱いて、落葉帰根、母国に帰って晩年を過ごした。(筆者訳)）

(3)　改善の不徹底、ないしは単一評価基準への信仰のために、中等教育に多様な種子がまかれ花が咲くことを阻んでいるのである。

(4)　汝が家郷を逃れよ！汝が根を家郷の土より抜け！しかして異郷にこそ根を下ろすべし！

人类对外界的认知过程总是遵照由近及远、由具体到抽象、由实体到非实体的规律。人们通过认识和了解植物，以植物的具体特征为依据，如植物的形态、颜色、气味、生态习性和用途、来组织和理解其他事物…植物可以喻人；植物也可以喻其他事物。因此，根据概念隐喻的思想，我们认为英汉植物隐喻背后预设着两个共同的基本隐喻，即“人是植物”和“物是植物”。在每个基本隐喻之下，又有若干个概念隐喻的存在，而每个概念隐喻都派生出更多的语言性隐喻，从而形成一个植物隐喻的概念体系。

（陳 2015：37）

（日本語訳： 人間は外部世界への認知プロセスは、近いから遠いへ、具体から抽象へ、実体から非実体への傾向がある。人間は植物に対する認識や理解を通して、植物の具体的な特徴（形状、色、匂い、成長特性、使い方など）によって、ほかの事物を理解していく…植物は人間を喩えることができ、ほかのものを喩えるのもできる。従って、概念メタファー理論に基づいて、中英両言語における植物メタファーの背後に共通する基本的なメタファーが存在する：「人間は植物」と「ものは植物」の二つである。このような基本的なメタファーの下には若干下位レベルの概念メタファーが存在し、下位レベルの概念メタファーは更により多いメタファーを生み出して、植物メタファーの概念体系を形成する。（筆者訳））

植物を用いるメタファー表現としては、さらに次の例が注目される：“植物的生长姿态像似着人类的外貌和品性，植物的用途又与人类的生活习俗密切相关。因此，当植物词汇用于隐喻表达时，我们自身总不可避免地成为其中一个目标域（陳 2015：37）”（日本語訳： 植物生長の姿は人間の容貌や品格と類似性があり、植物の使い方は人間の生活風習と密接に関わっている。従って、植物語彙はメタファー表現として使用する際に、われわれはその目標領域になるのは極自然である。　（筆者訳））

この種の例に見られるように、植物は、世界を叙述する際のメタファーの起点領域（すなわち、比喩的に喩える領域）として使われる。メタファーにおいて、起点領域となる「植物」と目標領域となる「人間」の間に、以下のようなメタファー写像がなされる。

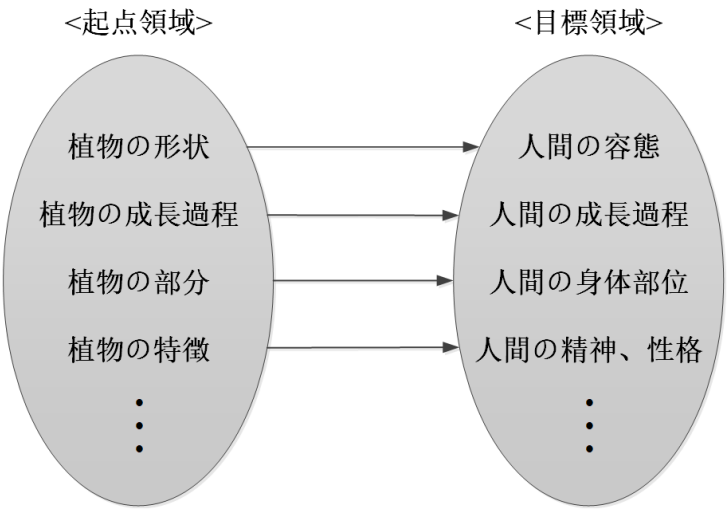


図 4-1 植物から人間への写像

本章では、日中両言語における植物に関するメタファー表現の分析を通して、人間がどのような認知プロセスを介して身の回りの植物を認識するかを考察していく。植物の基本カテゴリーに所属する「草」や「木」（それに関連する下位カテゴリーの「根」、「花」、「種」など）は、人間の様々な生活の諸相の比喩的な叙述に使われる。以下では、特に、人間の生活面の諸相（「生と死」、「成長」、「恋」、「地位」等の人間の生活に関わる諸側面）を修辞的に表現する植物のメタファーの概念構造と認知のメカニズムの一面を明らかにしていく。また、以上の分析を通して、日常言語の植物表現と文化の相互関係の一面を考察していく。

Lakoff and Johnson（1980）は、日常言語の概念体系のかなりの部分は、基本的にメタファーから成り立っていると述べている。彼等は、メタファーを、構造のメタファー（structural metaphor）、方向のメタファー（orientational metaphor）、存在のメタファー（ontological metaphor）という三種類のメタファーに区分している。この区分は、植物のメタファーの分析にも参考になる。

籾山（2005）は、人間の成長過程と植物の成長過程の間には、構造的な類似性があることを指摘している。一つの植物体は種から成熟体になるのに、「芽が出る」、「苗になる」、「花が咲く」、「実る」、「枯れる」などの成長段階を経る。そして、人間の成長も、「精子」（胎児）、「子供」、「青少年」、「成人」、「老人」の成長過程を経る （cf. 図 4-2）。したがって、日常言語で、成長過程における類似性に基づいて、植物の「種」、「芽」、「苗」、「花」、「実」などの諸相により、人間の成長段階を喩えるのは自然である。

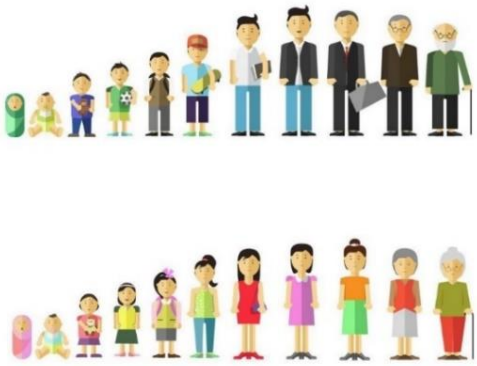


図 4-2 人間の成長過程[16]

Lakoff and Johnson は、方向のメタファーに関し、「空間的方向性というのは、われわれの肉体が物理的環境の中で機能しているという事実から生じている。方向のメタファーは、ある概念に空間的方向性を与えるのである（1980/1986： 18 （渡辺ほか、訳））」と述べている。人間の成長の方向は、「上、下、右、左、前、後」などの方向と関係している。従って、この種の方向性に基づいて、「健康は上、病気は下」のような表現野「健康」、「病気」のような概念を、比喩的に理解していく。

この種の方向のメタファーは、植物の表現にも存在する。植物に関しては、小さな種が土を破って地面から出てたり、柔らかい苗から大樹になったり、蕾から花が咲きたり、葉が落ちていくなどの成長過程が存在し、そこには「上―下」、「内―外」、「中心―周辺」の方向性が認められる（図 4-3）。

図 4-3 植物の生長における方向性[17]

従って、人間の成長過程は、植物の方向変化のメタファー的な写像により表現することが可能になる。ここでは、この種のメタファーを、「人間は植物」のメタファーと呼ぶこと

[16] 図 4-2：http://www.paixin.com/photocopyright/125057586(2018/03/17)
[17] 図 4-3：http://www.paixin.com/photocopyright/144703703(2018/03/17)

にする。このメタファーは、方向の類似性の認識によって可能となると言える。

人間には、抽象的なものを「物体」、「物質」など具体的なものとして捉える能力がある。この種の能力に基づくメタファーは、存在のメタファーと呼ばれる。抽象概念を具体的なものを通して理解するのは、この種の比喩能力による。存在メタファーの中でも、「行動」や「状態」を「容器」とみなすメタファーはその典型例である。「容器」についてのイメージは、人間の身体、自然界の存在物そして日常生活の用具から形成されてきた。人間の身体は、「容器」としても比喩的に喩えることができる。従って、以下に示されるように、感情や思考などの人体内部の活動や心理的な変化は、「容器」の概念を通して理解することが可能になる。

〈具体例〉

〈体は容器〉：紧张得心要跳出来了　（心臓が飛び出すほど緊張している）

〈頭は容器〉：大脑一片空白　（頭は真っ白だ）

〈心は容器〉：心里满满都是你　（心の中には全部あなたのことである）

〈目は容器〉：眼里都是泪水　（目の中には涙が溢れている）

植物のある側面も、容器のメタファーによって表現することが可能である。昔から、大きな葉っぱを持つ蓮など植物は、食用と薬用以外に、ものを入れて包む役割を果たしている。また、桃、杏など植物の実は、果肉と種の容器とも考えられる。さらに、前述したように、植物は人体と同じく「容器」のカテゴリーと比喩的に見なすことができるため、「人間は植物」のメタファーの使用範囲はかなり拡張することができる。

4.1.2 「生」と「死」のメタファー

植物の成長過程は、「種」から始まると考えられる。植物は種を播いて、新しい命が誕生する。人間の叙述する場合にも、「種」に基づく「生」のメタファー表現が使われる。

まず、「種」は命の起点であるので、男性の精子を喩える表現が存在する。例えば、日本語には、「種が宿る」は妊娠の意味を表す一方、(5) の例のように、「種なし」を用いて男性の不妊を表す。また、授かった命は「種」と呼ばれ、子孫の意味を表す。

(5)　もちろん、見栄や酔狂じゃありません。あいつ、こう言ってましたよ。「あなたが、種なしで、子供もできなかったことだし、離婚しても、わたしが困るわけじゃないのよ。…

中国語には“断根绝种”のような表現があり、子孫後代が絶える意味で、人を呪う言葉である。また、(6) の例のように、種なし（つまり子孫がいない）ことから転じて、“没种”は一人前の男ではないという意味を表す。これは、男性への罵倒語である。逆に、“有种”の表現は、一人前の男であるの意味になる。このような「種」は命の始まりとの関係に基づいて、子孫、男性のメタファーとして使われる。

(6)　李清洋瞪了李冰洋一眼：“你这个没种的！”赖和尚生了气，用马鞭指着李清洋说：“你倒有种了？我偏不让他说，我偏让你这个有种的说！”接着将李冰洋卸了下来，又用破布堵住李清洋的嘴，专门抽打李清洋。抽打到天明，将破布从嘴里掏出来，赖和尚问：“你还有种没种了？”李清洋也受不了了，说：“没种了！”赖和尚说：“那你说，东西埋在什么地方？”李清洋就说了。　（《故乡天下黄花》）

植物の「芽を出す」段階は、植物の幼年期に対応する。日本語の「才能の芽を伸ばす」のような表現は、芽の動態的な変化に焦点を当て、「芽」に成長の兆しの意味が附与される。また、(7) のように、「芽が出る」という表現も成長、発展の途中の意味で、人間の成長の叙述に用いられる。

(7)　そんな程度でも高校に行って真剣に練習したら芽が出ることがありますか？芽が出ないにしてもその経験を将来に生かせますか？

地面から突き出して大きくなるまでの段階は「苗」の時期である。人間の場合、幼児から大人になるまでの成長時期（特に青少年の時期）は、「苗」に喩えられる。「苗」は、「若さ」、「生命力」への連想が引き起すことができ、「希望」、「才能がある」の意味が附与される。

中国語には、“苗子”という慣用表現はある領域に才能があり、将来有望な青少年のことを指す。(8) の a～c の“苗子”は、それぞれスポーツ、軍事、音楽の面に才能がある若者

の意味である。“苗子”は若者の意味を有する一方、大人として、しっかり若者を育てるという意味も背後に潜んでいる。

(8) a. 萨马兰奇：没有，他们都接受体育锻炼，但还成不了奥运会苗子。

（《杨澜对话热点人物：杨澜访谈录Ⅱ》）

b. 接兵的首长眼睛一亮，这个小伙子将来一定是个好苗子。

（《1994 年报刊精选\08》）

c. 上高中时，音乐教师李庆龙看中了这棵苗子，悉心加以指点，成为她艺术道路上的第一个启蒙人。

（《1994 年报刊精选\06》）

「芽」と「苗」は、ともに植物の成長過程における初期の状態である。「苗」に関するメタファー表現には、植物の「生命力」、「未来」等の連想に基づく表現が多い。

また、成熟期を迎える植物は、「花が咲く」の段階になる。成熟のマークとして、「花が咲く」は、一番良い時期を意味する。中国語の“花样年华”は、人生の大切な青春時代を表す慣用表現である。次の「実る」の段階は、「花が咲く」という段階の延長である。「実」に関する表現は、「花」と一貫性を持っていて、人生の成熟期の意味が附与される。以上の考察から明らかなように、植物の「種」、「芽」、「苗」、「花」、「実」の成長過程に関する表現には、「成長」、「生命力」に関わる表現が多く存在する。

しかし、植物の生長過程には、「枯れる」、「萎む」、「散る」、「落ちる」のような衰えの表現もかなり観察される。植物の成長過程は、人間の成長過程に写像することを通して、「枯れる」、「萎む」などの、人体が衰退する表現として使われる。そこには、婉曲の意味が含まれ、人間の衰退のメタファーとして使用される。

日本語の「枯れ木」には、死に関わる連想が認められ、人間の衰退のメタファー表現として使われている。次の例を見てみよう。

(9) a. 真っ白な髪に隠れ、顔は見えない。けれど、古靴の干からびた革を思わせる首筋の皮膚、枯れ木のごとき細い腕からだけでも、この老女が衰えきっていることがわかる。

b. やがて土産物屋の主人が、枯れ木のようにやせ衰えた老女の体を、どこかへ

運び去った。

（9）の a は年をとった女性の細い腕を「枯れ木」に喩え、b は女性の体を「枯れ木」と喩えている。これらの例の「枯れ木」と年をとった人間の間には、成長過程の類似性が存在する。

言葉は時代とともに変化してきている。言葉には「寿命」があり、死語となる言葉が増える一方、流行を通して新しい言葉も生み出される。このような言葉の流行を反映する表現に、「カレセン」というトレンド用語がある。

「カレセン」は、2008 年前後から流行ってきた言葉である。この場合の「セン」は、「カレセンのカレは“枯れ”のことで、ここでは 50 代以上の枯れた男性を意味し、センはデブ専やブス専に見られる性趣向としての「〇〇専門」の“専”である。つまり、カレセン（＝枯れ専）とは、50 代以上の枯れた男性を好む 30 代未満の女性」[18]と定義されるが、ここに「枯れ」の新たな意味が出てきたと言える。次の例を見てみよう。

昔、好きだったおじさんが「高齢者社会が来て、やっと“若い”というのが褒め言葉じゃない時代が来た！」って言ってたことがある。（2007：25）

紫…会社員（20 代）

枯れっていうと、もう若くないとか、女に興味がないとか、隠居とか、そういう衰えた感じを想像されることが多いけど、そうじゃなくて、むしろステキなおじさんに対する誉め言葉っていうか。萌えの一つの形態として「カレセン」っていうジャンルが存在するんだ。（2007：25）

神田川…編集者（30 代）

2008 年に、アスペクト社は『カレセン―枯れたおじさん専科』という本を出版した。そこには、「カレセン」を話題とした座談会に参加した 20 代の会社員と 30 代の編集者が以上のような発言をしたことが記されている。ここでの「枯れ」は、生命力を失ったのではなく、逆に魅力があると考えられる。この点は、現在進んでいる高齢化社会の特徴を反映

[18] 日本語俗語辞書 http://zokugo-dict.com/06ka/karesen.htm （2018/12/15）

している。

一方、中国語には、“枯木逢春”、“枯木开花”のような慣用表現があり、枯れた木は再び花が咲くことで、生き返るの意味から転じて「希望」、「機会」を表す。そして、“枯木”と似ているような“朽木”の表現もあり、木が腐っている意味から、(“朽木不可雕也”[19]のように)“朽木”がダメな人間のメタファーとして使われている。中国語には、人間の「衰退」の様子に関する表現が存在する。以下の四字熟語は、長く使用されている伝統的なメタファー表現である。

【蝋燭を用いる表現】油尽灯枯　風燭残年　風中之燭　風前残燭

【夕日を用いる表現】垂暮之年　日薄西山　日落西山　日薄桑榆

燃え尽きそうな蝋燭と沈んでいく夕日は、人間の「衰退」を表す表現となる。それに対し、老人の健康的元気な姿は、「白」、「紅」、「朱」など、色に関する表現がよく用いられ、老人の白髪と顔色の良さを表す。

〈老人の元気な姿に関する表現〉
白髪紅顔　白髪朱顔　鶴髪童顔　鶴髪鶏皮　皓首蒼顔　厖眉皓髪

以上の用例から分かるように、白髪は「鶴髪」とも言い、鶴の羽の色からの連想と考えられる。また、鶴は長生きの吉祥な動物であるので、人間の「長寿」を祈る意味にも使われる。

それと同じく、植物の場合も、「枯れ」の表現を避け、「常緑」の特徴を有する植物に焦点を当て、「長生き」の意味で老人に用いられる。また、「長寿」への連想を引き起こすために、「枯れ」のような表現を回避して、代わりに常緑植物を用いる。中国語の「松」に関する表現は、その代表例といえる。以下の例のように、“不老松”は老人の健康な姿のメタファーとして使用されている。

(10)　…杨新民出场了。他年过 50 岁，是共和国的同龄人，被健美界称为“不老

[19] 朽木不可雕也：腐っている木は彫りこまないの意で、ダメな人間は教育できないの意を表す。

松”。　（2000 年人民日报）

（日本語訳： …楊新民の出番だ。彼は 50 歳過ぎ、共和国と同じ年で、健美界の「不老松」と呼ばれている。（筆者訳））

ここまでの「生」と「死」に関するメタファーの大多数は、人間と植物の成長過程における類似性に基づいている。このような構造的類似性に基づき、植物の各成長段階は、人間の各成長段階に写像することができる。従って、「種」、「芽」、「花」などは、人間の生命力のメタファーとして使用され、植物の衰退を表す「枯れ」は、人間の老後に関するメタファー表現として使用される。

(11)　「一体何なの？」とスウが訊ねた。

「六つ」と、囁くような声でジョンジーが言った。

「段々早く落ちるようになったわ。三日前には百くらいあったのよ。数えていると頭が痛くなったわ。でも、今は楽よ。あら、また一つ落ちた。あと五つしかないわ」

「何が五つなの？スウディに教えてよ」

「葉っぱよ。蔦の蔓についている葉よ。最後の一枚が落ちるときには、あたしも行かなくちゃならないんだわ。三日前からわかっていたのよ。先生もそうおっしゃらなかった？」

（『最後の一枚の葉』オー・ヘンリー作、結城浩訳）[20]

オー･ヘンリーの名作の『最後の一枚の葉』では、葉が落ちることが、死が近づくメタファーとして使われている。「葉が落ちる」の表現は、「下」の方向性を含んでいる。この場合の「落ちる」は、構造的類似性に基づくのではなく、人間の身体経験の方向性に関わっている。この点に関し、Lakoff and Johnson は、次のように述べている：「メタファーとして使われるこのような方向性は恣意的なものではない。それらは、われわれの肉体的経験と文化的経験に基づいている（1980/1986： 18－19 （渡辺ほか、訳））」。方向の概念と身体性の関係は、次の健康と病気のメタファーの例から明らかである。

[20] 『最後の一枚の葉』結城浩訳
http://www.hyuki.com/trans/leaf.html(2018/03/06)

HEALTH AND LIFE ARE UP；SICKNESS AND DEATH ARE DOWN

＜健康と命は上；病気と死は下＞

（Lakoff and Johnson 1980/1986： 20 （渡辺ほか、訳））

Lakoff and Johnson は、「病が重ければ、どうしてもわれわれは体を横たえてしまう。死んでしまうと、肉体は倒れた状態になる（1980/1986： 21 （渡辺ほか、訳））」と述べ、「病気と死は下」の方向のメタファーの存在を指摘している。この観点から見るならば、「葉が落ちる」というような表現も、「病気と死」のメタファー表現として自然に理解できる。

また、日本語には「濡れ落ち葉」の言い方があり、1980 年代の流行語だった。落ちった葉が雨にぬらして地面にべったりとなって、除くのが難しいから、定年になったサラリーマンをこのように喩えている。例えば、「会社を定年退職して、家にこもってなすこともなく、老妻にべったりくっついてうろうろしている姿」は、このように喩えられる（足田 2002：243）」。このような表現を通して、当時の日本社会の一面を覗くことができる。このように、「落ち葉」は、人間が衰退のメタファーに使われる。

中国語の中にも、葉が落ちることは人間の衰退を表す。以下の例に見られるように、“落叶归根”は、老後、故郷に帰るという中国人の強い「郷土思想」を反映している。ここでの「落葉」は、人間の老後を意味している。

（12） …我们的根在大陆。”宋美龄又道：“你父亲在世时，反复嘱咐我们，叶落归根是他的本意，葬回大陆是他的愿望。 （《宋氏家族全传》）

（日本語訳： …私たちの根は大陸にある。”宋美齢はまた言い続けて：“あなたの父親はまだ健在している時、何回も繰り返した。落葉帰根、大陸に帰って葬ることは彼の本心だった。（筆者訳））

このように人間の成長過程を植物を通して表すことには、普遍性が認められる。「枯れる」や「落ちる」という事態は、衰退を連想させる。「衰退」は、「青春」にと対し人生の終点に近づくため、「枯れ」と「落ちる」に関する表現はマイナス的な意味となる。また、時代の変遷とともに、現在の日本は高齢化社会が進み、「枯れ」についての考え方が変化し、そ

の意味も変化している。その一方、植物に「生命力」があると信じていた「植物信仰」が、多くの文化に存在する。中国語では、年をとった人間に常緑植物に関する表現を使用する。ここに、昔から「長生きしたい」という素朴な死生観が反映されている。

4.2 植物の人体領域への写像

4.2.1 女性に関するメタファー

「職場の花」、「社交界の花」、「花も恥じらう」のような慣用表現に見られるように、女性は、花と強く結びつけられる。女性の容貌についての描写には、多様な植物に関するメタファーが使われる。中国語には“柳腰”、“柳眉”、“杏眼”、“桃脸”、“出水芙蓉”、“三寸金莲”などのメタファー表現が数多く存在する。また、日本語にも「たてば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」のようなメタファー表現が存在する。

女性が花に喩えられる表現は多くの言語に見られ、「女性は花」のメタファーはかなりの共通性を持つと言える。メタファーは、起点領域から目標領域への写像である。この写像の認知プロセスの中で、起点領域を目標領域を結びつけるのは類似性であり、この類似性の認識は人間の身体経験に基づいている。この二つの領域の間に存在する類似性を通して、多様な比喩を作り上げることが可能となる。例えば、「女性は花」のメタファーは、〈女性〉と〈花〉の間の類似性に基づいている。しかしここでの類似性は、形や外観などの類似だけでなく、心理的な判断にも関わっている。

「女性は花」のメタファーには、身体的経験に基づく人間の主観性が働き類似性を作り出し、新たなメタファー表現が生み出される。歴史、風俗、宗教などの社会･文化的要因の影響を受け、「女性は花」に関するメタファー表現に相違が生じ、各言語と文化の創造性にも相違が認められることになる。

以下では、「女性は花」のメタファーが成り立つ身体的基盤を考察し、日中両言語の「蓮」、「桃」、「桜」、「柳」などの「女性は花」のメタファーの具体例を挙げ、女性を花にたとえる認知プロセスを具体的に分析していく。また、「女性は花」のメタファーを通して、類似性が作り出すメタファーの創造性と人間の審美観、価値観の分析を試みる。

花に関するメタファーは、花の特性に関係があるとし、花の (a) 生物、物理的な特性と、(b) 顕現的な特性を次のように定義している。

〈花〉：(a) 植物の生殖器官、萼・花びら・雄しべ・雌しべおよび花軸を有する etc.

(b) 目立つ、複雑、美しい、貴重、鮮やか、壊れやすい etc.

籾山（2005）は、植物と人間の成長の諸段階、特に女性の成長との類似性を指摘し、「女性は植物」のメタファーを分析している。この籾山の研究を背景として、段（2018）は、植物の基本カテゴリーの「花」が「女性」のメタファーとして成り立つのは、人間の身体経験に大きく関連すると指摘している。花は植物の生殖器官であり、花が咲くことは植物の成熟を暗示する。授粉の後、実を結ぶのは生殖行為の結果である。「生殖」という役割は、女性と関係している。従って、このような植物の成長過程は、女性の成長過程と類似性を持つと考えられる。次の例を見てみよう。

（13） 桃之夭夭，灼灼其华。之子于归，宜其室家。
桃之夭夭，有蕡其实。之子于归，宜其家室。
桃之夭夭，其叶蓁蓁。之子于归，宜其家人。[21]

（《诗经•周南•桃夭》）

（13）の中国最古の詩歌集『詩経』では、嫁になる女性を桃の花に喩えている。桃の花が咲き始まる様子を適婚期の少女を喩えている。実を結ぶことは女性の出産、茂っている様子は女性の支えで家族が繁栄するのを喩えることにより、女性の家庭の中での重要性を示している。また、女性の成長過程の諸段階を「桃の花」、「桃の実」、「桃の葉」の変化を通して捉えている。

中国語には、“花季少女”、“豆蔻[22]年华”（特に 13-14 歳の少女）のような表現があり、「花が咲く」一番良い時期により、特に女性の青春を喩える。

[21] 桃は若やぎ　照り映える花　この子嫁いで　良き妻たらん
桃は若やぎ　ふくよかな実　この子嫁いで　良き嫁たらん
桃は若やぎ　生ひ茂れる葉　この子嫁いで　良き主婦たらん

[22] 豆蔻：カルダモン（cardamom）という植物である。ここでは、豆蔻花が咲き始めの様子に基づいて、13-14 歳の少女を喩えている。

（14） a. 去年今日此门中，人面桃花相映红。　　（唐•崔护《题都城南庄》）

b. 春(はる)の園(その)　紅(くれなゐ)にほふ　桃(もも)の花(はな)　下(したで)照る道(みち)に　出(い)で立(を)つ娘子(をとめ)

（大伴家持，卷 19－4139）

（14）の a は唐詩の中に有名な一句であり、暖かい春に綺麗に咲いているピンク色の桃の花が、若くて元気な女性と結びつけられている。また、「桃の花」と「少女」の取り合わせにより、大伴家持は、b のように、美しい少女は桃の花の下に立つという和歌を詠んでいる。

桃は昔大陸から日本に伝わってきた植物であるので、中国語のように「桃の花」に関する慣用表現が多く存在する。日本語には、女性に関する描写は「桃の花」を用いる例が少ないが、「花が咲く」ことに焦点を当て、女性の青春を喩える。

また、女性は結婚の年齢の時期に関しては“摽梅之年”のような言い方がある。“摽”は採るの意で、ここでは、成熟した梅の実を採るということで、女性の成熟を喩えている。

（15） 摽有梅，其实七兮。求我庶士，迨其吉兮。[23]　　（《国风・召南・摽有梅》）

女性は婚後、妊娠と出産の役を担っているため、「性」と関連づけられる。「性」の描写に関しては、中国では、元代の劇本『西廂記』に“花心”を用いて女性の性器を指し、婉曲的に青年男女の性愛画面を描写している。従って、「花」は女性の性的器官のメタファーとして使われるのが元代以前に既に定着していたと考えられる。明代の『金瓶梅』という官能小説にはかなりセックスシーンがあり、“花心”、“后庭花”のような表現で女性の性器が描かれている。この種のメタファーの「花」は、女性の性器と形状の類似性に基づいており、「女性は花」のメタファーに反映されている。

（16） 将柳腰款摆, 花心轻拆, 露滴牡丹开。　　（《西厢记》）

近年の日本では、女性の性描写に関し、「桃尻」のような表現に見られるように、桃の形が良い臀部のことを指す。また、「ブドウ」は、乳首を喩える用例も見られる。さらに、英

[23] 投げるは梅の実　手元に七つ　男らよ　私がほしけりや　良い日がらを外さずに

語の影響受け、「チェリー」は未経験者で、バージンの意味として使われる。ここでの「桃」、「ブドウ」、「チェリー」は植物の「果実」として捉えられ、「実」の生殖的意味と繋がっている。

中国語と日本語におけるこのようなメタファーの大多数は、形と色の類似性に基づいて成り立つと考えられるが、その背後に植物の「花」と「実」が持っている生殖の意味からの連想が働いている。

以上の例から、女性と植物の間に、生長過程における類似性が存在することが明らかになる。このように女性を植物に喩えるのは、「性」と「生殖」と密接に関わっているからである。

花の衰えやすさは、女性の衰退を喩える。特に、「落花」という表現は、女性の若死を喩え、日中両言語にも存在する。以下の（17）の a は、清代の中国四大名著の一つ『紅楼夢』を出典とする。主人公の黛玉が、落ちた桃の花を葬る時詠んでいる詩であるが、ここでの「落ちた桃の花」は、黛玉の「若死」を暗示している。この表現は、「死は下」の方向のメタファーとも関係している。

（17） a. 试看春残花渐落，便是红颜老死时。一朝春尽红颜老，花落人亡两不知。

（《红楼梦》）

b. 花の色は移りにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

（小野小町）

（17）の b は、美人の美貌を、雨に打たれた花のように衰えた歌であり、花の色が落ちることで女性の衰退を表現している。そのほかに、「夕顔」、「露草」のように、朝に花が咲き、夜に衰える植物が女性の青春の短さ、更に命の短さを表す表現も存在する。これらの表現では、「花」により女性の衰退を喩えているが、ここに、女性の美は衰えやすいという男性の視点が反映されている。

以上の考察から明らかなように、女性と植物（特に花）の間には、＜「花が咲く（そして実る）」の段階＞と＜女性の「青春」、「成熟」、「生殖」、「花が落ちる（または色が移り変わる）」の段階＞の対応関係が存在する。また、「衰退」、「死亡」のメタファーに基づいて、「女性は花」のメタファーが成り立っている。それぞれ下位レベルの花に対するイメージの相違、そして文化的な生活的フレームの影響により、「女性は花」のメタファーは多様性

を示す。ここでは、さらに「女性は花」の具体例を取り上げ、この種メタファーの修辞的な創造性を考察していく。

まず、女性の容貌については、『詩経』に花で喩える例が見られる。この種の表現では、女性の美を描写し、「女性は花」のメタファーが定着している。現在でも“花容月貌”、“闭月羞花”など、数多くの表現は、四字熟語として使用されている。基本カテゴリーの「花」だけではなく、『詩経』の中には、花で女性の美貌を喩える表現が存在する。その一部は、表１に示される。これらの例から、顔の「美しさ」は女性への評価基準の一つであることが理解できる。

表 4-1 『詩経』における「女性は花」のメタファー表現

起点領域	メタファー表現	意味	出典
花	美如英	花のように美しい	汾沮洳
蓮の花	有蒲菡萏	川辺に蓮の花が咲いている	陈风・泽陂
桃の花	桃之夭夭，灼灼其华	桃の花は綺麗に咲いている	桃夭
スモモの花	华如桃李	顔は桃とスモモの花如く	何彼秾矣
木槿の花	颜如舜华	むくげのように紅い顔	有女同车

『詩経』では、ほぼ 3000 年前の中国社会が求めた女性像を描いている。このように女性を喩える表現は、中国女性への伝統的な審美観に深い影響を与えている。この点に関し、朱（2004）は、次のように述べている：「女性容貌美，象艳丽的花朵色彩艳妍，面容、容颜如花后来已成为中国女性美的一种传统的审美崇尚（女性の美しい容貌が、鮮やかな花であるという見方は、中国女性美の伝統的な審美観として定着している　（筆者訳））」（朱 2004: 34）。

中国語では、特に桃の花と女性との関係が注目される。中国語には「桃の花」をルーツとしての語彙が多く存在する（cf. 寥 1997）。女性に関しては、“桃花脸”、“桃腮”、“桃花妆”、“人面桃花”、“桃唇”、“桃花眼”などが、典型例として挙げられる。

（18） 奶奶想这一双乔乔金莲，这一张桃腮杏脸，千般的温存，万种的风流，难道真要由一个麻风病人去消受？ （《红高粱》）

（日本語訳：この愛らしい金蓮、この花のかんばしさ、ありあまる女らしさと色香を、

ほんとうに一人の麻風病者にささげるのか。）

清代の研究者の姚際恒[24]は、『詩経』を評論する際に、桃の花と女性の関係を、次のように評価している:「桃花色最艳, 故取以喻女子, 开千古词赋咏美人之祖（桃の色は一番艶かで、桃の花は女性を喩え、文学世界に美人を喩える先駆けとなった　（筆者訳））。

桃の花はピンク色で、女性の綺麗な顔、健康的な肌色への連想を引き起こし、「色ぽっさ」のイメージが形成している。有名な詩句“歌尽桃花扇底风[25]”の“桃花扇”は、歌女の象徴である。また、程棨は「余尝评花，以为梅有山林之风，杏有闺门之态，桃如倚门市娼，李如东郭贫女[26]（私は花を評価してみると、梅は山林の風姿があり、杏はお嬢様のようであり、桃は娼婦のようであり、スモモは貧乏人の娘であると思っている。　（筆者訳））」と述べ、桃の花は、娼妓のようなマイナス的な評価を与えている。そして、桃の花が娼婦を喩える代表例は、清代の劇本『桃花扇』[27]にある。ここでは、“桃花扇”は、娼妓である主人公の李香君が持っている団扇のことを指している。

ここまでの桃の花に関する表現はメタファーである。この種の桃の花の比喩に関与する（a）物理的特性と（b）顕現特性は、以下のようにまとめられる。

＜桃の花＞：(a) ピンク色、春に咲く、花が大勢 etc.
　　(b) 色っぽさ、綺麗、若さ、生命力、繁栄 etc.

山梨（1988：29）は、基本的に「比喩的な叙述に使われるのは、むしろこれらの顕現的な特性である」としている。この制約を考慮した場合、桃の花を女性に喩えるメタファー表現は、(b) の特性によって、若くて生命力が溢れる女性像、色っぽく綺麗な女性像、家庭に入って子孫繁栄の願いが込められる女性像などとして表現される。従って、中国語のプロトタイプとしての「桃の花」を、次のように規定する。

＜桃の花のプロトタイプ＞：［色っぽさ、若さ、生命力、繁栄など］

---

24 诗经通论（http://yuedu.163.com/（2018/01/15）

25 歌尽桃花扇底风:宋代詩人晏几道の《鹧鸪天•彩袖殷勤捧玉钟》からの一句であり、遊女が歌ったり踊ったりする描写である。桃の花を描いている団扇は、娯楽の道具の一つで、歌女の象徴とも考えられる。

26 ここでの花に対する評価は、元代の程棨の著作『三柳軒雑識』からの例である。

27 『桃花扇』は、清代文学家孔尚任が創作した劇本であり、少年侯方域と娼妓李香君の物語である。

このようなプロトタイプの特性を利用して女性を喩えるのは、人間は桃の花と女性の間の類似性による。この種の事実から、男性社会が、「美貌」で、「若い」女性を求め、「出産」、「家族繁栄」など社会的な役割を女性に期待することが理解される。また、ここに女性の社会地位の低さも反映されている。

以上、基本カテゴリーの「花」、そして下位レベルの「桃の花」の女性のメタファーを考察したが、「桃の花」以外には、李（2004：74）の研究より、次の指摘がなされている。すなわち、中国では、「佳人」、「美人」、「麗人」などの用語を用いて女性を描写し、植物を使って女性を喩えることは少なかった、という指摘がされている。

しかし、隋唐に至り「花」のイメージに基づいて、「牡丹」、「梨の花」、「蓮の花」等により女性の容貌を喩えることが増えている。例えば、“出水芙蓉”は女性の清純さを表し、“梨花带雨”は、女性が泣く時の可憐な様子を表すようになっている。次の例を見てみよう。

（19） a. 云想衣裳花想容，春风拂槛露华浓。（唐•李白《清平调其一》）

（雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ　春風　檻を拂うて　露華濃かなり）

b. 名花倾国两相欢，常得君王带笑看。（唐•李白《清平调其三》）

（名花傾国　兩つながら相歓ぶ　長に得たり　君王の笑を帯びて看るを）

（19）の a と b は、唐代の李白が楊貴妃の美貌を牡丹の花に喩えている名句である。ここでの「花」は、特に牡丹の花を指している。国力が絶頂期の唐代には、大輪で華やかな牡丹は「花」の典型的なイメージであり、「富貴」、「繁栄」、「美人」などの連想を起こす。牡丹のような華麗で高貴な女性は、当時の憧れであったと言える。

宋元時代から、中国文学には、女性の容貌に植物を用いるメタファー表現が非常に増えている。例えば、（20）のように、“桃萼”、“樱珠”、“金莲”、“春笋”が、それぞれ女性の「頬」、「口」、「足」、「指」を喩えている。

（20） 宣赞着眼看那妇人，真个生得：绿云堆发，白雪凝肤。眼横秋水之波，眉插春山之黛。桃萼淡妆红脸，樱珠轻点绛唇。步鞋衬小小金莲，玉指露纤纤春笋。

（《西湖三塔记》）

このような表現は、“樱桃口”、“柳叶眉”、“桃花脸”のように、現在でも美女を描写する際の慣用表現となっている。

特に、宋の時代から纏足の風習が広がり、小さな足が女性の美の一つとされた。小足で歩くとき、左右に揺れている女性の歩き姿は“莲步”、“步步生莲”、“步步莲花”のように表現され、ここに当時の男性が求めていた「弱々しい」女性の姿を覗くことができる。また、伝統的に足は、女性の性的器官を暗示し、片手に握られるような小足は男性に対して性的刺激になった。“三寸金莲”のような表現は、女性の行動への束縛だけではなく、男性に従う性的束縛を暗示する。この種の暗示的な見立ては、次の例にも反映されている。

(21) 奶奶更多地是看到自己穿着大红绣花鞋的脚，它尖尖瘦瘦，带着凄艳的表情，从外边投进来的光明罩住了它们，它们像两枚莲花瓣，它们更像两条小金鱼埋伏在澄澈的水底。（《红高粱》）

（日本語訳： いや、大きな花模様の靴をはいた自分の足のほうがもっとよく見える。足はかぼそく、寂しげで、外からの光におおわれている。まるで二枚の蓮の花びら、というより澄みきった水底に潜む二尾の金魚のようだ。）

在对女性的审美上,无论是在古代文学艺术还是在日常的审美观照中,“病态”都是一个无法缺席的词汇,而“病态美”因素较直接的体现者,就是历代文学中众多的“病美人”形象。（郭 2003：46）

（日本語訳： 女性に対する審美に関しては、古代文学芸術の面であれ、日常生活の面であれ、「病態」は不可欠の言葉である。「病態な美」の直接的な表現者は、歴代文学における数多くの「病美人」である。 （筆者訳））

中国古典の四大名著『紅楼夢』の中に、主人公の林黛玉が登場した時、「行動処似弱柳扶風」と描写される。「弱柳扶風」は、女性の弱々しい様子を表現し、「病態的美しさ」という女性美の側面を反映している。林黛玉は、「病美人」の代表として、現在でも、体が弱くて繊細で敏感な女子は“林妹妹”と呼ばれる。女性の「細さ」、「弱さ」、「小ささ」は、美の一種と見なされる。

このような審美観は、「柳」に関する表現にも反映されている。柳を詠う詩歌が『詩経』

にあるが、唐の時代に更に女性と結びつき、柳は女性の「柔らかさ」、「弱さ」を表現する。女性が歩く時左右に揺れる様子は“分花拂柳”、細い腰は“柳腰”、そして柳の葉のような細長い眉毛は“柳眉”と呼ばれ、柳のイメージは古来中国女性のスタイルの美しさの象徴となっている。「花」と「柳」は女性のメタファーに使われる。また、“寻花问柳”、“折花攀柳”、“眠花卧柳”のような表現は、男子の風流を表すメタファーである。さらに、「尋ねる」、「折る」、「眠る」のような表現は、女性が遊んでる相手という軽蔑を意味し、女性の社会地位の低さを示している。以上の点は、次の例から明らかである。

> 政治上的弱势、社会的习俗、文化的渐染,无不使女性在无名、失语的状态中,渐渐地从公众视野中心沦落到边缘,在经济地位的失落后本体的价值也失落了,并且按照男性中心主义的标准来扮演一个“三从四德”和“相夫教子”的角色。因而,对女性的审美标准，也就内化为以柔顺、病弱、驯服等宠物性特征来审视了。（郭 2003 : 47）
>
> （日本語訳： 政治上の弱さ、社会風習、文化の影響で、名前がなく、そして発言権を有していない女性たちは無視され、経済地位を失ってからは、人間としての価値も失った。男性を中心とする社会には、女性は男性の要求に従って、「夫に従順」、「子育てに専念」の役を担っている。また、女性に対する審美は、ペットのような「柔らかさ」、「弱さ」、「従い」の特徴を有することである。　筆者訳））

日本では、柳といえば、一般にシダレヤナギのことを指すが、シダレヤナギは、日本固有の樹木でなく、中国大陸から渡来した（cf. 足田 2002 : 68）。現代の日本語にも存在している「柳腰」、「柳眉」などの表現は、中国から日本に伝わった可能性が高い。中国語のほど豊富ではないが、柳によって表される可憐な女性像は、日本文化にも反映されている。

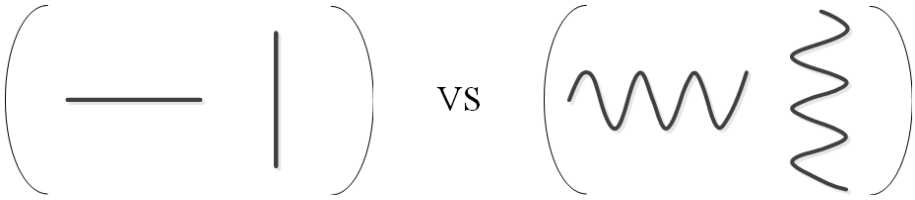
女性の喩として、日本語では、「たてば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」という比喩が有名である。芍薬はすらりと伸びる様子から、女性の「細くて長い」スタイルを喩え、牡丹は大輪な花で、「華麗」な容姿への連想を喚起する。そして、女性の歩き姿は、「百合の花」に喩えられ、百合の花が風に吹かれて揺れる姿は、女性の美しい歩く姿を連想させる。芍薬、牡丹、百合の花は、女性の弱々しく可憐な姿であり、理想的な女性像を示す（図 4-4 を参照）。

〈芍薬〉　　〈牡丹〉　　〈百合〉

図 4–4

芍薬はあでやかな花で、『詩経』には青年男女がプレゼント交換する様子を示している。“贈之以芍药”は、芍薬に関する最も古い記述である。「百花の王」の牡丹も、隋唐の時代から盛んに栽培され、当初は木芍薬と呼ばれた。「ボタンは、もともと日本の山野に生まれた花ではなく、中国大陸から渡ってきた栽培植物である」と足田（2002：86）は述べている。この記述から、日本語の芍薬と牡丹のイメージは、これらの植物が日本に伝来したとき、中国文化の影響を受けた可能性があり得る。しかし、中国語には、芍薬や牡丹を用いて、女性の立ち姿、座り姿を喩える表現はない。従って、この比喩は、大陸文化が日本文化に受け入れられて作られたものと考えられる。このような表現は、日本人女性の振る舞いを規制している。また、日本人女性の美しい着物姿は、この表現から連想でき日本独自の審美観を示している。

「花は女性」のメタファーは、男性社会における女性への審美観を反映している。上記の諸例から明らかなように、細長くて、柔らかく、鮮やかな「花」は、視覚や触覚など人間の基本的な感覚によって、「繊細で弱々しい」女性との間に類似性を創り出し、そこに男性が求める女性像が反映される。そして、女性の眉、腰、歩き姿に対し、「直線」ではなく、「曲線」が求められ、女性は観賞の対象となる（図 4-5 を参照）。



〈直線〉　　〈曲線〉

図 4–5

杜（1998）が指摘するように、女性に関するこの種のメタファーは男性社会が作ったもので、男性が女性に押しつけた価値評価である。

在以男子为中心的社会里，人们的审美观念和审美心态出现了畸形：人体美的享受权、娱乐权几乎完全操在男人手里，整个社会以男子的立场、观念、趣味、爱好来对待人体美，人体美几乎完全成了男子审美享受、审美消费的对象，人体美的创造也几乎完全按照男子的审美需要、审美趣味来进行。男子的美固然是男人们自己所欣赏所需要的美，女子的美更是男人观念、趣味中的美。女人的美只是男人心目中的美。

（杜 1998：237）

（日本語訳： 男性を中心とする社会には、審美観と心理がゆがんでいる。男性は、人間の身体を操縦する権力を持ち、男性の立場、視点、趣味、好みによって、人体の美しさを判断する。また、男性の要求に基づいて、人体の美しさを創造する。女性の美は、男性視点からの美である。　（筆者訳））

この問題に関し、タインズ（2016：52）は、次のように指摘している：「権力のあるグループからずれた人の体を評価する場合には、イデオロギーが生じやすい。女性は美しくあるべきだとされ、見るためのものと見なされる。人間としての価値をはかるのに、見た目が重視される」。

ヒット小説『女子の生活』[28]の中に、実は男性であるが、心理的には女性である主人公が、女子として生活を過ごしている場面がある。以下に示されるように、この場面では、女性が毎日出かける前の服のコーディネーター、メイクのテクニック、髪の毛の手入れが詳しく描写されている。

(22) それはそれとして、服を選ぶのは毎日ホント悩む。夏は終わりかけてるこの季節は、早めの秋物で先取りするか、ジャストタイムでこなすかがまずポイント。スマホで今日の気温をチェックすると、まだ少し暑いみたい。よし。だったらフレアタイプのショーパンにしよう。足には、ちょっとだけ自信がある。

[28] 『女子的生活』は、坂木司による日本のライト文芸連作短編小説。文芸誌『yom yom』の読み切り競作企画「ふたりぐらし」の第3回として2013年春号に掲載された短編小説「女子的生活」が好評を博し、2014年冬号から2015年秋号、2016年春号に全6回にわたり連載化、2016年8月に新潮社より刊行された。(https://ja.wikipedia.org/wiki/　(2018/12/23))

トップスは、やっぱりエアリーな素材のブラウス。でもそれだけだと上下ふわふわデポケるから、カーキの中袖ジャケットで引き締めてみる。よし。

コーディネーターが決まったら、次はメイク。そういえば昔、まだメイク慣れしてない頃はよく、先にメイクをしちゃって失敗したっけ。「あっ！パジャマ前開きじゃない！」みたいな、ね。

どんな急いでても、とにかくベースはしっかり。そこをちゃんとしない　と、午後から夜にかけてめんどくさいことになるから。あとアイメイクは絶対ね。派手っぽいつけ睫毛は、職場的に NG。だってほら、テクに偏ったメイクって、一般的じゃないでしょ？

髪は、とりあえずゆるパーマかかってるから、あんまり工夫しなくてい い。オフのときなら色々遊ぶけど、ウィンクデイは定番的に下ろしてる。

言ったら、全体的にゆるふわモテ系。でもそれだけじゃ女子ウケが悪いから、目と唇にはクールさもプラス。そうしないと、カーキのトップスが浮くしね。

靴も軽く悩んだけど、ちょっと太めのビールにした。足のサイズが大きいからいつもデザインで悩むんだけど、これは久々のヒット。太いビールの安定感とごつさが、ふわふわ系といいバランス。

最後に鏡の前で、全身チェック。くるりと回ると、ショーパンのフレアがふわりと広がる。それが嬉しくて、つい首回りにスモーキーなピンクのスカーフなんかも追加してみたりして。

ふわふわ。ゆらゆら。こういう服を着るたび、女の子っていいなって思う。

（『女子の生活』）

（22）に示されるように、女性は、精力と時間をかけ「美」を保つために工夫している。「女性は花」という表現は、男性の視点からの「観賞」と「生殖」の意味に基づくメタファーである。従って、女性自身も「花」のように振る舞うことが期待される。しかし、男性を喜ばさせるためではなく、「花」のように美しくて輝いて生きることを積極的に楽しむ女性もいる。

本節では、「女性は花」のメタファーが成り立つ背景として考察し、日中両言における「蓮」、「桃」、「桜」、「柳」などの「女性は花」のメタファーの具体例を検討した。また、「女性は花」のメタファーの創造性を明らかにするとともに、この種のメタファーが反映

する人間の審美観、価値観の分析を試みた。女性に関するメタファーには、「花」と「実」が見立てとしてよく使われる。これは特に女性の生殖と関係している。

現在、ジェンダーについての研究が盛んになり、女性の社会地位、女性の美しさに関する批判的な考察がなされつつある。この点から見た場合、女性を鑑賞、食用の「花」と「果実」に喩えることは批判されるべきである。最近の中国語では、“铿锵玫瑰”のような表現が生み出され、刺があるバラの花は強くて、自信のある独立した都市女性の喩えとして使われている。この場合の女性は「花」に喩えられるが、「独立」、「自信」の意味が含まれる。従って、時代とともに、「女性は花」のメタファー表現にも、女性の自立に向けての新たな意味が生成されつつある。

4.2.2 男性に関するメタファー

前節では、女性と植物の関係を考察した。以下では、従来の男性に関する植物メタファーの分析を通して、男性の社会的役割を考察し、理想的な「男性像」を考察していく。

中国の最古の詩歌集『詩経』には、女性を植物に喩える表現が数多く存在する。この文献は、「健康」、「活発」の生命力が溢れる女性の描写が中心で、その研究は盛んであるが、男性についての研究が殆ど見られない。筆者は、収集した資料、文献を参考にして、植物を用いる男性に関するメタファー表現と、女性に関するメタファー表現に大きな相違があるという事実を確認した。タインズ（2018）は、「女らしさ」と「男らしさ」の区別を図 4-6 のように規定している。ジェンダーの差異により、男性に関するメアファー表現と女性に関するメタファー表現には、大きな相違が生じる。

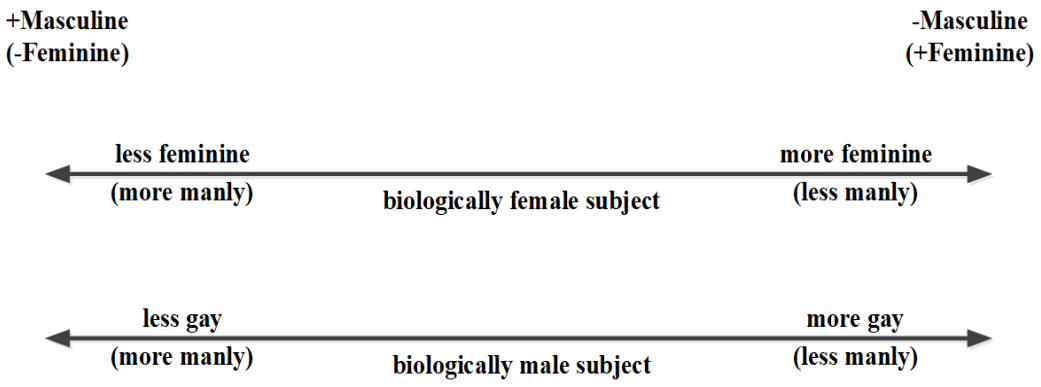


図 4-6

ここでは、花に関する言語表現とジェンダーの関係を考察する。まず、「花」が女性のメタファーとして使用される場合、前節に示されるように、「美しい」、「優れる」に関連する表現が多く、プラス的な意味を表すものが多い。

> “花～”、“～花”词用于在形象或称呼男性的时候，赞美很少而贬斥的却很多，用这类词语来描写男性外貌的时候，大多是对男性的讽刺、挖苦、排斥、否定等等意思，当用这类词语称呼男性的时候，这些男子往往也是被指责的对象。　　（黄 2008：25）
>
> （日本語訳：「花～」、「～花」のような言葉は、男性の容貌の描写、また男性への呼びかけとして使用する際に、プラス的な意味が少なく、マイナス的な意味が多い。これらの言葉は、男性の容貌を描写する際に、諷刺、皮肉、否定などマイナスの意味を表すものが多い、このような言葉を使って、男性を呼びかける際には、対象とする男性への批判が顕著である。　（筆者訳））

中国語には、黄（2008）が指摘するように、「花」に関する言葉の使用には、性別の違いが生じる。例えば、“花心”、“花花公子”は、浮気しやすい男性のことを表す。前節に見た“寻花问柳”、“拈花惹草”は、男性が頻繁に風俗の場所に出入りすることを指す。ここでの「花」、「柳」、「草」は、女性、特に遊女のことで、“花柳”や“花街柳巷”も娼妓、風俗街を意味する。このような「花」が男性に使用されるのは、空間の隣接関係によるメトニミーによると考えられる。また、以下の例に示されるように、多数の女性に近づく男性は、マイナス的な評価がされることが多い。

(23) a. …照一般人看来，美院是个相当开放的地方，从这儿出来的人，如果不花心，那简直就是白痴。　（《中国北漂艺人生存实录》）

b. 高人一等，飞扬跋扈，到头来成了一个花花公子或泼皮恶少。

（《埋在地下的爱》）

c. “因为我最忌恨那种寻花问柳的男人……我的丈夫，就是因为走上这条路，把个挺美满的家毁了。　（《一个警察的 24 小时》）

d. 林先生还不属于那种专于拈花惹草的人，他是一个经商方面的奇才， 本能有一种多赚钱赚大钱的欲望，精力是不会过多地消耗在那方面的。

（《一个警察的 24 小时》）

日本語には「花街」の言葉があり、「料理屋や芸者置屋、古くは遊女屋などがかたまってある地帯」（東郷 2006：186）のことを指す。また、「花代」は、芸者や遊女に払う代金のことであるので、「花」は遊女の意味を有するが、この種の「花」に関する表現は、中国語のように、男性へのマイナス的な評価ではないようである。

1990 年代以降、日本では、少女漫画『花より男子』がヒットした。この漫画の主人公の四人の男子組は「Flower 4」と呼ばれ、花のようなキレイな貴公子の意味で、「花男」のことばが若い世代の間に流行った。ここでは、元々綺麗な女性に使用される「花」が男性にも拡張し、男性の「美しさ」を表現するようになっている。

また、日本語には、「紅顔の美少年」のような表現があり、女性のように顔色の艶さという意味と解釈できる。現在、「きれい」は女性だけが求めるものではなく、男性の中の一部も「きれい」を求め、ヘアケア、スキンケア、ファッションなどを重視している。特に若手の韓流歌手の影響で、「可愛い」、「美しい」、「優しい」男子のイメージが若い世代における「男性美」を象徴するようになっている。この点は、(24) の例からも明らかである。

(24) “女よりきれいだ”と言う言葉をたくさん聞く．彼は貴公子イメージを漂って柔らかい花美男ユン・ジフ役をよく表現している。

中国語の場合には、男性の「花」に関する表現はマイナス的な評価が多いが、プラス的な表現としては、「男は木」のメタファーが存在している。唐代の詩人の杜甫は、以下の詩句で、美少年を、微風に吹かれた美しい木のようであると詠っている。

(25) 宗之潇洒美少年，举觞白眼望青天，皎如玉树临风前。[29]

（唐•杜甫《饮中八仙歌》）

“玉树临风”は、美男子のメタファーとして使用されている。「木」のほか、現在、美少年に関しては、“班草”、“校草”のような表現があり、クラス、学校などの美少年に対する呼びかけに使われる。古代から現在まで、植物に関する男性のプラス的な評価は、できる

[29] 宗之は瀟灑たる美少年　觴を擧げて白眼に青天を望む　皎として玉樹の風前に臨むが如し

だけ「花」を回避し、「木」と「草」のような表現を用いて姿や容貌の良さを表す傾向がある。

容貌の描写以外に、男尊女卑の社会では、男女の地位の差も植物を通して表現される。日本語には、「男は度胸、女は愛嬌」ということわざがあり、可愛くて男性を喜ばせることが女性の社会的役割であるとされる。社会的には優位であり、家庭を養う役割を担っている男性は、家庭の中にも絶対な権力を握ることを背景として、「亭主関白」の思想が存在している。男性は外で働き、女性は家庭を支えるという伝統的な社会構造は、「男は松、女は藤」のことわざからもうかがえる。また、「松の木にフジのつるが絡みつくように、女性は男性を頼って生きるものだ」（足田 2002：43）というように、男性はしっかりした木のイメージであるが、女性は柔らかくて自分で生存できない藤のイメージになる。この点は、次の例にも反映されている。

（26） a. 実に十八年間にわたって、カミさんにしっかり養ってもらった。だが、それでも亭主関白を決め込んでいる。

b. それにしても女は独立して男より偉いと思ったら、そうでもない。 古くからの譬えに、「男は松、女は藤」とある。

日本では、太平洋戦争の後、アメリカ「男女平等」思想の影響を受け、また戦後経済の復興で、多くの女性が働き始めた。女性の社会進出は、女性地位の改善に役が立つと考えられるが、職場では、女性は男性と同じようには待遇されていない。例えば、女性は「職場の花」、「紅一点」と呼ばれ、仕事が優れているより、職場では従属的な存在であることが期待される。この点は、次の例からも明らかである。

（27） 女性が男性の補助的仕事しかさせられないことの多いわが国では、女性は職場の花といわれ、性的な存在としてみられてきたため、性的誘いかけを受けて拒否したら解雇された、性的なうわさを立てられて泣く泣く退職したなどさまざまな嫌がらせを受けてきました。

以上の考察から、男性のメタファーに関しては、「木」のイメージを抽出することができる。「木」の物理的特性と顕現特性は、以下のように定義できる。

〈木〉： a. 高い、しっかり、茂る、まっすぐ etc.

b. 地位が高い、力がある、頼りになれる、家庭を守る etc.

草食系男子という言葉が流行語になったのは、その言葉に対応する現実の「男性」たちが、日本社会に存在していたからである。最近の男性は「女性化」し、「男らしさ」を失った若者が増えてている。

また、2009 年には、「草食男子」[30]は「新語流行語大賞」のトップ 10 に選ばれ、その時の流行語になっている。森岡（2011）[31]は、「草食男子」の言葉が流行した社会現象を指摘している。草食というのは、「草食動物」からとられた表現であり、性格が温順で、攻撃性がない動物のイメージから、「心が優しい」、「男らしさに縛られていない」、「恋愛にガツガツしない」、「対等な女性観」、「傷つきが嫌い」という内面を持つ男性のことを「草食男子」と呼ぶようになった。「草食男子」が社会的現象になるのは、「顕示的消費にも興味を示さず、バブル崩壊後の経済停滞が、その精神構造に影響を与えた」[32]という指摘もある。

4.3 植物は感情領域への写像

人間は様々な感情を有している。好きな人に対し愛情、親しい友達に対し友情、別れの時に悲しみを感じる。社会が発展するとともに、人間の「生きる」ことが「生存」から「生活」に変わっていき、感情世界も複雑で豊かになっている。従って、植物の役割も衣食住の原材料から、感情を託す対象となった。

人間の感情世界の中でも、「恋愛」は特別な感情経験である。日常言語には、「恋愛」に関する表現が数多く存在する。谷口は、図 4-7 に基づいて、「恋」に関するメタファーに注目し、複合的な側面から「恋」という概念を解釈している。

---

[30] 「草食男子」:コラムニストの深澤真紀が 2006 年に命名。協調性が高く、家庭的で優しいが、恋愛やセックスには積極的でない、主に 40 歳前後までの若い世代の男性を指す。

[31] 森岡正博 (2011) 「『草食系男子』の現象学的考察」(http://hdl.handle.net/10466/11851（2018/12/23）)

[32] “全受賞記録>年度別>第 26 回 2009 年”. ユーキャン新語・流行語大賞. （2018/12/23）

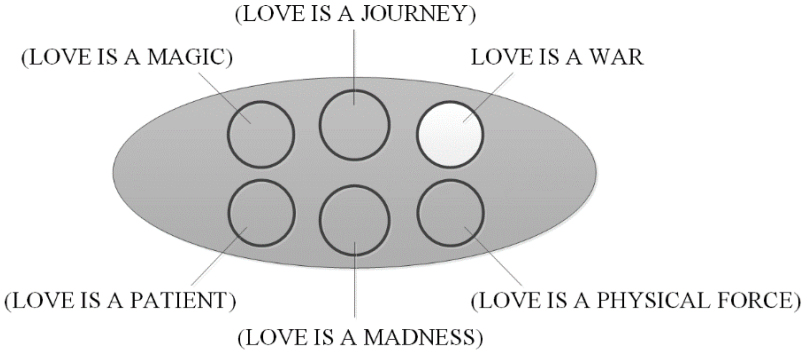


図 4-7（谷口 2003：19）

近年、中国では、認知的視点から恋のメタファーについての研究がなされている。張･徐（2010）は、コーパスデータ[33]に基づき、中国語の“爱”をキーワードに設定してデータを分析している。その分析の結果は、表 4-2 のようになる。

表 4-2 コーパスに基づく恋のメタファー：調査結果（張･徐 2010：55）

物体	植物	火・流体	商品	力量	人	建筑物	赛跑	其他	总计
22%	17%	18%	8.5%	7%	8%	7%	8%	4.5%	100%

「恋」のメタファーに関しては、中国語に「植物」を用いる表現は 17%が占め、一般物の 22%、火･液体の 18%の次である。張･徐（2010）の分類には、その妥当性を検討する余地はあるが、この調査から、恋に関し植物を用いる表現の比率がかなり高いことが理解される。

孫（2011：127）は、「恋」に関する概念メタファーを考察する際に、「恋は植物」のメタファーについて、次のように述べている：「爱情如植物一般，有其生根，发芽，开花，结果的过程。植物的生长需要一定的阳光和水分，爱情也同样需要爱的双方悉心浇灌与呵护（恋は植物のように、根を下ろす、芽が出る、花が咲く、実を結ぶというプロセスを介する。また、植物の生長には日光と水分が必要であるように、恋は二人で大事に育てなければならない。　（筆者訳））」。「恋」という感覚の発生、発展は、植物の成長過程と類似性を持

[33] コーパス：利用された中国語コーパスは「国家语委现代汉语语料库」。

つ。また、植物を育てるには「養分」が不可欠であるように、「恋」も大事に育てないといけない。植物に基づく恋の修辞的な表現としては、以下の例が挙げられる。

（28） a. 爱情的种子悄悄发芽

b. 爱情之花绽放

c. 结出了甜蜜的爱情果实

d. 爱情的苦果

e. 浇灌爱情之树

（29）a. 恋が芽生える

b. 恋の花が咲く

c. 一目惚れの恋は実る

d. 片思いが実らない

e. 上質な恋を育てる

「恋は植物」のメタファーには、日中両言語において、かなりの共通性が認められるが、相違も存在する。ここでは、LOVE IS A PLANT（恋は植物）のメタファーを中心に、「恋は草木（特に細長い植物）」、「恋は花」、「恋は実」などのメタファー表現について考察する。

中国では、植物を通して感情を伝える表現は、『詩経』に見られる。草花の生える場所は恋愛の場を作り、茂っている花木に恋の気持ちが反映される。王（2007：59）は、『詩経』の 305 篇の詩歌を調査している。その結果、草類 37 種、薬用植物 17 種、木類 43 種、谷類植物 24 種、野菜 38 種、花果 15 種の表現が存在する、と指摘している。恋の歌に用いる植物の表現としては、特に「恋は草」、「恋は実」などの表現が注目される。

（30）のように、『詩経』には“投果”に関する詩歌が数多く、果実を相手に投げることは好意を抱くという風習がある。これにより、果実は恋の証と見なされる。

（30） 投我以木瓜，报之以琼琚。匪报也，永以为好也。[34]（《国风・卫风・木瓜》）

（31）两人还具有共同的爱好：看电影、听京戏。一桩异国恋情在抗日前线开花结果, 1943 年, 他们的第一个儿子“保中”在贵阳出生。 （新华社 2004 年 6 月份新闻报道）

[34] 彼女が贈るボケの実に　帯玉のルビーがその返し　お礼の返しなんかぢやなく　いついつまでも愛のしるしと

（31）では、“开花结果”通して、果実は女性の成熟、恋のシンボル、そして出産の意を表している。ここでの「恋は実」のメタファーには、恋が発展していくという思いが反映されている。また、昔から子孫繁栄を重視する思想の影響で、生殖と繋がる「実」のは縁起の良いものとされている。この事実は、「恋は植物」のメタファーを関係している。

【恋は実のメタファーに用いる植物】： 梅 木瓜 木桃 木李 山椒 芍薬など

中国では、古来から「成双成対」を重んじる。この思想は、恋愛、婚姻観念にも反映されている。青桐は、中国では“梧桐”と呼ばれる。伝説によると、“梧桐”の木は二本あり、“梧”は雄、“桐”は雌である。（32）の例のように、東漢時代から、“梧桐”は、既に男女における「永遠の愛」のメタファーとして使われている。

（32） 东西植松柏，左右种梧桐。枝枝相覆盖，叶叶相交通。 （《孔雀东南飞》）

唐代の白居易は、楊貴妃と玄宗皇帝の愛の物語を『長恨歌』として、次のように詠っている：“在天愿做比翼鸟，在地愿为连理枝”[35]この詩句では、“连理枝”の表現を用いて、（幹や枝が絡み合う様子に基づいて）二人の永遠の愛を詠っている。中国語では、“连理”は、男女が結ばれて夫婦になることのメタファー表現として定着している。また、“并蒂莲”は、一本の茎に蓮の花が二つが並んで咲く様子に、夫婦円満の意味を読み込んでいる。

（33） 许海峰赵蕾喜结连理。 （《羊城晚报》1985/12/21）
（日本語訳： 許海峰は趙蕾と結婚している。 （筆者訳））

日本語には、中国語から「連理」の語を取り入れ、「連理の契り」が、男女の間の永遠に睦まじく変わることのない契りのことを表している。一つの枝が他の枝と連なるのは珍しいので、吉兆とされ、「縁結び」、「夫婦和合」などの象徴として信仰の対象ともなっている。

京都の下鴨神社[36]に「連理の賢木」があり、「縁結びの神」として祭られている。また、

[35] 「天にありては願わくは比翼の鳥とならん、地にありては願わくは連理の枝とならん」の意味である。（https://bitex-cn.com 2018/12/16）
[36] 下賀茂神社：kyoto-k.sakura.ne.jp/jinjya1067.html（2018/12/16）

貴船神社の「連理の杉」[37]が大正 13 年、貞明皇后御参拝の折に賞賛された御神木であり、杉と楓が和合したのもので、非常に珍しい木として崇められている。このように、「連理」は、日中両国とも相思相愛の木の意味となり、そこに男女の愛の願いが込められている。

『詩経』には、植物を通して恋人への思いを描写する詩歌が数多く存在する。荇菜、萱草、白茅、葛、艾草、菟丝子、蒲草、蒲柳[38]などは、若い男子が好みの女性への思い、妻は遠方の夫への思い、青年男女は相思相愛の気持ちを表す。このような「思い」を表す植物は、「恋は絡み合うもの」というメタファーに関係する。

孫(2011:127)は、恋に関するメタファーを考察し、LOVE IS AN INTER-TWININGENTITY（恋は絡み合うもの）という恋の側面に注目している。一般的に、絡み合うものは「離れがたい」と「柔らかい」の特性を有する。恋に落ちる人間には、相手のことが頭から離れない気持ちがある。また、大切な人のことを考える際に、「こころを溶かす」という気持ちが起こることも珍しくないので、恋は柔軟なものに喩えられる。

（34）のように、中国語には、柳は別離の象徴とされ、そこに「相思」の感情が託されている。

（34） 从前这儿本是北京第一个邮亭，出京的人往往和送行的人在这儿作别，所以前人的诗有这么一句，叫「落日芦沟桥上押，送人几度出京华」现在落日和晓月还和从前一样，只有那依依送别的杨柳可不大看见了。（《芦沟桥》）

垂れの柳は風と共に舞い上がり、「絡み合い」と「柔らかさ」のイメージはお別れ際の「離れがたさ」を喚起する。「折柳」は古い礼儀であり、遠方に行く人に柳の枝を贈ることを通して、「君を忘れない」の意を伝える。また、道中安全の祈願の意を含んでいる。

日本では、『古事記』や『万葉集』に多く登場する藤は、高貴な花として日本人に愛されている。風にやさしく揺れる様から、「やさしさ」と「恋に酔う」のような意味を担っている。

（35） a. 君当作磐石，妾当作蒲苇,蒲苇纫如丝，磐石无转移。(《孔雀东南飞》)

[37] 貴船神社：kifunejinja.jp/access/kifunemap/detail.html(2018/12/16)
[38] これらの植物に対応する日本名は:アサザ、ワスレグサ、チガヤ、クズ、ヨモギ、ネナシカズラ、ガマ属、ヤナギ属

b. 你藕断丝连，把你的旧情人请到家里。　　（《情人们和朋友们》）

（35）の a には、次のような意味が込められている。あなたが石のようであれば、私は“蒲苇”[39]のようである。“蒲苇”は切れない、石は動かない。ここでの“蒲苇”は、「柔らかさ」だけでなく、「切れない」も意味する。このような特徴は、動揺しない感情のメタファー表現となる。

（35）の b には、“藕断丝连”[40]のような表現があり、蓮根を切り離しても細かい糸がなおもつながっている特徴から、未練があるを意味する。このような植物の「切りにくい」という特徴は、愛の切りがたさを表現する。

以上、「恋は実」、「恋は植物（特に絡み合う植物）」に関するメタファー表現を考察したが、古代社会には、認知度が高い「恋は花」の表現はあまり見られない。花が恋のメタファーである「落花」は、その代表的な表現である。宋の時代の有名な女性詩人の李清照[41]は、“花自飘零水自流，一种相思，两处闲愁”の詩句を詠んでいる。この詩では、遠方の夫への思いを「落花」と「流水」に託している。「落花」は花が落ちる様子に基づいて、相手への恋ごころを表す表現であり、特に哀愁、孤独の感情を含む。“落花有意，流水无情”[42]のような慣用表現は、片思いのメタファーとして使われる。（日本語では「落花流水の情」として使用される。）

現代の詩人席慕容は、このような「落花」のメタファーを使って、果たせない恋の悲しみを、（36）のように歌っている。この詩人は、好きな人に無視される時の「悲しさ」を、落ちる花のようであると喩える。

（36）　而当你终于无视地走过
　　在你身后落了一地的
　　朋友啊
　　那不是花瓣

---

[39] “蒲苇”は英語で pampas grass、日本語ではシロガネヨシと呼ばれる。

[40] “藕断丝连”は、唐代の詩人孟郊の詩句（“妾心藕中丝，虽断犹牵连。”（《去妇》）からの表現であり、夫に捨てられた女は、蓮根を切り離してもまだつながっているように、関係を断っても、夫に対してまだ未練がある気持ちを表す。

[41] 李清照（りせいしょう、1084 年－1153 年）北宋末期・南宋初期の詩人。斉州章丘（現在の山東省済南市章丘区）の人。夫は政治家の趙明誠。中国史上を代表する女流詞人として知られている。（https://ja.wikipedia.org/wiki/　(2018/12/15)）

[42] 「落花流水の情」の意で、よく叶えない片思いの意味として使用される。

那是我飘零的心　　（《一棵开花的树》）

中国語の場合、花を用いて恋愛を喩える表現には、マイナス的な意味が多い。花の「柔らかさ」、「脆さ」、「持ち時間が短さ」の特徴に基づいて、「落花」のイメージを形成し、「恋の切なさ」、「果かなさ」のメタファーとして使うが、桃の花は特殊例である。中国語には“桃花运（桃の花の運)”のような表現があり、女運、恋愛の運のことを表す。

また、中国語には、(37）のような表現があり、桃の花の運は特に恋愛の運を表し、桃の花は恋のメタファー表現として使われる。

(37)　她娘家是鲍山那边十里铺的人家，做姑娘时如花似玉。都说鲍秉德交了桃花运，娶了十里铺的一枝花。　　（《小鲍庄》）

（日本語訳：実家は鮑山の向こうの十里铺にあるが、娘時代は花のような美人で、鮑秉德は女運に恵まれて、十里铺から花を一輪手にいれた、と評判だったものだ。）

「恋は桃の花」のメタファーは、花と四季の関係が合わさったものである。段（2016a）は、“仲春，令会男女，奔着不禁。”[43]、“桃之有华，正婚姻之时也。”[44]を考察し、桃の花が咲いている春は、青年男女が恋愛、結婚する時期だとしている。これは「春は交配の季節」という自然界における一般的な知識に関係している。

このような桃の花のメタファーは、図 4-8 のような認知プロセスに基づいている。

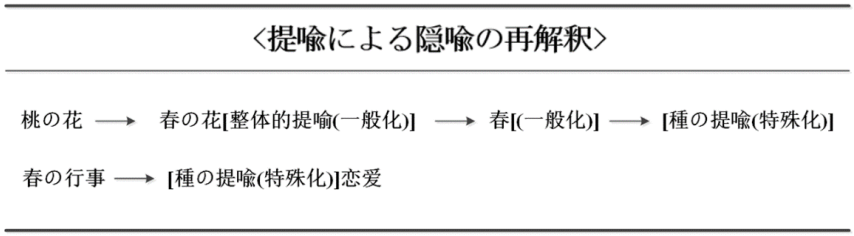


図 4-8 シネクドキによるメタファーの再解釈（段 2016 を参考）

前で述べたように、『詩経』の時代から、桃の花は、女性のメタファーとして使われている。桃花の運が、女運のことや恋愛を表すのは、〈桃の花―適婚期の女性―愛情〉の連想プ

[43] 仲春之月，令会男女，奔着不禁：春は男女交歓の季節である。（《周礼•地官•媒氏》）
[44] 桃之有华，正婚姻之时也：桃の花が咲く時期は、婚約を結ぶ時期である。（宋•朱熹《诗集传》）

ロセスに関係している。

日本語では、古典和歌の中に、露草がよく登場する。『万葉集』では、露草を「月草」と呼んでいる。（38）の a のように、朝が咲き始め、夕方には姿を消えてしまう露草は、変わりやすい心と恋の切なさを表す。また、b のように、露草で染めた織物は色が落ちやすいことから、感情が薄れていく人間の心理をも連想させる。

（38） a. 朝咲き　夕は消ぬる　月草の　消ぬべき恋も　我れはするかも

（巻 7－1255）

b. 月草の　うつろひやすく　思へかも　我が思ふ人の　言も告げ来ぬ

（大伴坂上家の大嬢,巻 4－583）

また、（39）のように、朝顔は目立たないことから、言い出せない秘かな恋を表す。和歌に用いる恋に関する植物の露草、朝顔、紫などは、「小ささ」、「目立たなさ」、「色の薄さ」、「咲く時間の短さ」などの特徴を有し、恋の「繊細さ」、「脆さ」、「変わりやすさ」を表現する。

（39） 言に出でて　言はばゆゆしみ　朝顔の　穂には咲き出ぬ　恋もするかも

（巻 10－2275）

中国語でも、日本語でも、花を用いる恋に関するメタファーは、恋の「悲しさ」、「切なさ」、「変わりやすさ」を表現するのが多い。一方、英語の影響を受け、「愛は赤いバラだ」というヨーロッパ文化からの恋のメタファーが中国語、日本語にも入っている。この事情により、「花言葉」の広がりとともに、「恋は花」の表現は、永遠の恋、真実の恋などを表すようになっている。「恋は花」のタイプのメタファーは、かなり定着している。

（40） My Love is Like a Red, Red Rose[45]

（40）の「愛は赤いバラだ」というメタファー表現は、世界中に広がっている。rose は

[45] "A Red, Red Rose" is a 1794 song in Scots by Robert Burns based on traditional sources.(https://en.wikipedia.org/wiki/ (2018/12/15))

ギリシャ語の rhodon からきた言葉という語源説があり、rhodon という言葉には、バラの色に関連して、「赤い」という意味があったようである。「現在私たちが考えているようなバラのみを指したものではなく、広く、美しい花はすべて rhodon とか rosa と呼ばれているようである」（樋口 2004：37）。

ギリシャ神話では、美の女神アフロディテが海の泡から生まれた時に、バラも一緒に生まれたものとされていた。バラに関するギリシャ神話や伝説の中でも、女神のアフロディテが、恋人のアドニスを救うため足に怪我をし、流した血が白色のバラの花を赤く染めたという逸話が有名である。

中世になってから、バラとキリスト教の関係が密接になり、受難や殉教の血の象徴となった。「この受難の意味はしだいに薄れてゆき、キリストとしてこの世に姿を現した愛の象徴となった」（樋口 2004：78）ことにより、近代に至って、バラは美人、情熱への連想を喚起するようになる。そして、バラの意味は、「神様の愛」から「人間の愛」に移っていき、恋人同士の愛を意味するようになる。愛が赤色のバラであるのは、赤色が引き起こす「情熱」、「犠牲」などの身体感覚と関係する。このように、赤いバラは、恋人に対する「真実の愛」のメタファーになったと考えられる （cf. 図 4-9）。

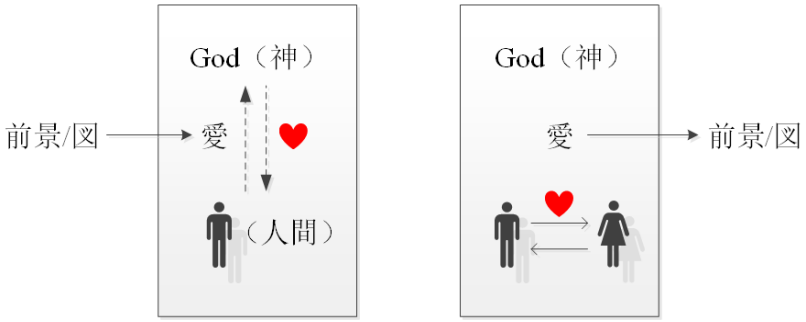


図 4-9

伝統的には、「恋は絡み合った植物」のようなメタファーは、中国語と日本語にも存在し、恋の「離れがたさ」を表す。また「恋は実」に関するメタファーには、恋を遂げるように進んでいくの意があり、子孫繁栄の思想とも繋がっている。また、日本語の場合、「実る」などの表現は、恋を遂げるの意味を表すが、中国語のほど「生殖」の意味が強くない。

花の「長く持たない」、「落ちやすい」などの特徴は、「永遠」、「円満」な婚姻や家庭生活を求める中国人にとって、マイナス的な意味が多い。従って、中国語の場合、「恋は花」の

メタファーには、「落花」のような恋の悲しみを表す例が多く見られる。

日本語には、「恋は花」のメタファーは、「目立たない」、「咲く時間が短い」、「色が薄れていく」、等のイメージに基づいて、相手の気持ちが変わりやすいことや切なさを表す傾向がある。また、「果たせない恋」、「果たした恋」、「熱烈な恋」、「せつない恋ごころ」のような表現は、われわれの身体経験に基づいている。

女性の気持ちは、“蒲苇”のように柔らかいけど頑丈で、男性の気持ちは「石」のように堅いという感覚に基づいて、恋愛関係における性別の差を表現する例も存在する。例えば（41）のように、勇敢に恋をする現代女性たちは、自分で生きることができない凌霄の花[46]のようになりたくないと思う。また、「木」のように、好きな男性のそばに立った恋愛関係の「自由」と「平等」を求める。

（41） 我如果爱你——
绝不像攀援的凌霄花，
借你的高枝炫耀自己：
…
我必须是你近旁的一株木棉，
做为树的形象和你站在一起。 （《致橡树》）

4.4 植物の精神領域への写像

4.4.1 「植物は美徳」のメタファー

植物に基づくメタファーは、形状や色など植物の外観的特徴における類似性を基盤とするのが多い。特に、植物の生長特性に関する経験に基づいて、植物の内的特性を人間の内的特性に喩える例が見られる。

中国では、『詩経』と並ぶ中国古代の詩集『楚辞』[47]の中に、大量な“香草”植物を描写

[46] ノウゼンカズラ（*Campsis grandiflora*）夏から秋にかけ橙色あるいは赤色の大きな美しい花をつけ、気根を出して樹木や壁などの他物に付着してつるを伸ばす。中国原産で平安時代には日本に渡来していたと考えられる。夏の季語。(https://ja.wikipedia.org/wiki/ (2018/12/15))

[47] 中国古代の文学作品集。戦国時代の楚の屈原の作品と、その作風にならった宋玉や後人の作品を集めた書。現行本は、漢の劉向(りゅうきょう)の編んだ 16 巻に、後漢の王逸が自作の 1 巻を加えたもので、17 巻。「離騒」「九歌」「天問」などを収める。(デジタル大辞泉 2019/01/10)

する表現が見られる。“香草”は、独特の匂いの植物の総称である。“扈江离与辟芷兮”、“纫秋兰以为佩”のように、川穹、白芷、泽兰、蛇床、款冬[48]など芳しい植物を内室に飾ったり、香り袋に入れて持ち歩いたりすることから、“香草美人”は、人格者と良い品徳を喩える表現として使われる。逆に“恶草”は、悪い人や下品な人などの喩えとして使われる。“香草”が美徳の表現になるのは、空間の隣接性に基づくメトニミーによるものと考えられる。尚、中国の日常生活では、“香草”は、特にバニラを指す場合が多い。

日本語では、「香草」は、「かおりぐさ」と呼ばれ、「川緑（かわみどり）」という薬用植物を指す場合があるが、現在はハーブ（herb）の漢字表記としても使用されている。また、「香草」は、香辛料を指す場合が多く、「香草焼き」は植物の表面に香辛料をつけて焼く料理法である。「秋刀魚の香草焼き」、「鮭の香草焼き」はポピュラーな日本料理となっている。日本では、「香草」の食用と薬用価値は重視される。

中国では、「香草」植物の一種の「蘭」は、静かな谷に生える。従って、中国語では、その淡々とする香りが高く評価され、「淡泊」、「高潔」のように品格を喩える表現に使われる。また、（42）のように、唐代の韓愈[49]は「幽蘭操」の詩を詠み、蘭の香りは百花の王者と賛美している。李白も、「草であれば、蘭になりたい」と蘭のことを賛美している。

（42） a. 兰之猗猗，扬扬其香。众香拱之，幽幽其芳。（唐•韩愈《幽兰操》）

b. 为草当作兰，为木当作松。兰秋香风远，松寒不改容。

（唐•李白《于五松山赠南陵常赞府》）

c. 我从山中来，带着兰花草。（胡适《希望》）

中国の近代の思想家の胡適は、古い文体を捨て、分かりやすい話し言葉で詩歌を創作する「新文化運動」の提唱者である。彼の 1921 年の「希望」という詩歌の中に、「私は山の奥からきて、蘭花草を持っている」という句がある。ここでは、「蘭」は、「純粋な理想」の意味を表し、高潔の品格と繋がっている。

このように、植物で人間の品格を喩えるのは、中国の儒家思想と関わっている。儒家思想の代表者の孔子は、以下の例に見られるように、「礼」、「仁」の政治主張を提唱し、「君

[48] これらの植物は漢方薬として使用される。

[49] (768～824) 中国、唐の文学者・思想家。唐宋八家の一人。昌黎先生と称される。儒教、特に孟子を尊び、道教・仏教を排撃した。柳宗元とともに古文復興運動に努めた。（デジタル大辞泉　2019/01/10）

子」としての行為を規定して、中国文化に大きな影響を与えている。

> “君子”一词可以与“仁者”、“贤者”互换使用的情况表明, 在儒家思想里, 君子这个概念是“道德之称”。换言之, 君子这一概念是指称具有一定道德品性的主体（个人）的。
>
> （龚 2006：24）
>
> （日本語訳： 「君子」という言葉は、「仁者」、「賢者」と入れ替えることができる。儒家思想では、「君子」という概念は「道徳」の名称である。換言するなら、「君子」という概念は、道徳がある人間に対する呼び方である。 （筆者訳））

龚（2006）が指摘しているように、「君子」という概念は、道徳に関する概念である。この概念は、身分の概念にも関係する。

> “君子”这一概念如同英语中的“gentleman”一样, 最初是专指社会上层高位的人, 是贵族阶层在位者的称谓;下层庶民纵有道德, 也不配称为“君子”, 因为他们另有一“小人”的专名。而到了孔子这个时期, 已经经过长期演化, 从身份地位的概念变为以道德品质为内涵, 但还留有某种身份痕迹。 （龚 2006：24）
>
> （日本語訳： 「君子」という概念は、身分の象徴であり、英語の「gentleman」のように、貴族階層の権力者の言葉であった。庶民は道徳を有しても、「君子」と呼ばれることができず、「小人」と呼ばれる。孔子の時代になって、「君子」の身分の象徴としての意味は薄れ、道徳と品格の意味を表すようになったが、ある程度「身分」の象徴の意味も残っている。 （筆者訳））

このような儒教思想の影響で、「君子」になることは、古来の中国文人の目標であった。彼らは、政治への関心や人生理念などを植物を通して比喩的に表し、植物に人間の性格を与え、理想的な「君子」のイメージを描いた。

中国では、「梅」、「蘭」、「竹」、「菊」は、「四君子」と呼ばれ、中国文人の精神を喩える。また、現在の中華民族精神の象徴にもなり、文化的意味が附与されている。「梅蘭竹菊」の記述については、「竹」に関する記録が最も早く、その次に「梅」に関する記述が『詩経』にある。また、「蘭」と「菊」は、「離騒」には現われるが、「菊」が注目されるのは、晋の

陶淵明が菊を高く評価してからである。宋の時代になり、「梅蘭竹菊」は、文人画や文学の主役となり、「君子」思想の代表として定着した。以下では、「梅蘭竹菊」の比喩表現の諸相を考察する。

▸ 〈梅〉

中国では、周の時代から、梅は3000年以上の歴史があり、隋唐の時代に「賞梅」の風習は広がり、唐宋にはさらに盛んになった。宋元の時代に至って、「梅」を詠う詩歌が増え、「梅」は、「牡丹」を超え、文人階層に愛される花になった。

（43）に示されるように、“暗香疏影”[50]は、梅の別称で、梅の寒さに耐えて花を咲かせ、爽やかな香りを放つ特徴は、多くの文人たちに愛された。

（43） a. 疏影横斜水清浅，暗香浮动月黄昏。 （北宋•林逋《山园小梅 其一》）

b. 墙角数枝梅，凌寒独自开。 （北宋•王安石《梅花》）

c. 无意苦争春，一任群芳妒。零落成泥碾作尘，只有香如故。

（南宋•陆游《卜算子•咏梅》）

d. 冰雪林中著此身，不同桃李混芳尘。 （元•王冕《白梅》）

このような「寒さに強い」、「清らかな香り」の特徴に基づいて、「根性がある」、「清廉」などの人間の性格が梅の花で喩えられ、「梅」は、宋代の「花」の代表的なイメージになった。

以上の考察から、中国語における梅の物理的特性と顕現的特性は、以下のように定義することができる。

〈梅〉： a. 寒中に花が咲く；淡々とする香り；花が咲く時は他の花が咲かない etc.

b. 根は強い；淡泊；高潔；世間と合流せず；争わない、etc.

[50] 梅は葉より先に花が咲くため、“疏影”（月光に照らされ、疎らに映る木々の影）の特徴を有する。そして、“暗香”（どこからともなく漂ってくる良い香り）の特徴に基づいて、“暗香疏影”は梅の別称になる。

このような梅の特性は、「君子」が求める「謙遜」、「精神的強さ」等の品格と照合し、「君子」のメタファーとして使われる。宋の時代は、中国の国力が衰えて、政治が混乱した時代である。この時代には、国家に力を尽くそうとする文人たちは重視されなくなり、個人的に自分の理想を「梅」に託した。

日中交流が盛んになった平安時代、中国の賞梅の影響を受け、日本でも梅を見ることが風雅な遊びとなる。『万葉集』の梅に関する和歌について、阎（2014）は、以下のように述べている。

> 集中出现在天平时期（729-749 年），大多出自大伴旅人、大伴家持等贵族官人之手，他们在吸收中国传统梅文化，模仿中国古代咏梅诗的基础上创作了咏梅和歌。
>
> （阎 2014：62）
>
> （日本語訳： 梅に関する和歌は、天平時期（729－749）に集中している。この種の和歌は、大伴旅人、大伴家持など貴族階層に詠われるものが多い。彼らは中国の梅文化を受け入れ、中国の梅詩を模倣して、梅を詠う和歌を創り出した。　（筆者訳））

天平 2 年（730 年）、大伴旅人は、大宰府の官邸で「梅の宴」を設けた。これは、初めての「梅の花」を主題とする和歌の宴会である。その後、「梅の花」は、日本文学に浸透し始める。梅に関する和歌は、純粋に自然風景についての描写をすることが多い。大伴旅人の詠梅詩には、故郷を懐しみ、人生を嘆く歌が多いが、中国語の詩のように政治的な側面に言及する歌は殆ど見られない。

（44）　a. わが園（その）に　梅の花散る　ひさかたの　天（あま）より雪の　流れ来（く）るかも

（主人,巻 5－822）

b. 梅の花　折りかざしつつ　諸人の　遊ぶを見れば　都しぞ思ふ

（土師氏御道（はにしうぢのみみち）,巻 5－843）

▸ 〈竹〉

中国では、竹類の植物がよく利用される。以下の引用に示されるように、中国文化には、竹は、単なる生活、生産の道具ではなく、宗教、芸術、政治など精神的領域にわたって、

文化的に重要な存在である。夏商の時代から、竹製品が多様化したとともに、使用者の身分によって、竹製品の使用には人々の階層によって相違がある。

这一专化趋势的形成,虽然有一定的器物的自然属性方面的根源,但更为主要的原因则是中国传统文化中的“礼制”的作用。（何 1999：13）

（日本語訳：「専用化」の形成は、竹は天然的な容器であるという物理的特徴に関わっているが、もっと大事なのは中国伝統文化における「礼」という思想の影響である。（筆者訳））

何（1999）が述べているように、竹製品は、宴会、結婚式、祭りの儀式など行事に使用する「礼器」として、中国伝統文化の重要な一部になっている。このような社会背景により、昔の時代の竹は、「礼」と関係し神聖な意味が附与された。竹に関する記述は多く見られるが、注目されるのは魏晋南北朝以降で、山水詩の発展とともに、詠竹文学が誕生し、竹は中国古典文学の主題の一つになった。次の例を見てみよう。

（45） a. 竹似贤，何哉？竹本固，固以树德，君子见其本，则思善建不拔者。竹性直，直以立身；君子见其性，则思中立不倚者。竹心空，空以体道；君子见其心，则思应用虚受者。竹节贞，贞以立志；君子见其节，则思砥砺名行，夷险一致者。夫如是，故君子人多树之，为庭实焉。（唐•白居易《养竹记》）

b. 原夫劲本坚节，不受雪霜，刚也。绿叶萋萋，翠筠浮浮，柔也。虚心而直，无所隐蔽，忠也。不孤根以挺耸，必相依以林秀，义也。虽春阳气王，终不与众木斗荣，谦也。四时一贯，荣衰不殊，常也。（唐•刘岩夫《植竹记》）

唐代の白居易は、(45) a のように竹を賛美し、竹の特徴を“本固”、“性直”、“心空”、“节贞”としている。このような竹の「しっかり根が下す」、「まっすぐ」、「中は空き」、「節がある」の特徴は、「根性がある」、「正直」、「謙遜」、「気持ちが変わらない」という人間の美徳の喩えになっている。また、(45) の b のように、唐代の劉岩夫は、竹は、“刚”、“柔”、“忠”、“义”、“谦”、“常”の品格を有するとしている。また、文人たちは、庭に竹を植えることが風雅である一方、竹のように生きたいという思想を抱いている。さらに、宋代の

蘇軾は、“宁可食无肉，不可居无竹。无肉令人瘦，无竹令人俗（竹のないところに住むくらいなら、肉を食べない方を選ぶ）”の詩句を詠んで、竹の重要性を示し、竹のような「君子」で生きる決心を表した。

日本でも、竹は神秘で神聖な象徴であり、日本文化の重要な一部なっている。4 世紀以前の九州は、日本列島の先進的な地域で、当時中国文明が伝来した重要な経路であった。九州南部の原住民は、日本の竹文化を創り出したと言われている。また、6 世紀から 7 世紀の頃、当時の『万葉集』を含め、多くの日本文学には竹が言及されている。

任（2016：45）は、『万葉集』における竹に関する 37 首、関連する記述 185 ヵ所の和歌を考察し、（46）の a のように、「さす竹の」という表現は、大宮、皇子への祝福の枕詞となり、竹は高貴な女性、貴族、皇子の象徴であると指摘している。これは竹の旺盛な生命力と関わり、権力階層への祝福の意味を含む。また、（46）の b は、竹の「繊細さ」という特徴に基づいて、竹により若い女性の美しさを喩えている。

（46） a. さす竹の　大宮人（おほみやひと）の　家と住む　佐保（さほ）の山をば　思ふやも君

（石川朝臣足人,巻 6－955）

b. 秋山の　したへる妹（いも）　なよ竹の　とをよる子らは…

（柿本朝臣人麻呂,巻 2－217）

日本では、竹の「中が空いている」という特徴に基づいて、その中には神が宿るという竹の信仰があり、『古事記』、『風土記』には羽衣天女は竹林から誕生したの記述もある。有名な「竹取物語」の主人公のなよ竹の輝夜姫は、竹から生まれたが、綺麗な少女に成長できたのは、竹の「生命力」と「神秘性」による。

▸ 〈菊〉

「四君子」の四位となる菊の花は、他の花が衰えてる秋に花が咲くため、「淡泊」という品格が与えられている。晋の陶淵明は、田園詩派の第一人者であり、（47）の a のように、彼の作品には菊を賛美する詩歌が多いため、「晋陶淵明独愛菊」と評されている。

（47） a. 结庐在人境，而无车马喧。

问君何能尔？心远地自偏。

采菊东篱下，悠然见南山。[51]　　（晋•陶渊明《饮酒•其五》）

b. 不是花中偏爱菊，此花开尽更无花。（唐•元稹《菊花》）

c. 寒花已开尽，菊蕊独盈枝。（唐•杜甫《云安九日》）

d. 宁可枝头抱香死，何曾吹落北风中。（宋•郑思肖《寒菊》）

政治に失望した陶淵明は、最後に田園に帰って、隠者の生活を送っていたので、彼が好んだ「菊の花」は「隠者」の象徴ともなった。(47) の b～d のように、菊の「百花と争わない」、「秋風に強い」という特徴は、文人たちに愛される特徴と言える。

また、「菊の花」が文人たちに高く評価されたのは、儒教の「仁」の思想に起因している。孔子を代表とする儒家思想は、「仁」を中心とする。「克己复礼為仁」のように、「仁」は「克己」のことで、「争わない」は「仁」に通じる。百花が咲く春ではなく、秋に花が咲く菊の花は、このような「仁」の思想と繋がり、中国の伝統的な思想体系の重要な一部となった。現代中国語には“人淡如菊”という表現があり、「菊のように淡泊」という意味で人間の争わない性格を意味する。次の劉（2010）の指摘も興味深い。

「菊（きく）」原产中国，有三千年的栽培历史，《史记》和《山海经》中都涉及了菊花。它东传日本的时期，不可能早于奈良时代（710-784）。这是因为 712 年问世的、文学色彩浓厚、现存最古的史集『古事記（こじき）』和 720 年问世的敕撰正史『日本書紀（にほんしょき）』中，均未出现「菊」的字样；奈良时代末期问世的、以吟咏纷繁的植物为特色、现存最古的和歌集『万葉集（まんようしゅう）收入的 4500 余首和歌中，竟无一首咏菊，故日本古谚云：“万叶无菊”。　　（劉 2010：37）

中国原産の菊が日本に伝わってきたのは奈良時代（710—784）以降であり、『古事記』、『日本書紀』には菊に関する記載はなく、大量な植物を詠んだ最古の和歌集『万葉集』にも菊を詠う歌は一首も存在しない。日本現存の最古の漢詩集『懐風藻』には、菊に関する詩歌は 6 首があるが、漢詩の模倣作だと思われる。「唐風文化」を崇拝とする平安時代になって、宮廷に菊の花を栽培、観賞する記載がある。例えば、桓武天皇は、「曲水の宴」の際

[51] 廬を人里に構えて住んでいるが、貴人の車馬の来訪するさわがしさもなく、心静かに暮らしている。人は「君に問うが、何故そのように静かに暮らせるのか」という。私は答える、心が俗世から遠く離れ ていると、わが住む土地も自然と片田舎のように、訪う人もまれになるのだと。私は菊を東のまがきの下に取って、ゆったりと南の山を見るともなく眺める。

に観菊、詠菊を行い、「菊の盃」、「菊花の宴」が宮廷の重要な行事となった。菊の花は、貴族階層に愛され、嵯峨天皇が菊を詠んだ歌も現存している。また、劉（2010）の次の指摘も興味深い。

> 在日本的政治文化激烈大变革的漫漫历史过程中，菊花作为带有永久性和神圣色彩的特权之象征，其特殊文化内涵，愈发得到强化与外扩。　　（劉 2010：38）
>
> （日本語訳：日本の政治や文化が大きな変革が起こっている長い歴史の中に、菊は「永久」と「神聖」の特権の象徴として、その文化的意味が拡張している。　（筆者訳））

菊の花は、皇室の紋章になり、戦後、天皇は国家的な権力を失ったが、菊は、皇室の象徴として続いてきている。文化人類学史上で最初の日本文化論と言える『菊と刀』は、「菊」は、日本の国民性の象徴であるとしている。中国では権力を遠ざける隠者の象徴である菊の花は、日本では、逆に権威と身分の象徴になった。

「梅蘭竹菊」は、「君子」のメタファーとして中国語に定着している。そのほか、「松竹梅」は、「歳寒三友」と呼ばれ、松、竹と梅は寒中の友であり、人間の親友であるという説もある。寒い時期に生き生きとしている松、竹、梅は、文人たちが自分の理想を託す植物である。「歳寒三友」の起源については、唐代には既に広がったという説と北宋末期の頃に広がったという説があるが、程（2000：33－34）は、「歳寒三友」は、南宋の時期には現れ、絵画のテーマから広がった可能性が高いと指摘している。

▸ 〈松〉

松についての記述は、中国最古の詩歌集『詩経』にはすでに多く見られる。“如竹苞矣，如松茂矣。”[52]の句から、松は季節を問わず、常緑で生命に満ちている、と古代中国人が意味づけしている。“松柏斯兑”[53]は、松の「高大、まっすぐ」の特徴についての描写であり、まっすぐな松の姿を賛美している。孔子は“岁寒，然后知松柏之后凋也”[54]と述べ、松が寒さに強いという点に注目している。

以上の記載に基づいて、中国文化には、松は「常緑で茂る」、「長生きする」、「まっすぐ

---

[52] 竹のような緑色を染めて、松のように茂っていること。（「小雅·斯干」）
[53] 君主が、まっすぐな松を姿を見て喜んでたこと。（「大雅·皇矣」）
[54] 寒中、松や柏が枯ずに茂っていること。（『論語』）

で高大」、「寒さに強い」であることが明らかになる。

（48）の例が示すように、松の「寒さに強い」、「動かずにまっすぐ」という特徴は、人間の「しゃきっとしている姿」、「挫折や困難に負けない性格」の喩えとして使われる。

（48） a. 岂不罹凝寒，松柏有本性。[55] （魏晋•刘桢《赠从弟》）

b. 大雪压青松，青松挺且直。 （现代•陈毅《青松》）

このような特徴を持つ松は、古来から儒教思想が高く評価する「正々堂々」や「根性がある」など、人間が有すべき貴重な品格のメタファー表現として中国文化に定着している。

日本語には、「松が取れる」、「松の内」のような言葉があるが、これは正月に「門松」を飾る習慣と関わっている。松は「待つ」に通じ、神様の依り代と見なされている。また、日本語には、「白砂青松」という四字熟語があり、これは海辺の美しい景色を形容する言葉である。このような日本の美しい松原を伴う海岸の景観により、松からは、海が容易に連想される。

次の例を見てみよう。

（49） a. 八千種(やちくさ)の　花はうつろふ　常盤(ときは)なる　松(まつ)のさ枝(えだ)を　我れは結ばな

（大伴家持,巻 20-4501）

b. 岩代(いはしろ)の　浜松が枝(え)を　引き結び　ま幸(さき)くあらば　また帰り見む

（有間皇子(ありまのみこ) 巻 2-141）

c. 一つ松　幾代(いくよ)か経(へ)ぬる　吹く風(かぜ)の　音の清きは　年深みかも

（市原王(いちはらのおほきみ),巻 6-1042）

松を詠んだ歌は、『万葉集』に数多くある。（49）の a と b の「結ぶ」という行為については、「注連縄と同じ意味であり、植物に触れることは、その奥に秘めた生命力を摂取しようとしたもので、古代の文明に見られる『植物と人間との交換作用』をもととする『予祝儀礼』的なものであった」[56]という記述がある。松の枝を結ぶのは、松が霊力を持つ植物で

[55] 松や柏は、寒さを怖がらないの？そうだ、寒さに強いのだ。（筆者訳）

[56] 万葉植物から伝統文化を学ぶ(http://www.aichi-kyosai.or.jp/ (2018/03/08))

あると昔から信じられていたからである。また、(49) の c のように、「松風」を楽しむことも和歌には多く見られる。「その清音により神の影向など、様々なことを合わせもって感じとっていた」[57]の説もあり、松が風に吹かれた清らかな音という聴覚の経験から、神様が寄ってくることを連想し、松の神聖性が更に強く感じられる。このような松は神聖を喚起するのは、松の「常緑」が引き起こす「生命力」の連想と関係する。これは日本古来の「身の回りのあらゆるものに神様を感じている」思想ともつながっている。

程（2000）は、「梅蘭竹菊」、「歳寒三友」が「君子」のメタファーとして使われるのは、儒教、道教そして仏教思想の影響を受け、文人階層の個人の意志の高まりと関わっていると述べている。

> “岁寒三友”采撷儒教圣言为名，体现了儒家“君子比德”的自然审美意识，君子友贤辅德之道德修养观念的直接影响，同时也包含了中唐以来尤其是宋元之际士大夫阶层托意物色、与物为友，企求超拔流俗、雅意自适之审美理念和情趣意志。这两方面曾经属于不同的思想传统，两宋之际思想文化发展的基本特征就在于儒、释、道的深刻融合，落实在士大夫的精神层面，便是个人品格意识的高涨。　　（程 2000：37）

一方、中国語の「君子」の品格を表す「松竹梅」は、日本ではめでたいものとしてお祝いに使われ、品物など三階級に分けた際の等級の呼称とされている。一般的には、「松が一番で、竹、梅」の順である。特に松は、最上位を代表する

▸ 〈蓮〉

中国では、宋の時代から蓮の花も「君子」の象徴となっている。例えば、“出淤泥而不染”という言葉は、泥の中でも美しい花を咲かせる蓮のイメージで、劣悪な環境の中でも、悪い影響を受けることなく、心の清らかさや美しさを失わずに保つことの喩えとなっている。この点で、次の例が興味深い。

（50） 水陆草木之花，可爱者甚蕃。晋陶渊明独爱菊。自李唐来，世人甚爱牡丹。予独

[57] 万葉植物から伝統文化を学ぶ(http://www.aichi-kyosai.or.jp/　(2018/03/08))

爱莲之出淤泥而不染，濯清涟而不妖，中通外直，不蔓不枝，香远益清，亭亭净植，可远观而不可亵玩焉。

予谓菊，花之隐逸者也；牡丹，花之富贵者也；莲，花之君子者也。[58]

（宋•周敦颐《爱莲说》）

段(2016a)は、以下のように分析している。

蓮は、池や沼に生え、淀んだ水底で芽を出して成長し、茎を伸ばして葉を水面の上に開き、花も水面高くに咲かせるという特徴を持つ。蓮に関する「あっさり」、「まっすぐ」のイメージは、このような蓮の成長環境と蓮の形態の知識からきている。泥の「ネバネバ」、「ドロドロ」のイメージは、触覚の身体経験から得たものである。即ち、泥から「汚い」というイメージを得て、汚れた環境が連想される。その一方、蓮には、「まっすぐ」という具体的なイメージがあり、さらに高潔のイメージが喚起される。

また、色彩の「黒い」、「さっぱり」、「上品」などの視覚表現から、推論により、汚さ、清らかさ、清廉さなどが連想される。特に黒は、「汚れ」や「不純さ」を示唆する。したがって、黒を環境の悪さとして考える理由は、汚れの知覚にある。

なお、「泥」から「環境が悪い」、「政治が腐敗している」、「世間が汚い」などの「社会的汚れ」というマイナスイメージ、「蓮」から「清らかさ」、「清廉さ」、「純粋」、「心の美しさ」というプラスイメージが得られる。マイナス評価の泥を背景化し、蓮に対するプラスの評価が高まり、そこに喚起力が得られる。

われわれは、さまざまな経験に基づいて、ある対象に関して具体的なイメージを作りあげ、また、ある対象のイメージを他の対象に拡張していく。また、この拡張されたイメージを介し、より抽象的な対象を理解している。

中国では、蓮は“君子の花”と考えられ、中国文化に根を下ろしている。蓮と君子の関係は、図 4-10 に示される。

[58] 水の中や陸の上の花には、愛でるものが大変たくさんあります。晋の陶淵明は、ただ一人菊を愛しました。唐の王朝以来、世の中の人々は牡丹を愛でています。私はただ一人、蓮が、汚泥から咲き出でてもその泥には染まらず、清らかなさざ波に洗われてもなまめかしさはなく、（茎の）中は穴が通っていて外はまっすぐ（に伸び）、蔓がなく枝がなく、その香は遠くでますます清らかにただよい、まっすぐに清らかに立って、遠くから眺めることはできても手に取ってもてあそぶことはできない様子を愛すのです。 私は、菊は花の中では、隠居した者で、牡丹は花の中では、富貴な者で、蓮は花の中では君子だと思うのです。（『愛蓮説』現代語訳（口語訳）http://manapedia.jp 2019/03/01）

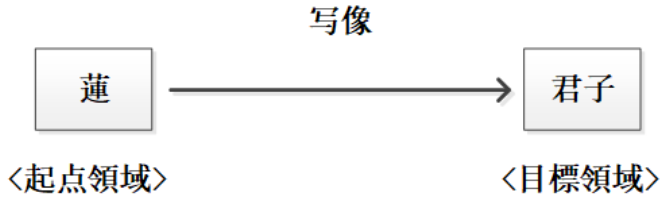


図 4-10

「蓮ハ花ノ君子タル者也」の場合、メタファー写像の起点領域の「蓮」と目標領域の“君子”の間に、類似性を見出すことができる。しかし、蓮と君子の間には、形状的な類似点は見出すことはできない。ここで言う類似性とは心理的な類似点を指す。プロトタイプとしての蓮の特徴は、次のように規定することができる。

＜蓮のプロトタイプ＞： [清らか、真っ直ぐに伸ばす、いい香り etc.]

この場合には、問題の存在や機能に関わる主観的な顕現特性が、このプロトタイプの決定に重要な役割を担っている。

蓮をはじめとする中国原産の植物は、日本文化に受け入れられたが、その附与された意味には、変容が見られる。例えば、竹と松は、神様の依り代として日本人の生活に浸透していている。また、梅と菊は、昔は上流階級の風雅な遊びであり、身分の象徴でもある。蓮は仏の蓮台で仏教との関係が密接であり、往生への連想も喚起し、日本文化の一部として定着している。

また、中国で、これらの植物で人間の品格を喩えるのは、儒教や道教思想の産物であり、当時の政治背景とも関わっている。これに対し、このような歴史的な背景がない日本では、これらの植物を「君子」の概念に適用することは困難である。また、日本独自の政治や歴史の影響で、「桜」は「武士」の精神であるという独特の意味が込められている。

以上の考察のうち、梅、蘭、竹、菊、松に関する中国語の「精神のメタファー」の写像の特徴を表 4-3 に示す。

表 4-3 中国語における精神のメタファー

起点領域	目標領域	写像
梅	君子	寒さに強い、清らかな香りは「根性がある」、「高潔」の品格
蘭		淡々とする香りは「高潔」、「純粋」の品格
竹		寒さに強い、まっすぐな姿は「根性がある」、「正直」の品格
菊		秋に花が咲く、まっすぐな姿は「争わない」、「淡泊」の品格
松		寒さに強い、まっすぐな姿、常緑は「根性がある」の品格
蓮		泥の中から綺麗な花が咲くのは「高潔」、「純粋」の品格

4.4.2 「植物は性格」のメタファー

植物で、人間の性格を喩えるメタファーは、日中両言語に多く見られる。メタファーは、類似性に基づく言葉の綾であるが、植物と人間の性格という概念の間に、どのような「類似性」が存在することが考える必要がある。「性格」は、主観的な概念であり無形なものであり、理解することが困難な概念である。従って、人間の身の回りの具体的な存在を通して、この種の概念を説明するのが一般的である。人間が馴染んでいる植物は、このような喩えの役割を担っている。

前述したように、中国語の“有种”は、度胸がある、一人前の男の意味であり、“花花公子”は浮気しやすい男性の喩えとして使われている。このような表現は、「性格」のメタファーである。また、(51) が描写するように、「種」は生命の始まりである。植物には、種から土を破って成長する「力」がある。従って、“有种”には、「長時間戦う耐力があり、目的を達成するため何でもできる」という「性格」を意味するようになった。逆に“没种”、“孬种”は、「弱虫」の意味で、人を侮辱する表現である。

(51) 世界上力气最大的是植物的种子。一颗种子可能发出来的‘力’，简直超越一切！……小草不是大力士，但它的力量是最大的，那就是小草的生命力。只要有生命，这种力就会存在。土壤和石块一点都不能阻挡它，因为这是一种长期抗战的力：有弹性，能屈能伸的力；有韧性，不达目的誓不罢休的力。 （《种子的力》）

また、「根」は、「耳の根」、「舌根」などのように、身体部位のメタファーとして使用さ

れる。「根」は、身体部位を喩える以外に、人間の基本的な感覚器官を指し、抽象的な精神領域を喩えることができる。例えば、(52) のように、仏教用語として使われる「根」は、人間の基本的な感覚器官の関係を修辞的に表現する。

(52) 凡夫只认现境，不了自心。依于六根，接于六尘，而生六识。所谓六根者，先言根义，次言其六。所言根者，能生之义。以能对境生识，故谓之根。言六根者：
一、眼：能见色者是。以能对色而生眼识，故谓眼根。
二、耳：能闻声者是。以能对声而生耳识，故谓耳根。
三、鼻：能嗅香者是。以能对香而生鼻识，故谓鼻根。
四、舌：能尝味者是。以能对味而生舌识，故谓舌根。
五、身：能感触者是。以能对触而生身识，故谓身根。
六、意：能知法者是。以能对法而生意识，故谓意根。
(《佛学次第统编》)

「根」は、人間の「眼」、「耳」、「鼻」、「舌」、「身」、「意」六つの器官、またこれに関する視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、理解能力のことを表す。以上の感覚は、「六根」と呼ばれる。仏教では、善悪を生み出す力のことを「根」、善悪の振る舞いを「性」と呼び、人間の本性や本質のことは「根性」と呼ぶ。

仏教用語以外に、中国語には直接「根」の語を使って、人間の性格や品質を表す表現がある。あまり多くないが、“劣根性”は、人間が長期にわたって形成した変わりにくい悪習慣のことで、極めてマイナスの意味をもつ。20 世紀の 80 年代に、中国の「文化大革命」が終焉した十年後、「動乱から目を覚める」時期に、中国文化の“劣根性”についての討論が盛んになった。例えば、(53) のように、柏 (2015) は、中国人の「団結しない」という「醜さ」を批判している。

(53) 中国人的不能团结，中国人的窝里斗，是中国人的劣根性。这不是中国人的品质不够好，而是中国的文化中，有滤过性的病毒，使我们到时候非显现出来不可，使我们的行为不能自我控制！明明知道这是窝里斗，还是要窝里斗。锅砸了大家都吃不成饭，天塌下来有个子高的可以顶。因为这种窝里斗的哲学，使我们中国人产生了一种很特殊的行为—死不认错。 (《丑陋的中国人》)

柏（2015）の批判は極端であると多くの評論家が指摘したが、ある程度当時の中国の現状を反映しているのは事実でもある。“根性” は「国民性」の意味で、“劣根性”は国民が有する悪い品質のことで、国や民族のイメージにも関わっていると言える。

一方、日本語には人間の品性を言及する際に、「根性（こんじょう）」、「根（ね）」のような表現が多い。『大辞林』は「根性」について、「生まれつきの性質。根本的な考え方」（1999：960）と定義している。日本語の「根性」は、仏教思想の影響を受けたことがあり、人間の本性と密接な関係がある。「いい根性をしている」は、動揺せず堅い精神を持つことを褒め、「根性が腐ってる」は性格が悪い人への批判である。ほかに、「根気がある」、「根気がない」、「根気よく」、「根気のいる仕事」などは耐える能力を意味し、「根比べ」は耐える能力の試合、「根負け」は耐えられないことを表意味する。

（54）のように、根は仏教との関係が密接であり、精神的な「力」を表し、特に動揺せずに耐える能力を意味する。

（54）　日本はよく島国根性といいますが、どんな根性ですか。

また、（55）の根、は人間の本性を表し、「心」という概念と融合し、性格や品性のメタファーとして使われる。

（55）　a. 結構根は真面目な頭のいい人が多いですよね。

b. 父のお妾さんである信子は、自分の母親にしたいほど心根の優しい控えめな女性であった。

c. 根っからの江戸っ子だ。　（『動植物ことば辞典』2006：172）

Lakoff & Johnson（1980）は、方向のメタファーとして、「楽しいは上、悲しいは下（Happy Is Up，Sad Is Down）」;「健康と生命は上，病気と死亡は下（Health And Life Are Up，Sickness And Death Are Down）;「良いは上，悪いは下（Good Is Up，Bad Is Down）」などの例を分析し、この上／下の方向性は、動機づけられていると主張している。方向のメタファーでは、「上」は、健康、多い、楽しい、よいなどプラス的な評価が多いが、「下」は、病気（死亡）、少ない、悲しい、悪いなどマイナス的な評価と関係している。

「根」に関するメタファー表現には、「しっかりで穏やかは下、頼れなく変わりやすいは

上」の方向性が関係している。「根」を用いる精神領域のメタファーは、「下」の方向性にプラス的な評価が与えるが、これは「根」にに関わる「安定」、「基礎」、「本質」などの身体経験に基づいているからである。ここでは、根が「下や周りに伸べれば伸びるほど成長によい」という方向づけの身体経験から、根に関する場合、「下」の方向性がプラスとして評価されることになる（図 4-11 を参照）。

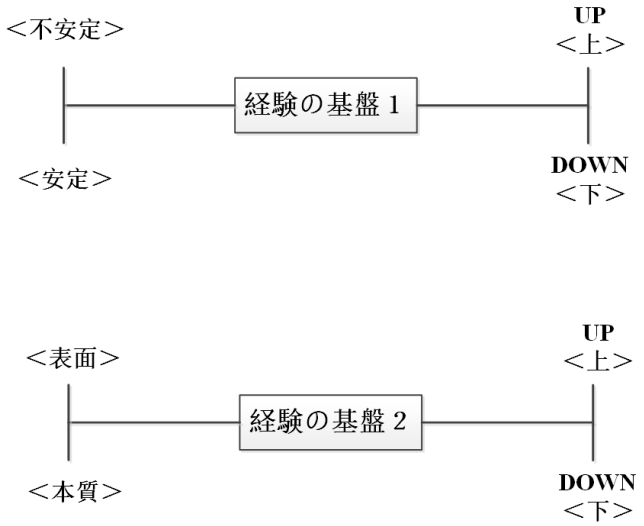


図 4-11

4.5 植物の社会構造への写像

4.5.1 身分と地位のメタファー

古代中国は農業社会であるので、農民階層の心理が中国の伝統文化の基層となっている。西周の時代から、家庭を単位として農業生産をする「家庭経済」が形成され、中国の農民階層は、農業生産を主とし手工品を副業とする生産に関わっている。農業生産は男性の仕事で、女性は家畜の飼育、織物の制作など軽作業に関係する。農業生産の技術、土地の継承は父子が行うので、男性は家庭の絶対的な地位を有していた。この面では、劉（1988）の以下の指摘が参考になる。

> 中国农业的生产模式和由此而产生的家庭结构，使中国农民很早就产生了孝悌思想，男尊女卑观念，依赖父母意识、多子多孙要求和家长制作风。　　（劉 1988：23）

この指摘から明らかなように、農業生活に努める農民は、“安土重迁”、“视土如命”、“热恋家园”のように、土地や故郷を大事にする。「郷土思想」は農民階層の心理的な特徴である。

周秦の時期から封建社会体系が設立され、1840 年の鴉片戦争まで長い間、農業生産を主とする中国では、「農民」と「地主」から成る社会構造が続いていた。地主階級は、官僚、文人とともに農業社会の統治階級であり、その中でも帝王は、統治階級の至高である。

思想を農民階層に影響を与えるのは統治階級の政治手段であり、農民階層の思想は、統治階級による思想教化の結果である。「孝」を中心とする宗法倫理思想は、統治階級の思想の核心であり、農民階層を統治する重要な「武器」として機能した。生産方式、社会構造、政治環境が一致するため、「地主階級」と「農民階級」の文化心理は合致するところがある。生産関係や政治地位の面で対立した地主と農民に、大きな相違点が存在するのは当然である。「専制思想」、「等級特権概念」は、統治階級特有の心理文化で、中国民族の心理文化に大きな影響を与えるている。

君主専制制度は、「君権」の強化と神聖化をさせるため、農民階層をコントロールするためには、官僚制度が必要である。農業社会で権力を有するのは経済利益、社会地位を獲得する有力な手段である。官職が高ければ高いほど権力を持つが、この等級思想が官僚階層の心理を特徴づけている。

また、文人は、官僚階層の特殊な一部であり、彼らの大多数は中小の地主出身であるため、統治階級の最低層にある。活動範囲は大地主、貴族より広いため、農民階層と接触することができ、鋭い洞察力を有することで政治において重要な役割を担う。文人は、文化、教育、思想に関わる主要な団体で、中国文化、特に高層部の文化を支えている。この点で、劉（1993）の指摘が参考になる。

> 中国古代文化人虽有依附权势政治的一面，又有抵制依附权势政治的一面，退尘俗而隐山林，蛰伏而遂心志，以求心理平衡。中国的隐士现象，是中国古代文化人的重要的心态表现，也是中国文化的一大特色。（劉 1993：160）

この指摘から明らかなように、政治抱負を実現するためには、官僚になることが、文人の主要な選択肢であった。「権力者への依存」は、文人の心理文化の特徴であるが、権力に屈せず、政治の暗い面と戦う文人も数多くいる。「隠逸」は、中国文人の重要な心理的特徴

の一つであり、中国文化の特徴でもある。

この種の等級思想は、植物に関する表現にも反映されている。「種」は、命の始まりや出身の意味に拡張していて、血統や身分の高低を表すようになった。「出身」を重視する古代中国では、皇帝や貴族の子孫は、「龍種」、「貴種」である一方、庶民は「賤種」と呼ばれた。（56）に示されるように、「雑種」は、もともと血縁の不純さを表す言葉で、人を侮辱する語として使用される。

（56） 这当儿，孩子小胖在炕上哇哇的哭，张金龙咬牙切齿的骂：“挑死这个小杂种！”

（《新儿女英雄传》）

秦の時代、中国史上初めての大規模な農民反抗戦争が勃発し、指揮者の陳勝と呉広は“王侯将相，宁有种乎”[59]のスローガンを叫んで秦の統治に反抗した。「種」は身分のメタファーで、封建階級の特徴を示す。また、「種」は人間を類別するための符号として、「人種」、「種族」の意味に拡張し、「差別」の意味とも関わっている。

統治階級と農民階級の差は、「草」に関する表現によっても喩えられる。小さい、柔らかい、目立たない、地面に近いという草の特徴に基づいて、地味で政治的弱い農民階層には「草」のイメージが付与される。身分が低い人間は、“草民”で、知識を持たない人間は“草莽”であり、彼らの命は“草芥”のように大切ではないものとされる。山に逃げて強盗となる人間は“草寇”と呼ばれた。階級社会の崩壊とともに、このようなことばは死語になりつつあるが、「草」は民間、民衆のイメージとして定着している。

現在の中国語の“草根”は、英語の grass roots から訳された言葉である。英語には、政府や権力者と対立する政治勢力の意味として使用されるが、中国では、“草根文化”、“草根交流”等の表現があり、大衆文化、市民文化という意味を表現する。

日本語の「根無草」、「浮草」は、安定しない人間のことを喩える。「雑草のような」ということばは、草の旺盛な生命力に焦点を当て、人間の成長の様態を表す。「草の根運動」は、英語からの政治に関することばで、使用頻度は極めて低いため、日本語の草は、中国語のような身分のメタファーとして使用することは殆どない。

植物を用いて身分を表すだけではなく、植物に「身分」を与えて、ランクをつける用法

[59] 王侯将相寧んぞ種有あらんや、王と諸侯・将軍・大臣となるのは血すじによらず、誰でも実力次第でなれるの意味である。（https://kanbun.info/ （2019/03/01）

は、中国語にみられる。「花王」、「花相」、「花魁」、「花の皇后」など、身分を表す名称は花の別称となり、等級社会の審美観を反映する。

中国では、牡丹は「十大名花」の一つである。唐代には、皇室や貴族の間に牡丹を観賞することが流行っていた。中国語では、牡丹は「花王」と呼ばれ、「唯有牡丹真国色」[60]の詩句が表すように、「国色」である牡丹は中国文化では高い地位を示す。牡丹が「花王」であるのは、大輪で、鮮やかで、豪華なイメージのためである。また、芍薬は、牡丹と似ているので、「花相」と呼ばれる。一般に、皇室や貴族の身分を表す植物は、当時の園芸技術、皇帝の好みなどと関わるが、「大きいは良い、小さいは悪い」という文化心理を反映している。

以上のように、中国人に馴染んでいる植物は、等級社会の特徴を修辞的に表現する。至高の皇族や貴族は、大輪の植物を用いて地位の高さを示し、官僚や文人は、菊、梅、蘭など植物を通して「君子」の精神を表現する。桃、杏などの植物は、「色っぽい」、「小さい」などのイメージで、「君子」と反対の「小人」や遊女のような身分が低い女性の象徴にもなる。このような植物の関係は、図 4-12 に示される。

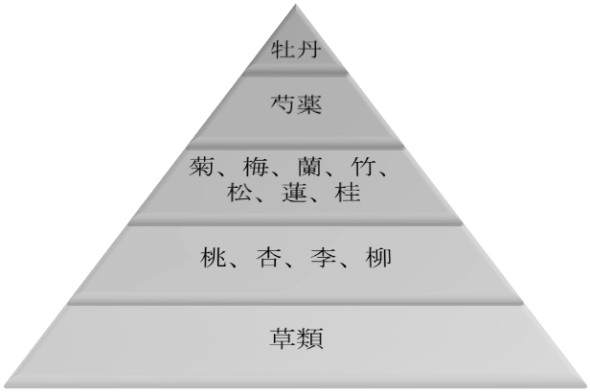


図 4-12

古代日本と中国の交流は、平安時代がその境目と考えられる。日本は、平安時代の前半まで、中国の先進的な技術と文化を学ぶために遣隋使、遣唐使を派遣した。これにより、牡丹、梅、菊など植物が日本に伝来するとともに、当時の梅、菊を推奨する風潮も日本貴族の間に広がった。これらの「中国風」の植物は貴族に愛され、家紋や服装の文様として

[60] 唯有牡丹真国色：牡丹は「国の色」を代表できる唯一の花である。（唐•刘禹锡《赏牡丹》）

身分を表すようになった。菊、梅、葵、桐、桔梗、藤などは薬用価値を有し、魔除け効果がある植物は、貴族の家紋と見なされた。平安時代以降、日本と中国との交流は一時的に中断し、日本では武士階層が注目され、「武士」の文化が、日本人の文化心理に大きな影響を与えるようになった。「武士」の精神を象徴する桜は、日本の象徴でもある。

4.5.2 勢力のメタファー

植物には、成長していく方向性が認められる。植物の「方向のメタファー」は、人間の身体部位や精神領域だけではなく、抽象的な社会関係の叙述にも使われる。例えば、(57) の a のように、中国語には、悪勢力や影響力の大きさを表す場合に“树大根深”、“根深蒂固”のような成語が多く使われる。また、“根浅门微”は、出身の低さを表すことばである。

(57) a. 但是此时，王冰在贵州省的公安系统中已经是树大根深，就连商云义也不敢得罪这位被前任书记看好的公安厅长。 (《汉风》)

b. しかして異郷にこそ根を下ろすべし！

また、(57) の b のように、日本語には、「根を下ろす」、「根を張る」などにより、人間の勢力や物事の発展を叙述する表現も存在する。ここ場合の「下ろす」、「張る」は、根が下や周辺に拡張する方向を示す表現である。さらに、根の方向性の認識に基づいて、複雑な人間社会の勢力、影響などの抽象概念も比喩的に表現される。また、根は地下に伸びて、植物を固定することができるので、容易に動揺しない。根は容易に動揺しないからこそ、「勢力」を除くという意味で、“斩草除根”、「根を切る」、「根こそぎ」のような表現が使われる。

植物を移植する時はまず根の周辺から工作を行う。根の一部を切断して植物体の成長を促せるので、「根回し」は、会議、交渉がうまく進むよう事前に先方と連絡をとることを喩える。この用法は、(58) に見られる。

(58) 災害はいつ、どこに発生をするかわかりませんので、特に委員各位の大蔵当局に対する根回し等御協力を心からお願いをいたしまして、お答えにいたします。

中国語の場合、根に関する勢力の表現はマイナス的な意味が多い。これは根が暗い地下で伸び（「下は良くない」）というイメージと関係があると考えられる。良い影響力の場合は、“百花齐放”、“枝繁叶茂”などの表現を用いることが可能である。従って、良い物事の発展は、上の方向性と関係が密接で、悪い物事の発展は、下の方向性と関係する傾向があると言える。

4.6 まとめ

本章では、認知言語学の観点から、日中両言語における植物表現には、どのような修辞表現が存在し、両言語にどのような共通点と相違点があるかを考察した。特に本章では、「人間は植物」というメタファーに関わる日中両言語の修辞的な言語現象の諸相を体系的に分析した。本章の考察から、「女性は植物」、「男性は植物」、「恋は植物」、「美徳は植物」、「性格は植物」、「地位は植物」「勢力は植物」などの多様な植物に関するメタファー表現が存在することが明らかになった。また、以上の考察から、日常言語のメタファーの生成には、その修辞的な基盤として、外部世界に対するわれわれの知覚経験や社会文化的なイメージ、心理的なイメージが重要な役割を担う事実が明らかになった。メタファーの能力は、日常言語の創造的な意味の世界を特徴づける重要な認知能力の一種である。本章の植物のメタファーの考察は、人間の認知能力の解明のための基礎研究として、重要な役割をになう。

第 5 章　植物の詩的表現と認知プロセスの諸相

前章の考察では、認知言語学的な視点から、植物に関する語彙と慣用表現の概念体系を特徴づける意味拡張のメカニズムを、特に、メタファー、メトニミー、シネクドキ等の認知プロセスに基づいて考察した。特に前章では、「人間は植物」のメタファーに基づく意味拡張の諸相を考察した。この考察から、植物のメタファーの基本機能は、人間の身体領域、感情領域、精神領域、社会領域などの経験領域への写像の機能にある点が明らかになった。しかし、前章までの考察は、人間の日常生活や精神生活の諸側面を修辞的に表現する植物のメタファーの分析が中心になっており、文学作品における詩的言語（特に、外部世界の描写に関わる詩的言語）を特徴づける植物のメタファー表現の問題は等閑視されている。

植物の表現は、詩歌、俳句、小説などの文学作品によく用いられ、自然描写、情景描写、感情描写においても重要な役割を担っている。また、芸術の世界の叙述においても植物のメタファーは重要な役割を担い、絵画、デザイン等の芸術作品の重要なモチーフとして使われている。しかし、これまでの言語学と関連分野の研究では、植物のメタファーに関わる詩的表現についての考察は本格的にはなされていない。本章では、認知言語学の視点から、この種のメタファーに関わる詩的表現を分析していく。また、この認知的分析を通して、言葉の意味の創造性と認知能力の一面を明らかにしていく。

5.1 自然描写と認知プロセス

5.1.1 自然描写と言葉の身体性

一年の中には「春夏秋冬」という季節の変化があり、この季節の変化の意識は、日中両国の文化にも深く浸透している。このような変化に関わる心のプロセスは、植物の言語表現にも反映されている。

中国では、古くから「花暦」で一年の変化を区分し、12 ヵ月それぞれに花の名で表す。花ごよみ、二十四節気、七十二季風のような自然変化を区分する表記法は中国から日本に

も伝わり、日本でも使われている。また、日本における俳句の「季語」の使い方の中に、日本文化の独自性が見られる。季語とは、「季節感が感じられる言葉」のことで、ここに日本人の自然に対する心の諸相が反映されている。(1) の例は、日本の四季の代表的な植物である。

(1) **植物に関する季節のことば**

a.〈春〉: 梅　蕗の薹　木の芽　土筆　椿　菜の花　菫

b.〈夏〉: 葉桜　筍　牡丹　紫陽花　百日紅　夏草　木下闇

c.〈秋〉: 桐一葉　鶏頭　竹の春　秋の七草　芒　紅葉　柿

d.〈冬〉: 帰り花　山茶花　水仙　寒椿　蠟梅　落葉　冬木立

e.〈新年〉: 福寿草　楪

日本にも地域差があるため、これらの植物についての季節感には、地域によって相違が存在する。しかし、日本では、一般に季節の植物と言えば、春は桜、夏はアジサイ、秋はもみじ、冬は椿というように連想するのが極めて自然である。従って、具体的な季節に関する認識は、植物を通して可能になる。

例えば、人々が「春が来た」と感じるのは、自然界の植物に関わる感覚や周りの環境が起こす細やかな変化の理解によって可能になる。地面から出てくる緑色の春草は「若草」と呼ばれ、春の季語となっている。春になると、日の時間が長くなり、気温が上がる。人間は、このような感覚経験に基づいて、「春が来た」ことを察することができる。一方、人々が「秋が来た」と感じるのは、葉が落ちたり、葉の色が変わったり、農作物が実ったり、気温が下がったりという身体感覚により、その訪れを感じることができる。

また、自然界における季節の変化の中で、植物が、緑色から黄色へ変化し、食卓に「旬の味」を代表する食材が登場し、衣替えをする、というような身体感覚の変化に応じて、季節の移り変わりを理解することができる。

本節では、季節の変化の諸相を叙述する植物表現の認知的分析を通して、言葉の意味の創造性と日常言語の創造的な使用を可能とする、人間の認知能力の一面を明らかにしていく。

自然界における季節の変化は微妙であり、この変化の諸相を直接的に理解して行くことは非常に困難である。したがって、われわれが季節の変化を理解していく際には、自然界

の具体的な変化の一面（例えば、植物の具体的な変化の一面）を手がかりにして、この手がかりを通して、季節の変化を間接的に理解していく。これを言葉による自然理解の視点から見るならば、われわれは自然（ないしは、その一部としての植物）の変化を参照点（reference-point）として認知し、この参照点を手がかりにして、理解のターゲット（target）としての季節の変化を間接的に理解して行く。

山梨（2000）は、この参照点とターゲットの認知プロセスの関係を、次のように述べている。

> われわれが何かをターゲットとして探索する場合、常に探しているターゲットとしての対象が直接的に把握できる保証はない。実際には、そのターゲットに到達するための参照点を認知し、この参照点を経由して、問題のターゲットとしての対象を認知していくのが普通の探索のプロセスである。（山梨 2000：86）

ここでは、この種の認知プロセスに基づいて、日常言語の植物表現の修辞的な側面を考察していく。以下では、まず季節の秋を例として、言語主体が植物の変化に関する知覚経験や身体経験に基づき、秋をどのように修辞的に表現しいくかを考察していく。

日本人は季節に敏感な国であり、季節を表現する季語が豊かである。秋の植物と言えば、もみじが秋の典型的な植物である。文学の世界（特に、和歌や俳句の世界）には、「もみじ」、「もみじ酒」、「紅葉狩り」、「紅葉山」などが秋の季語として使われている。もみじは、語源的には、動詞の「もみづ」に関係する言葉だという。「もみづ」は葉が赤く（あるいは黄色に）なることから、紅（黄色）の葉を有する木を広く指している。もみじの漢字は、一般に「紅葉」であるが、「黄葉」と書く場合もみられる。その語源や漢字から分かるように、もみじは、葉の色の変化に焦点が当てられていることが多い。次の例を見てみよう。

> 秋に紅葉する木々を総称する。上代では萩が多く、後代では楓（カエデ）の紅葉が多く詠まれた。…一般に「紅葉」は秋を、「紅葉が散る」、「散って地上に敷きつめられた紅葉」を詠んだものは冬を表すとされる。
>
> （『短歌俳句植物表現辞典』：475-476）

（2）a. 我が衣　色取り染めむ　味酒　三室の山は　黄葉しにけり

（柿本朝臣人麻呂, 巻 7－1094）

b. おくやまに紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき

（『古今和歌集』）

（2）の a と b のような表現から、もみじは、秋の典型的な植物で、もみじからは自然に秋が連想される。ここでのもみじから秋への連想プロセスは、上述の参照点とターゲットの認知プロセスの関係によって解釈することが可能である。この参照点からターゲットへの認知プロセスは、図 5-1 のように規定される。（この図の R は参照点、T はターゲットを示す。）

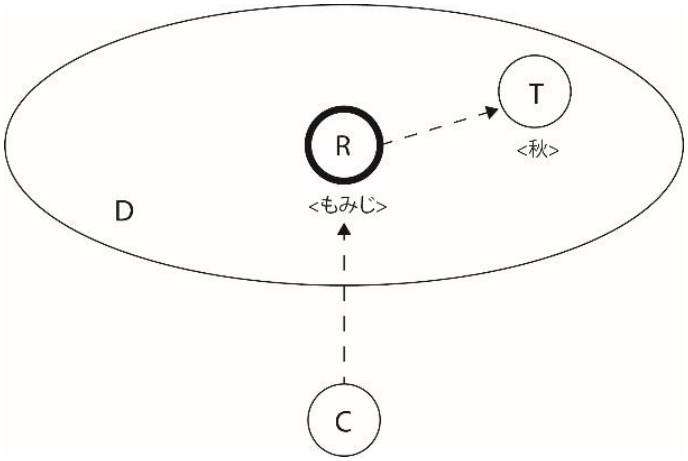


図 5-1

この参照点からターゲットへの認知プロセスは、メトニミーに関わる認知プロセスとして解釈することができる。山梨（2015）は、メトニミーの基本的な機能を、次のように規定している。

> メトニミーは、ある対象の意味を、それに関係する他の対象の表現を介して伝達する修辞的表現の一種である。メトニミーの基本的な機能は、意味する対象と、この対象の意味を伝えるための手がかりとして表現される対象との関係にある。この種の関係は、空間的な隣接性･近接性、共存性、時間的な前後関係、事象の因果関係などによって特徴づけられる。（山梨 2015：17-18）

空間／時間の近接関係によるメトニミーは、広い意味での参照点モデルに基づく認知プロセスと考えられる。秋の植物のプロトタイプである「もみじ」が「秋」を表す場合は、参照点モデルに基づく連想プロセスを介して、秋をメトニミー的に暗示する。

もみじ以外の秋の植物に関しては、「秋の七草」が挙げられる。(3) の例のように、萩、桔梗、葛、藤袴、女郎花、尾花、撫子は、日本の秋の典型的な七種の植物であり、これらの植物は参照点として、ターゲット〈すなわち、秋〉への連想が喚起する。

(3) a. 秋の野に　咲きたる花を　指折(および)り　かき数(かぞ)ふれば　七種(ななくさ)の花

（山上臣憶良, 巻 8－1537）

b. 萩の花　尾花葛花(をばなくずはな)　なでしこの花　をみなへし　また藤袴(ふぢはかま)　朝貌の花

（山上臣憶良,巻 8－1538）

このような連想が可能であるのは、日本の文化的背景による。日本本島を中心として、10 月の下旬から、もみじを見に行く習慣で広がり、秋になると「紅葉狩り」などの行事が催される。また、萩、桔梗などの花も、日本の秋の風景を彩る植物である。このような植物と季節の間の連想は、日本文化の一面を特徴づけている。

山梨（2015）は、以下に示されるように、日本の演歌を例として、文化的な知識に基づく連想プロセスを考察している。このような背景的な知識がなければ、日本の演歌に詠われる情緒的世界を理解することは困難である。

〈場所〉: →{北国，北の果て，雪国，港，波止場，…}

〈季節、気候〉: →{冬，雪，雨，氷雨，…}

〈行為〉: →{旅，一人旅，別れ，浮気，…}

〈その他〉: →{酒，タバコ，涙，未練，…}

（山梨 2015：28）

和歌や俳句における季語も同様に、季節や植物に関する文化的な知識がなければ、同じ季節感を喚起することが不可能であろう（図 5-2、参照）。

〈秋の知識フレーム〉　〈もみじの知識フレーム〉

もみじ、柿 栗ご飯、ミカン …	紅葉、カエデ、 イチョウ、秋…

図 5-2

「もみじ」から「秋」への認知プロセスは、葉の色の変化による視覚経験に基づく。この視覚経験は、山梨（2015）の以下の焦点スコープの操作に関わる認知プロセスに関係する。

> われわれの目は、カメラのレンズのように、文字通り焦点距離を変えて操作することはできない。しかし対象を知覚していく際、その対象の全体から細部に認知のスコープを絞り込んだり、細部から全体にスコープを拡大して知覚していくことは可能である。（山梨 2015：124-125）

図 5-3 が示すように、「もみじ」は葉の色の変化に焦点を当て、緑から赤や黄色に変わることから、植物全体、周りの物理的な環境、さらに自然の世界にシフトし、ズームアウトの認知プロセスを介して季節の秋を認識していくことが可能となる。

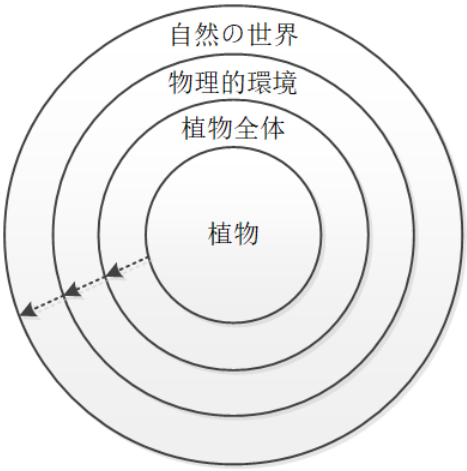


図 5-３

5.1.2 自然描写と感情移入

自然界を描写する際に、言語主体は、対象そのものが感情や身体を持った生き物と見なし、擬人的な描写をすることができる。ここでの感情移入は、前章で考察した「人間は植物」のメタファーと逆に、「植物は人間」という擬人化の認識に基づいている。このような認識のモードは、中国語、日本語に限らず普遍性があると考えられる。山梨（2015）は、このような擬人的な表現が可能なのは、われわれの相貌的知覚に起因すると述べている。

> 相貌的な知覚は、われわれと世界との身体的な共鳴（ないしは身体的な交感）の作用に根ざす主観的で創造的な認知プロセスの一種である。この種の知覚のプロセスは、言語的なコミュニケーション以前の原初的な身体レベルにおける主観的で創造的な認知プロセスである。（山梨 2015 : 161）

擬人的な表現は、(4) の a、b の「しがみつく」、「避ける」のような人間の動作を表す表現だけでなく、c、d の「堂々と」、「元気」のように、人間の喜怒哀楽を描写する表現としても使われる。

(4) a. 小さな苔たちが岩にしがみついている。
b. 一輪の花が人目を避けるように咲いている。
c. カボチャの花は堂々としている。
d. ぺんぺん草が花をつけて健気に咲いている。

（山梨 2015 : 163-164）

このような表現は、日常言語だけではなく、文学世界の描写や叙述にも使われる。例えば、中国文学の詩と詞、日本文学の俳句、和歌などにも多く使われる。

山梨（2015）は、認知的視点から、俳句のような暗示的、省略的な表現の技巧を分析し、そこに反映される感情世界に関わる認知的プロセスを、以下のように分析している。

表 5-1 （山梨 2015 : 180）

（A is like）B!
A：作者の心情の世界
B：句の表現レベルの世界

表 1 では、俳句における作者の感情世界を A、句の表現レベルの世界を B とし、作者が念頭におく感情世界（A）とそれを喩える言語表現（B）の相互関係が規定されている。

また、山梨（2015）は、このような俳句を代表とする文学現象の解釈のメカニズムを、図 5-4 の参照点起動の推論モデルに基づいて規定している。

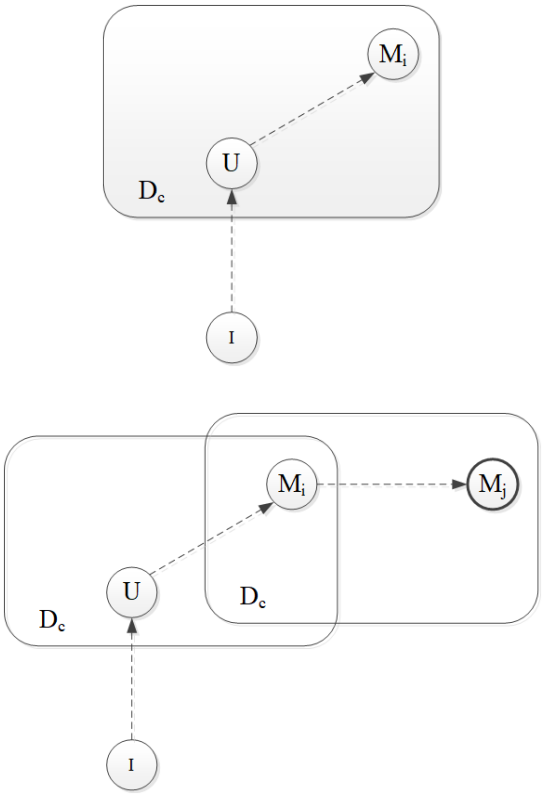


図 5-4

図 5-4 の I は解釈者、U は参照点としての発話、Mi は解釈のターゲット、Dc でマークされた四角の領域は、所定の文脈において問題の発話が潜在的に規定する解釈のターゲットの候補のドメイン、破線の矢印は解釈主体の認知プロセスを示す。この場合、参照点の M_i は文字通りの意味で、ターゲットの M_j は作者の感情世界を示す。

山梨（2015）は、「冬蜂の死にどころなく歩きけり」という俳句を、図 5-4 の参照点起動の推論モデルに基づいて分析している。この分析では、この俳句の文字通りの意味と作者の感情世界を以下の表 5-2、表 5-3 のように認定し、問題の俳句の表現から作者の心情の世界を探る認知プロセスを規定している。

表 5-2

（A is like）B！
B（=M_i）句の表現レベルの世界
A（=M_j）作者の心情の世界

表 5-3

U：冬蜂の死にどころなく歩ききり
M_i（=B）：この句の文字通りの意味
M_j（=A）：［心象風景］
（=老いを迎え死に近づきつつある作者の心境）

伝統的な修辞学の分野では、比喩は直喩と隠喩を大きく二種類を分けている。しかし、以上の俳句の解釈の認知プロセスは、この種の比喩によっては規定できない。このタイプの俳句における作者の感情を捉えるためには、直喩、隠喩とは異なる比喩による規定が必要になる。

山梨はこの点を考慮し、新たな第 3 の比喩として、表 5-4 の（iii）に示される「推喩」を提案している。（この場合の「推喩」は、「推論的な比喩」の略である。）

表 5-4 山梨（2015：181）

〈三つのタイプの比喩〉
（i）直喩：［A is like B！］
（ii）隠喩：［A is B！］
（iii）推喩：［（A is like）B！］

以上の俳句の解釈に関わる推喩は、中国の詩歌や日本の和歌における植物表現の修辞性の分析にも適用することができる。文学的な言語の場合には、植物の表現にも、作者の感情が込められることがある。

ここでは、中国語の秋に関する詩歌を例として、中国の古典詩歌の「悲秋」に反映される詩人の感情世界を探ってみる。次の例を見てみよう。

（5）一叶落而知天下秋/叶落知秋/一叶知秋[61]

一般に、葉が落ちる様子から、秋の訪れが連想されるのは自然であり、細やかな変化から物事の変化を推測する場合の喩えとして使われることも多い。(5）の例の葉は、（日本語の秋に連想されるカエデやイチョウの葉ではなく）青桐の葉を指す。日本語にも「桐一葉/桐一葉落ちて天下の秋を知る」などの表現があるが、これは中国語の“叶落知秋”に由来するようである。次の例にも見られるように、桐の葉が落ちるのは秋の訪れを表す表現として自然である。

（6）此木能知岁时，清明后桐始华。桐不华，岁必大寒。立秋地，至期一叶先坠。[3]

（《花镜》）

前述した山梨の＜参照点起動の推論モデル＞に基づいて、この種の詩的表現の解釈の一面を規定することが可能である。

葉が落ちる（特に桐の葉）という事態は参照点になり、この参照点を経由して、秋が来たという事態をターゲットの意味（すなわち、意図された意味）として解釈することができる。このような解釈が可能なのは、桐の葉が、秋への連想が引き起こすことが可能だからである。

また、落葉と秋の詩的関係は、次のような文学表現表現にも反映されている。

（7）a. 无言独上西楼，月如钩，寂寞梧桐深院锁清秋。　（五代•李煜《相见欢》）

b. 睡起秋色无觅处，满阶梧桐月明中。　（宋•刘翰《立秋》）

c. 梧桐叶上三更雨，叶叶声声是别离。　（宋•周紫芝《鹧鸪天》）

d. 梧桐更兼细雨，到黄昏，点点滴滴。　（宋•李清照《声声慢》）

中国の秋を描写する詩歌には、桐に関するのが少なくない。(7）の例が示すように、桐と月、夜、雨の取り合わせは、秋に関する文化的知識を喚起する。そして、このような秋と桐の描写は、寂しさや悲しさなど人間の感情にも繋がっている。(7）の d 場合には、次

[61] 出典：见一叶落而知岁之将暮。（《淮南子・说山训》）

のような解釈がなされる。すなわち、「庭のあおぎりの木、それは秋になって葉を散らしているうえ、さらに小雨が降り始めて、暮れ方となった今、しとしとと音をたてている」という文字通りの意味から、「あおぎりの葉に降る雨の音というのは、唐代から“悲しみを誘う”と言われる」（宇野･江原 2012：36）。以上の点から、この詩句における詩人の感情世界は、以下のように分析することができる。

表 5–5

U：梧桐更兼细雨，到黄昏，点点滴滴
M_i（=B）：この句の文字通りの意味
M_j（=A）：［心象風景］
（=桐は雨に濡らして、夕方が近く時、作者の寂しさの心境）

この例から分かるように、中国の古典詩歌には、桐の葉から秋、寂しさ、悲しさなどの感情が込められている。このような感情が込められるのは、桐の葉と秋の文化的な知識が喚起されるからである。しかし、さらに落葉に関わる「下への方向性」の認識も関係している。一般に、下記に示されるように、「下への方向はよくない」というイメージが存在するが、落葉はこの否定的な感傷を喚起する。

HAPPY IS UP ; SAD IS DOWN

〈楽しきは上、悲しきは下＞

（Lakoff and Johnson 1980/1986： 19 （渡辺ほか、訳））

以上秋の代表的な植物の表現を中心として、植物と季節の関係を考察した。人間は抽象的ものを認知する時、身近なものを通して理解するのが極めて自然である。また、抽象的な季節を理解する際､季節と密接な関係にある植物の変化を表現していく｡本節のように、季節の秋を例として、それに関する「もみじ」や「落ち葉」の表現を分析することにより、言葉に関わる参照点の推論やメトニミーによる連想、焦点シフトなどの認知プロセスが明らかになる。植物と季節の関係に基づき、植物がどのように日常生活に影響を与えるかに関しては、次節で考察していく。

5.1.3 五感の身体性と共感覚の修辞性

われわれの日常生活の商品の宣伝には、季節に関係する宣伝が多い。例えば、秋の商品のパッケージには、植物をモチーフした宣伝が多く見られる。(8) は、2016 年 9 月 13 日に発売されたキリンビールの「一番搾り」に関する記事である。缶のデザインにイチョウの葉を入れ、「秋日和」のイメージを喚起することで、生活の季節感を暗示している。

(8)　缶いっぱいにイチョウの葉！季節の移ろいを楽しむデザイン缶
一番搾りから秋を感じるデザイン缶が登場します。缶いっぱいにイチョウの葉が舞い、一番搾りらしい“和”のイメージを生かしながら、ゆったりした時間の流れを感じさせるデザインで家飲みを盛り上げます。　（ビール女子記事：2016/08/09）[62]

このような季節感を喚起する戦略は、われわれの身体感覚や五感に基づく比喩表現にも関係している。この種の比喩表現は、触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚などの基本的な五感に関わっているが、この種の表現としては、特に「共感覚」に基づく表現が注目される。

このような共感覚の比喩表現の具体例として、山梨（1998）は、以下のような具体例を挙げている。

表 5-6 （山梨 1988：117）

共感覚→原感覚	具体例
(i) a.触覚→味覚	やわらかな味、なめらかな味
b.触覚→嗅覚	さすような香り、つくような臭い
c.触覚→視覚	あたたかな色、つめたい色
d.触覚→聴覚	なめらかな音、あらい音
(ii) a.味覚→嗅覚	あまい香り、あまずっぱい臭い
b.味覚→視覚	(%) あまい色調、(%) あまい柄
c.味覚→聴覚	あまったるい音色、甘い声
(iii) a.嗅覚→視覚	(%) かぐわしい色調/色彩
b.嗅覚→聴覚	(%) かぐわしい色調/音色
(iv) 視覚→聴覚	あかるい声、くらい音色

[62] https://beergirl.net(2016/08/09)

この種の共感覚の比喩表現の修飾関係には、図 5-5 に見られるように、触覚から他の感覚への方向性が認められる。

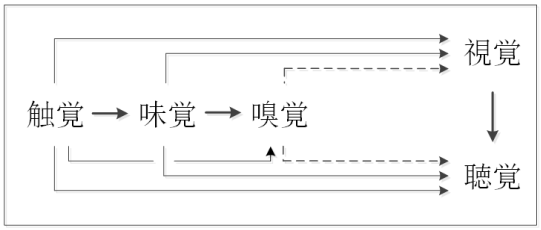


図 5-5 （山梨 1988：60）

一見したところ、逆に他の感覚から触覚に向かっての比喩の修飾関係も論理的には考えられるが、共感覚の比喩表現としては認められない。その原因は、五感の発達過程は、基本的には触覚から高次の視覚、聴覚、等に発達していくため、感覚の修飾の方向には、以上のような修飾の一方向性が存在することになる。

このような共感覚の経験は、食品や飲料水の宣伝の表現を創造する際の経験的な基盤になっている。次の例を見てみよう。

(9) 最高級茶葉「銀毫（ぎんごう）」を 25%使用したジャスミン茶です。低温で長時間かけてお茶を抽出し、苦味や渋味を抑え、香り華やかで上品な味わいに仕上げました。

（セブンイレブン　ジャスミン茶　2019/01/31）[63]

(9) は、日本のセブンイレブンで販売されているジャスミン茶の商品説明である。ここでは、ジャスミン茶の味は「香り華やかで上品な味わい」であると宣伝している。この「香り華やか」という表現は、視覚の「華やか」を用いてお茶の香りを修飾している。したがって、ここには視覚から嗅覚への修飾関係が認められる。またこの場合の「上品」という表現は、服装や振る舞いに関する視覚経験に基づく感覚で、ここでは、お茶の味覚の修飾として使われている。

一見、このような感覚の拡張は、五感の拡張の方向性と合致しないと見える。しかし、このような特殊例が成り立つ原因を考え場合、この感覚拡張には、原材料とする「ジャス

[63] セブンイレブン　ジャスミン茶（http://www.sej.co.jp/　(2019/01/31)）

ミン」に対するイメージが関わっている。換言するならば、この場合には、ジャスミンの「華やか」、「良い香り」という視覚や嗅覚の経験に基づいて、「ジャスミン茶」の味が共感覚的に表現されている。

次の例は、どうか。

(10) リプトン紙パックシリーズは、さまざまな気分、シーンに合わせて選べる、多彩なフレーバーラインアップが人気のチルドティーシリーズです。レモンティー、ミルクティーなどの基本フレーバーに加え、季節にあわせたフレーバーを展開しております。
「リプトン さくらミルクティー」は、 世界の茶の専門家・リプトンが厳選した香り高い紅茶に、コクのあるミルクとさくらの優しい香りが楽しめるミルクティーです。
春の訪れを感じる期間限定商品「リプトン さくらミルクティー」をお召し上がりいただき、安らぎの時間をお過ごしてください。

これは森永乳業の宣伝である。この会社は、「さくらミルクティー」を 2019 年の春に発売する予定である[64]。この新商品の説明では、ミルクティーの「さくらの優しい香り」が強調されている。「優しい」は、人間の性格に関わる表現であり、「優しい」という感覚の形成に関しては、主に話す時声の大きさ、丁寧さ、また顔の表情等が関係する。この場合の「優しい香り」の表現は、聴覚や視覚から嗅覚への拡張と考えられる。このような拡張が認められる条件の一つは、「さくら」に対するイメージが関与することである。一般的に「さくら」は、薄ピンク色、白色が特徴で、視覚的には、赤色、黄色等の鮮やかな花より色が薄くて、清らかなイメージが好まれる。このような視覚の感覚が桜の薄い香りに拡張し、「優しい香り」という表現が可能となる。以上のような植物に対する認識は、人間の五感と身体性に基づいており、この種の感覚が、日常言語の植物に関する修辞的な表現を豊かにしている。

[64] 「リプトン　さくらミルクティー」 2 月 19 日（火）より期間限定新発
(http://www.morinagamilk.co.jp/ (2019/01/31))

5.2 レトリックと認知プロセス

5.2.1 花言葉のレトリック性

長い歴史の中で、花は人間に影響を与え続け、今日でも日常生活を彩るかけがえのない存在である。人間の文化は、様々な面において花の文化によって特徴づけられている。言葉は文化を反映するものであり、花の文化との触れ合いは、われわれの言葉の世界に深く浸透している。「花言葉」とは、「象徴的な意味を持たせるため植物に与えられる言葉」のことであり、様々な植物に特別な意味を与えている。例えば、ヨーロッパ文化に見られる「深紅のバラは恋人に対する愛」、「カーネーションは母親に対する愛」などの表現は、非常にポピュラーな花言葉である。

二宮（2015）は、目的別に花言葉を以下のように分類している。

表 5-7

花言葉の目的	数	例
a.愛情を伝えたい	44	バラ（赤）：愛、あなたを愛します、熱烈な恋
b.感謝の思いを伝えたい	13	カーネーション（赤）：愛、感動
c.友情を示したい	13	アオモジ：友人が多い
d.尊敬･信頼している気持ちを伝えたい	7	ヤマブキ：崇高
e.がんばっている人を応援したい	24	ナデシコ：器用、才能
f.許しを請いたい	2	チューリップ：許してください
g.幸せを願いたい	15	ハボタン：祝福
h.別れに際して送りたい	6	ホトトギス：永遠
i.美しさや魅力を讃えたい	26	フジ：やさしさ
j.思いでを大切にしたい	10	ツユクサ：懐かしい思い出
k.元気づけたい	17	ユーカリ：新生、再生
l.成功、繁栄を願いたい	8	センリョウ：富貴、富

花言葉の修辞性は、花に関する一般的なメタファー表現より複雑である。花言葉には、花に対する視覚、嗅覚、触覚等の経験に基づく修辞的な要因が関係するだけでなく、宗教、神話、伝説、信仰、歴史等の文化的な要因も関係している。また、花言葉には、社会にお

ける人間関係の構築、社会秩序の維持等に関わる言語外的な要因も関係している。

人間が植物を用いて、より円滑に気持ちを伝えたり、親しさや関心を示したり、祝福を伝えたりする場合、花言葉は重要な役割を担っている。この点で、一般的花言葉による感情的な伝達と社交的な伝達機能が特に注目される。以下では、これらの点を踏まえ、花言葉の意味の創造性を特徴づけるレトリックと認知プロセスの問題を考察していく。

5.2.2 連想プロセスと主観性

五感の認知モード、は人間の精神、情感、思考等の描写に反映されている。
この種の認知モードの中でも、視覚（特に、色彩に関わる視覚）の認知モードは、人間の心理的な世界の描写に使われる。次の例を見てみよう。

（11）a. その男は恐怖で青くなった。
b. 少年はその知らせを聞いて青ざめた。
c. 彼女の顔が赤くなった。
d. 男は真っ赤になって怒った。
e. 彼は青筋を立てて怒った。

（山梨 2012：71―72）

これらの例では、色彩表現により、人間の心理的、精神的な状態が叙述されている。例えば、〈赤〉は恥、〈青〉は怒りの感情表現である。このような色彩の比喩表現は、恥辱を感じる時に顔が赤くなったり、怒る時は血管が浮き出る、という身体的経験に関係している。換言すれば、色彩による心理的な世界の描写は、人間の身体的経験に根ざしている。この種の経験が、日常言語における色彩表現を豊かにしている。

このような経験に基づく比喩表現は、花言葉にも広範に見られる。花言葉に関しては、表 5-8 の花言葉が示すように、色で表現する意味に相違が生じる。

表 5-8

	赤色	白色
アネモネ	君を愛する	希望、期待
ツツジ	愛の喜び	初恋
キク	あなたを愛しています	真実

赤色のアネモネ、ツツジ、キクの花言葉は、「愛」や「喜び」の意味がある。これに対し、白色の花言葉は、「希望」、「初恋」、「真実」などを意味する。このような相違は、言語主体の色彩に対する知覚経験（主に、視覚）に関わっている。

第 4 章では、植物のメタファーを考察した際に、赤いバラをその一例として、花に関する恋のメタファー表現を考察した。バラが恋のメタファーに用いられる場合には、「血」に関する経験が、「犠牲」、「情熱」などの意味に比喩的に拡張していく。さらに第 4 章では、色彩の視覚による知覚経験が、花の意味拡張の基盤になることを検証した。この種の経験は、樋口（2004）が指摘する花言葉の修辞性にも関係する。

> バラはそれぞれの色によって、花ことばが異なる。赤いバラは、「美人」、「愛」、「恥辱」などの感情を、白いバラは、「恋を知らない心」、「私はあなたにふさわしい」といった花ことばを有している。（樋口 2004：157）

このような花言葉の修辞性の問題は、色彩に関わる連想プロセスの問題にも関係する。また、花言葉の修辞性は、花の形（例えば、形状、大きさ）に関する花言葉の認知的基盤にもなっている。

花の視覚感覚は、類似性の連想プロセスを介して、花のメタファー表現を生成する。また、空間的ないしは時間的な近接関係の連想プロセスを介して、花のメトニミー表現を生成する。ここでは、さらに東アジア（主に、日本、韓国）の車輪梅を例として、花言葉の修辞性の一面を考察する。

車輪梅は、「愛の告白」、「純真」などの花言葉に関係する。この種の花言葉の形成に関し、二宮（2015）は、次のように述べている。

> 濃い緑色の葉を車輪状につけ、ウメに似た花を咲かせることからこの名がつきました。花言葉の「愛の告白」は、丸くまとまって咲いている花が、女性に捧げるブーケのように見えることから、「純真」は花の清楚なイメージからきています。
>
> （二宮 2015：42）

以上の記述から分かるように、車輪梅の花言葉は、花の形による連想プロセスを介して形成したのである。花の丸いという視覚的経験に基づいて、丸い形のイメージが連想され

る。そして、この種の形状の類似性が、ブーケへの連想を引き起こす。また、この種の花言葉には、広い意味での近接性のメトニミーの連鎖が認められる。その連想プロセスは、以下のように表示される。

〈連想プロセス〉

車輪梅：［→ 丸まった形 → ブーケ → 女性に捧げる →告白］

他にも、花の外観的な特徴に基づく連想を介して、花言葉として定着した表現が多く存在する。これらの表現は、「恋は花」のメタファーの下位レベルの表現と考えられる。例えば、以下の例を通して、「恋」と花の間の類似性が確認される。

A. サクラソウ（桜草）:〈初恋〉

小さな花を輪生状に咲かせるかわいい姿に基づく連想

B. クサボケ（草木瓜）:〈一目惚れ〉

葉が出る前に花が咲き、花は目立つという印象に基づく連想

C. ナズナ（薺）:〈すべてを捧げます〉

種の形が財布に似ているので、「私の財布をすべて預けます」に連想

この種の類似性は、客観的な類似性ではなく、言語主体が主観的に創り出す類似性の一種と考えられる。

また、時間に対する感覚が、花言葉の形成に影響を及ぼす例も観察される。例えば、以下の A〜C の花言葉には時間概念が含まれ、花が持つ時間が長ければ長いほど、〈永遠〉、〈不変〉のイメージが強くなる。また逆に、花色の変わりやすさ、衰えやすさは、感情が移り変わりのイメージを強くする。

A. センニチコウ（千日紅）:〈変わらぬ愛、永遠の愛〉

乾燥に強く、ドライフラワーになっても色が変わらない

B. アジサイ（紫陽花）:〈移り気、辛抱強さ〉

咲き始めから色がどんどん変化するから〈移り気〉;

花期が長いから〈辛抱強さ〉への意味

C. アサガオ（朝顔）:〈はかない恋〉

朝に咲いて昼には萎んでしまうからの連想

また、植物の香りと味覚の経験に基づく、以下のような花言葉も存在する。香り高い金木犀は、花が小さいので、「謙虚」の意味を有する。一方、椿は花が目立つが、香りがないという特徴から、「控えめ」という意味が付与されている。

A. キンモクセイ（金木犀）:〈謙虚、真実の愛、初恋、陶酔、気高い人〉

「謙虚」は強い香りが、花が意外と小さいからである。

B. ツバキ（椿）:〈完全な愛、控えめなやさしさ〉

「控えめ」は花は艶やかで、香りがついていないからである。

これらの表現には、視覚と嗅覚の融合が認められる。

以上の花言葉の考察から、花に対する修辞的な意味づけは、人間の五感による身体的な経験に基づいていることが明らかになる。また、この身体性を基盤として、花の比喩表現に関わる様々な連想プロセスが起動される。山梨（2015）は、この連想プロセスと心的プロセスの関係を、次のように述べている。

> 連想の意味を広く解釈するならば、ある概念からほかの概念にシフトしていく心的プロセスのかなりの部分は、連想のプロセスの一種とみなすことができる。連想の世界は、かなり自由に、柔軟に広がっていく心的プロセスの世界である。（山梨 2015 : 26）

5.2.3 知識フレームの制約

花言葉は、歴史的にはヨーロッパに由来する。花言葉の中には、特にギリシャ神話、キリスト教の経典に基づくのが少なくない。したがって、花言葉の理解には、西洋の歴史と文化に関する背景的な知識が重要な役割を担う。

ギリシャ神話では、美少年のナルキッソスが復讐の神ネメシスに呪いをかけられ、水面に映った自分の姿を愛してした、という逸話が存在する。この逸話では、恋に苦しんでそのまま死んだ後、ナルキッソスはスイセンの花になる。この逸話から、スイセンは「うぬ

ぼれ」、「自己愛」の花言葉となった。

一方、中国では、水仙は“凌波仙子”と呼ばれ、中国の古典文学では、水仙は清らかな女性を喩えることが多い。また、中国の神話伝説では、水仙はよく女神と結びつけられる。このように中国文化では、水仙は女性と関係づけられている。

以上の考察から明らかなように、西洋の水仙の花言葉には、ギリシャ神話、ナルキッソス、自己愛等が関係しているので、自己愛に言及する際に、水仙が自然に連想される。また中国では、水仙は古典文学や神話、伝説において、女神が連想される。。このように、花言葉の理解は、文化的な背景によって異なる。

一方、中国や日本では、花は人間の感情を表すうえに、人間の性格、さらに人間自身に喩えられる傾向がみられる。次の例を見てみよう。

（12）a. 莲，花之君子者也。

b. 花は桜木、人は武士

中国では、蓮の花から「君子」が、また日本では、桜から武士が連想される。このような花の連想に基づく比喩表現に関し、靳·段（2017）は、次のように指摘している：「古代中国の文人たちは自分の道徳観念、人生への追求を花に寄せ、“花十友”、“花十二客”、“花王花相”という別称を花に与え、花は人間と同じ性格を持つように擬人化されている」。日中両国における花の擬人化は創造的であり、そこには中国の「儒家思想」や日本の「武家社会」の文化が反映されている。このような文化的な知識がなければ、花が持つ意味の理解は困難である。（この点に関しては、4.4「植物の精神領域への写像」を参照）

花言葉は人間が感情を表す表現の一種である。花の色や形状、咲く時期さらに地域や文化に関わる経験が違うため、花に与えられる意味は多様である。花の意味がこのように創造的に拡張されるのは、メタファー、メトニミー、連想のプロセス等と密接に関連している。花を含む自然界を通して世界を解釈し、意味づけしていく人間の修辞的な認識により、日常言語の豊かな意味の創造が可能になっている。

5.3 ブレンディングと認知プロセス

日中両国の言語や文化には、植物に関する取り合わせの伝統がある。日本の古典的な和

歌や俳句の中には、植物に関する取り合わせとして、季節や行事などの表現がある。例えば、「もみじに鹿」、「梅に鶯」などは、日本独特の取り合わせである。一方、中国では、「松鶴長春」、「蓮蓮有魚」、「鳳穿牡丹」など中国ならではの取り合わせが数多く存在する。このような取り合わせは、日中両国の文化に定着し、絵画、芸術品、衣裳の模様など様々な領域で使用され、私たちの日常生活と融合している。取り合わせは、国や民族の文化や歴史を反映し、さらに人間の審美観、価値観にも浸透してきている。本節では、日中両言語と両国の文化における取り合わせを中心として、認知言語学の視点から、取り合わせの認知メカニズムを考察していく。また、取り合わせの比較を通して、日中両国文化の繋がりと相違を明らかにしていく。

『中国シンボルイメージ図典』(2003)、『日本の伝統文様』(2006) を見る限り、取り合わせには、民俗的、芸術的な視点からの考察が多いと言えるが、言語学の視点からの取り合わせの分析はなされていない。以下では、認知言語学の視点から取り合わせの認知メカニズムを考察し、取り合わせの言語表現とその文化背景を分析しながら、日中両国の文化の共通性と相違点を明らかにしていきたい。

言語主体には、様々な視点からイメージを操作する能力が備わっている。このイメージ操作には、イメージスキーマ、焦点シフトなどの認知プロセスや、イメージの合成、イメージの重ね合わせなどの認知プロセスも関わっている。

山梨 (2012) は、この種のイメージ操作として、「斑点のあるキノコ」のイメージ形成の例を示している (図 5-6、参照)。

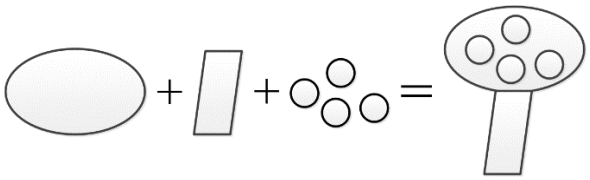


図 5-6 (山梨 2012 : 54)

図 5-6 の「斑点のあるキノコ」のイメージ形成には、三つのイメージの合成の操作が関わっている。次節で考察する植物の取り合わせのイメージ形成にも、この種のイメージの合成の認知プロセスが関わっている。この種の合成は、視覚経験に基づく合成だけでなく、日常生活における身体経験、聴覚的経験とも密接に関係している。

5.3.1 イメージのゲシュタルト性

A と B が単独に存在とする場合、A と B は、それぞれの意味を持つ。しかし、A と B とが組み合わされた場合には、その全体は、単純に A と B の意味の総和ではなく、その全体が独自の新たな意味を担うことになる。換言するならば、A と B の総和は、単独の存在としての A と B の総和とは異なる、新たな意味（新たなゲシュタルト的な意味）を生み出す。このようなゲシュタルト的な意味の発現のプロセスは、図 5-7 の右側の図に示される。

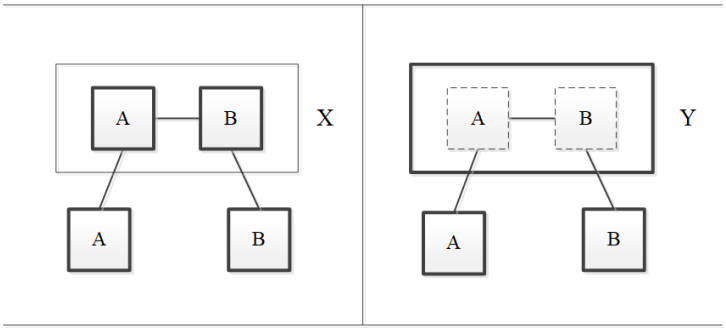


図 5-7（山梨 2000：246 を参考）

右側の図の Y は、A と B の合成の結果として創発した、新たなゲシュタルト的な意味を示す。（これに対し、左の図の X は、A と B から合成された単純な意味の総和を示す。）

植物の場合は、植物と植物、または植物とほかの存在を組み合わせるときは、意味が変容し新しい意味が生み出される。中国語における「桃の花」と「柳」の場合、「桃の花」と「柳」はそれぞれ豊な意味がある。「桃の花」からは「春」、「美女」、「恋」などを連想することができ、「柳」からは「春」、「別離」、「美女の歩き姿」などが連想される。「桃の花」と「柳」が組み合わせて「花柳」となった場合、意味が変容する。

「桃の花」と「柳」は、春の典型的な植物である。（これは特に、江南地域[65]に当てはまる）。“花红柳绿”は、春の美しい風景の描写であり、この花木の取り合わせは、視覚経験による華やかなイメージが形成し、「華やかさ」という抽象的な概念に拡張する。また、「桃の花」と「柳」は、両方とも「女性」の意味を有するので、両者の組み合わせは、美女（特

[65] 「江南」は長江の南という意味である。時代によって、その領域の中心は変化するが、特に蘇州、無錫、嘉興など、長江中、下流域の南岸地域を指す。中国文化では、「江南」には、美しくて豊かな場所のイメージがある。

に遊女）のメタファーになり、“花街柳巷”、“寻花问柳”のような表現となる。

これに対し、日本語の「雪月花」,「花鳥風月」などの取り合わせは、自然界の代表物を組み合わせて自然美を表す。この場合にも、取り合わせの全体の意味には、各部分の意味の総和を越える新たな意味が生じる。

花札は、江戸時代、上流階級の間に流行っていたカードゲームで、カルタという遊びからきたものである。一般的に、花札は 48 枚に構成されて、一年の 12 ヶ月を表す。花札と呼ばれるのは、各絵柄が、毎月の代表的な植物に関わっているからである。花札の取り合わせは、日本の自然現象、風俗習慣、歴史文化を反映している。表 5-9 は、日本の花札における典型的な取り合わせである。

表 5–9

月名	取り合わせ（A に B）	月名	取り合わせ（A に B）
1 月	松に鶴	7 月	萩にイノシシ
2 月	梅に鶯	8 月	芒に月/雁
3 月	桜に幕	9 月	菊に盃
4 月	藤にホトトギス	10 月	紅葉に鹿
5 月	菖蒲に八つ橋	11 月	柳に燕
6 月	牡丹に蝶	12 月	桐に鳳凰

表 5-9 が示すように、日本の花札における取り合わせは多様であるが、これは一定の連想プロセスを介して組み合わせるものである。表 5-9 の取り合わせの中の A の桜、もみじなどは、日本の四季の代表的な植物といえる。自然界に関する文化的な知識によって、桜は 3 月、さらに春への連想が引き起こされる。もみじは 10 月の典型的な植物であるので、秋が連想される。

また、表 5-9 の取り合わせの中の B の植物以外の動物、自然現象（月）、人間の生産生活に関する事物は、A との時間的、空間的な隣接関係により組み合わされものが多い。

以上の日本文化における取り合わせに対し、表 5-10 は、中国文化によくみられる取り合わせである。この表の A と B は、類似性に基づく連想プロセスを介して組み合わせたのが多いようである。

表 5-10

タイプ	植物 (A)	取り合わせ (B)	四字熟語	意味
1	松	鶴	松鶴长春	長寿
	牡丹	鳳凰	凤戏牡丹	富貴、吉祥
2	蓮	魚	连年有余	新しい一年が豊かにする
3	梅	カササギ	喜鹊登梅	よい知らせが来る

連想プロセスについては、タイプ 1 のような外観や成長特性などの特徴における類似性による連想、タイプ２のような音声的関係における類似性による連想、タイプ 1 とタイプ 2 を融合するタイプ 3 という三つのタイプに分けることができる。表 5-10 が示すように、中国語には取り合わせは四字熟語として表現することができ、豊かな意味が与えられている。以下では、松や蓮に関する取り合わせの諸相を考察する。

▸ 松

「松に鶴」と「松竹梅」の取り合わせは、日中両国の文化に深く根を下ろしている。実は、松と鶴の生活環境は異なり、一見したところ、両者の組み合わせの可能性が低いように見えるが、これは文化的、歴史的な連想のプロセスを介し、組み合わせたのである。

「松に鶴」の取り合わせは、中国の伝統的な吉祥図案の一つとして中国人に親しまれている。中国の古典的な絵には、「松に鶴」をモチーフとする作品が数多く、祝寿の意を示す。「松鶴長春」、「松鶴延年」という四字熟語も、中国語に定着し、松と鶴を組み合わせは、長寿の象徴とされている。また、「松竹梅」の取り合わせは「歳寒の三友」と呼ばれ、「松竹梅」は、中国人が重視する「高潔な品格」のメタファー表現になっている。

中国文化には、松は「常緑で茂る」、「長生きする」、「まっすぐで高大」、「寒さに強い」などのイメージがある。中国における「不老不死」を求める道教思想にでは、長寿の松は重要なシンボルになっている。道教の思想には、道士が長年の修業を通して長生きし、不老不死の霊力を持つ仙人になるという信仰も存在する。例えば、“道士无白发，青松多寿色”[66]の詩句から、松と道教は密接な関係があることが分かる。中国では、松は、遠く離

[66] 道士无白发，青松多寿色：道士は白髪が生えず、青松や白石が変わらずに長生きること。(唐•孟郊

れた里山に多く見られる。このような松の生活環境は、道士の修業に求められる「清浄の地」に適している。

また、松の「動かずにまっすぐ」、「寒さに強い」という特徴は、人間の「しゃっきとしている姿」、「挫折や困難に負けない性格」の喩えとしても使われている。このような特徴を持つ松は、古来から儒教思想が高く評価する「正々堂々」や「根性がある」など、人間が有すべき貴重な品格のメタファー表現として中国文化に定着している。

以上のような文化的な背景から、中国では、松から、道教思想における「長寿」と「仙人」の連想が可能となり、儒教思想における人間が有すべき「貴重な品格」への連想が可能となる。

中国語における「松に鶴」の取り合わせは、まず松と鶴が長生きであるという類似性に基づく連想のプロセスを介して取り合わせたのである。この種の連想のプロセスは、図 5-8 に示される。

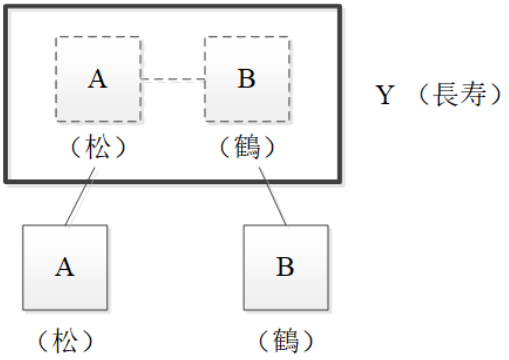


図 5-8 「松に鶴」のゲシュタルト的意味

また、前述したように、道教思想には、松は修業の場所であることから、「仙人」が連想される。（そして、鶴は、仙人の乗り物であるという連想もなされる）。松と鶴を組み合わせるのは、このような連想の認知プロセスに関わる。

日本語には、「松が取れる」、「松の内」のような言葉があるが、これは正月に「門松」を飾る習慣と関わっている。また、松は（神様を）「待つ」に通じ、連想としては神様の依り代にも繋がる。

《西上经灵宝观》）

さらに、「松風」を楽しむことも和歌に詠われる。和歌では、松は、「その清音により神の影向など、様々なことを合わせもって感じとる」という説があり、松が風に吹かれた清らかな音という聴覚の経験から、神様が寄ってくることを連想させ、松の神聖性が強く感じられる。このような連想を喚起するのは、松の「常緑」が引き起こした「生命力」と大いに関連し、日本古来の「身の回りのあらゆるものに神様を感じている」思想とも繋がっていく。また、日本文化には、松が「正月に門松を飾る」ため、「門松」から正月が連想される。そして、「まつ」／「つる」という尻取りは、音声関係による連想を可能としている。

四季の代表的な景物を取り上げる花札では、「松に鶴」の取り合わせが一月を代表する。これは、植物と季節の時間的、空間的な関係による連想プロセスに基づいている。また、中国文化における「松に鶴」の取り合わせは、日本文化に吸収されているが、その長寿の意味が背景化され、一月を代表する風物になったと考えられる（図 5-9）。

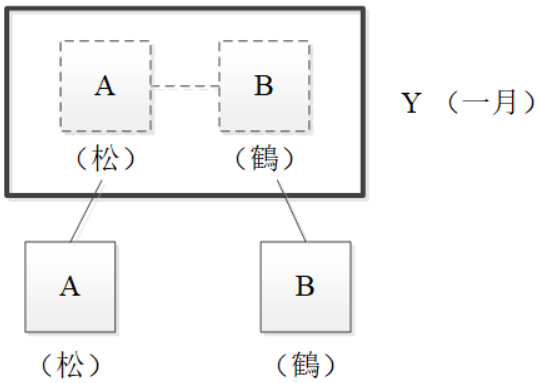


図 5-9 花札における「松に鶴」の意味

次に、「歳寒の三友」と呼ばれる「松竹梅」の取り合わせは、松の「寒さに強い」という特徴に基づいている。また、この特徴から、寒さに強い竹や梅を連想することができる。「寒さに強い」という特徴は、前述した「挫折に負えず」のメタファー表現であるので、ここでの「松竹梅」は、「困難にあっても屈すなく」という貴重な品格を喩えるている。この場合の「歳寒の三友」は、修辞的には擬人化のメタファー的表現である。

一方、日本では、平安時代から風雅な遊びとして花札が流行し、その文様の「松に鶴」は、一月を代表する風物であり、縁起の良いものとされている。中国から伝わってきたと言われる「松竹梅」は、日本ではめでたいものとしてお祝い事に使われ、品物を三階級に

分ける等級の呼称として、一般的には「松が一番で、竹が二番、梅が三番」の順になる。このように、「松竹梅」は、中国では人間の貴重な品格を代表するが、日本では、めでたいの意を表すことで、等級として用いられているようになった。また、松は寒中でも茂り、竹は冬でも緑を保ち、梅は冬に綺麗な花を咲かせるため、「旺盛な生命力」という共通点を持ち、この組み合わせは、「めでたい」という意味を象徴するようになった。

以上、日中両国における松の意味及びその文化的背景について考察を行った。松は、様々な文化背景に関わる連想プロセスを介して、多様な取り合わせが可能となっている。また、この種の取り合わせにより、両国の文化における独自の修辞的な意味が創造されたと言える。

▸ **蓮**

蓮と魚の取り合わせは、中国人に親しまれている。この取り合わせは、音声的な類似性に基づく連想に基づいている。「蓮」は lián という発音で「連」と同じ、「魚」は yú という発音で「余」と同じである。両者を組み合わせると、「連続で余裕」の意味を持つようになる。この場合の蓮には、中国文学における「泥より出づるも染まらず」という「清純」などのイメージではなく、音声の面で組み合わせが関係する。日本では、仏教の法事との関係で、蓮は「死」への連想を引き起こす。これに対し、中国文化では「めでたい」の意を表す。この点で、「蓮と魚」の取り合わせから、裕福な生活が続くという願いの意味が喚起されることになる（図 5-10）。

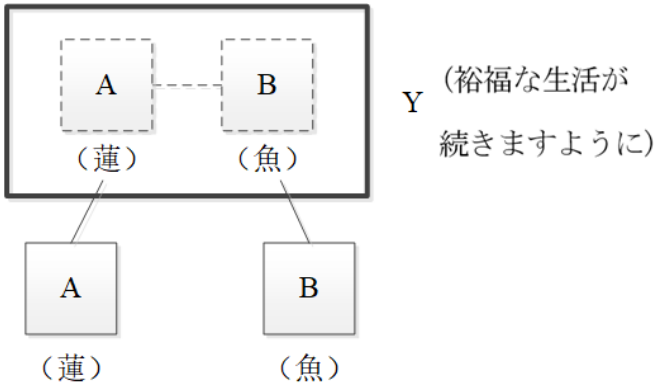


図 5-10

上述の「蓮」と「連」の同音異義のメカニズムに基づく意味のずらしのプロセスは、図

5-11 のように示される。この場合の〈聴覚映像 $_x$〉は lián、〈概念 $_i$〉と〈概念 $_j$〉は「蓮」と「連」に対応する。このような音声的類似性に基づく連想プロセスを介して良い生活への願いの意味が喚起される。

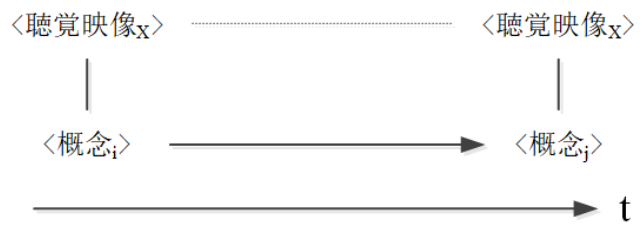


図 5-11 （山梨 2012：160）

中国文化ではこの他に、新婚夫婦に、クルミ、ナツメ、蓮の実（蓮子）、落花生、ライチ、栗（栗子）を贈る風習がある。これは「恋は実」のメタファーと関わっているが、音声的連想で、結婚、出産のイメージも喚起される。

5.3.2 日中文化の繋がりと変容

中国では、牡丹は「十大名花」の一つである。唐代には、皇室や貴族の間に牡丹を観賞することが流行っていた。中国語では、牡丹は「花王」と呼ばれ、“唯有牡丹真国色”[67]の詩句が表すように、牡丹は、中国文化においては相当な高貴なイメージがある。一方、鳳凰は、神話の中しか存在しない架空な動物であるが、鳥の王者される高貴な鳥である。「花王」である牡丹と「鳥の王」である鳳凰の取り合わせは、「花に鳥」という空間的な隣接関係による連想を喚起する。したがって、「牡丹に鳳凰」は、身分の高さを表すことになる。また、牡丹は大輪の鮮やかな花であり、鳳凰との取り合わせで「富貴」のメタファー表現にもなっている。

牡丹は、平安時代に日本に伝えられ、その際に「百花の王」という中国思想も入ってきた。また、現代日本語の「唐獅子」は、中国から日本に伝わってきた獅子のことを表す。「百獣の王」と「魔除け」という中国文化における獅子のイメージも、日本文化に定着するようになった。日本では、「牡丹に唐獅子」の取り合わせが伝統的であり、これおは取

[67] 唯有牡丹真国色：牡丹は「国の色」を代表できる唯一の花であること。（唐•刘禹锡《赏牡丹》）

り合わせの良いものを意味する。しかし、中国には、「牡丹に唐獅子」の取り合わせはなく、「牡丹に鳳凰」の取り合わせが一般的である。

中国に由来する牡丹と獅子が日本に伝わり、「牡丹の下は、獅子が安住の場所である」という禅の思想がこれに込められるようになった、とも言われている。また日本では、（13）の演歌の台詞に見られるように、「牡丹に唐獅子」の取り合わせは、入れ墨の図案としてヤクザのシンボルにもなっている。

（13）義理と人情を　秤にかけりゃ
義理が重たい　男の世界
おさななじみの　観音様にゃ
俺の心は　お見通し
背中で吠えてる　唐獅子牡丹　（「唐獅子牡丹」，作詞：矢野亮）

以上の考察から明らかなように、中国由来の植物と動物の取り合わせの一部は、文化的な変容を経て、日本文化の新たな一面を特徴づけていると言える。

5.4 まとめ

本章では、まず秋の代表的な植物に関するメタファー表現の分析を中心として、植物と季節の関係を考察した。われわれは、抽象的な世界を、身近で具体的な世界のメタファーによって理解していく。例えば季節を理解する際、季節と密接な関係がある植物のメタファーにより、季節の諸相を理解していく。

この種の植物のメタファーの考察に続き、本章では、花言葉の修辞性の分析を試みた。花ことばの使用には、様々な修辞的連想のプロセスが働いている。この種の連想のプロセスは、厳密には歴史や文化、各時代の宗教や政治と深く結びついている。花に関しては、アジア諸国と西洋との長い交流の歴史がある。この交流を通して、花に日本や中国独自の文化的な意味が付与され、定着することとなったが、両文化における花ことばの意味には、興味深い相違も認められる。このような文化的差異を理解することは、それぞれの国の文化と民族心理をより深く理解することに通じる。

花ことばの考察に続き、本章ではさらに、日中両文化における植物の取り合わせの修辞

性を考察した。自然環境、宗教、風俗習慣などの文化的要因により、取り合わせによる連想は多様性を呈し、それぞれの文化に豊かな意味を付与している。

本章では、特に「松」、「蓮」、「牡丹」等に関する取り合わせの分析を通して、日中両文化の修辞的な発想の違いと共通性の一面を明らかにした。本章の考察から明らかなように、日本は、歴史的に中国の影響を受けているが、独自の歴史や文化的背景により、新たな修辞的な意味が日本文化に組み込まれている。このような取り合わせの文化が今後どのようにして変容するか、また如何にして現代文化と融合していくのか。これは非常に興味深い問題であるが、今後の課題として残される。

第 6 章　結語と展望

言葉は心や脳の機能を反映しているが、その背後には、言語主体としての人間と環境が存在している。また、言葉の機能には、環境とインターアクトしていく人間の身体的経験が密接に関わっている。したがって、言葉のメカニズムの解明には、身体論的な視点からの考察が不可欠である。われわれは、イメージ形成、イメージの重ね合わせ、図･地の反転、焦点シフト等の認知操作を通して、能動的に外部世界を意味づけしている。また、視覚、味覚、触覚等の基本的な感覚に基づいて外部世界を知覚し、世界を創造的に伝えている。

本論文は、以上の身体論的な観点から、従来の言語学の研究では等閑視されていたメタファー、メトニミー等が関わる言葉の主観性と創造性のメカニズムの解明を試みている。特に本論文では、認知言語学の枠組みに基づいて、身体論的なの視点から、日中両言語における植物に関する言語表現の体系的な分析を通して、言葉と認知の創造的なメカニズムの諸相を考察している。

6.1 本論文の研究成果

本論文では、第一章の序論、第二章の先行研究の批判的考察を背景にし、第三章以下において、次のような研究を試みた。。

第三章では、まず植物と人間の関係に注目し、植物に関する漢字の字源を考察することにより、漢字の使用に植物の把握の認知プロセスがどのように反映しているかを明らかにした。また、認知言語学の視点から、植物に関する漢字を分析し、歴史的に漢字が持つ意味がどのような認知プロセスを介して変化してきたかを考察した。さらに、「蓮」、「椿」などの植物に関する漢字の分析を通して、日中両言語における漢字の意味解釈、使用状況の共通点と相違を調べるとともに、日中両国における植物に関する文化の繋がりを明らかにした。

人間の日常生活に関わる植物は、人間が既存の事物を解釈し、未知の世界を比喩的に表現していくための有力な表現手段となる。また植物に関する認識の仕方は、文化にも反映

されている。人間の文化を植物の文化と繋げる一つの重要な記号の媒体は漢字である。本研究では、認知言語学的視点から、植物に関する漢字に反映される認知プロセスと、この種の認知プロセスによって特徴づけられる日中文化の共通性と相違点を体系的に検討した。また、植物に関する語句と慣用表現を特徴づける認知的な意味の諸相を明らかにした。

以上の考察から、さらに以下の知見が明らかになった。まず第一に、漢字の形と意味拡張の関係の分析により、表記符号として個々の漢字のイメージと連想機能が明らかになった。中国語では、植物に関する漢字の大多数は「草」と「木」に基づいて一定の連想プロセスを形成するため、漢字の意味拡張との関連で、植物に関する語彙の意味も拡張している。この事実から明らかなように、「草」と「木」は、植物を理解していく際の基本的なカテゴリーを形成している。

この種のカテゴリーの判断基準は、認知主体の身体経験（特に視覚に関わる経験）に根ざしている。植物の各部位とその生長過程を問題にする場合、「花」のカテゴリーは最も基本的なカテゴリーである。従って、植物に関する基本レベルのカテゴリーの中でも、「花」のカテゴリーに関する意味拡張が広範に見られる。

この事実を踏まえ、第三章では、日中両言語における「花」の慣用表現を収集し、意味拡張のプロセスの分析を試みた。「花」が持つ多様な意味拡張には、花に対するメタファー、メトニミー、シネクドキの認知プロセスが反映されている。また「花」の意味拡張は、「花」に対する人間の視覚、嗅覚等の身体的な経験が関係している。また、比喩的な意味拡張の場合には、「類似性」を見出す認知主体の主観性が重要な役割を担っている。

中国語の「草」、「木」、「花」等は名詞の品詞のほかに、動詞、副詞、形容詞として多く使用されている。日本語にはこのような使用例は少ない。中国語におけるこの品詞の多様性は、上述した漢字のイメージ機能と密接に関わっている。

以上の植物に関する言語分析を通して、日本語と中国語における一致と相違点が明らかになった。ここまでの考察から明らかなように、異なる言語、文化の人間も、基本的な身体経験に関しては、植物に対する認識に共通性が認められるが、社会･文化的背景の相違がある場合には、問題の植物表現の意味とその拡張のプロセスに差異が認められる。

第三章では、植物に関する語彙レベルの言葉（特に名詞）の意味拡張を中心に分析を行い、「木」、「草」、「花」のカテゴリー化と意味拡張の認知プロセスを考察した。従来の言葉の意味を羅列して分析する研究と異なり、本研究は認知言語学の意味論の視点から、多義性を持つ言葉の認知プロセスに主眼を置き、植物表現の意味拡張のメカニズムを明らかに

した。

本研究の植物に関する漢字の研究は、伝統的な字形を中心とする研究に基づいている。阿辻（2010：97）は「表意文字は背景にある音声言語と切り離して、字形だけで本来の意味を伝えることができる。」と漢字の特徴を指摘している。近年、中国では、宋（2016：8-13）（「漢字徽標多模態隠喩的互動意義解析」）、王、陳、王（2014）（「漢字字体本身即為一種隠喩」）、周（2015）（「漢字構造的隠喩研究」）など、＜漢字それ自体が一種のメタファーである＞という認知言語学の視点から、漢字の字形と意味の関係を探る研究も進んでいるが、漢字についての認知的研究は本格的になされていない。

本研究では、特に植物に関する日中共通の漢字の認知的分析を通して、漢字における符号と意味の関係を考察した。漢字の認知プロセスを探究する本研究は、漢字の文化的意味の理解だけでなく、漢字の記号論的な意味研究に関しても新たな視点を提供する。

基本的に、植物の漢字（ないしは漢字以外の植物の表現）の意味拡張には、メタファー的な意味拡張が重要な役割を担っている。この事実を考慮し、第四章では、植物のメタファー表現の体系的な分析を試みた。本章では特に、日中両言語における「人間は植物」の概念メタファーの認知的分析を中心に、植物領域から人間に関する諸領域へのメタファー写像のメカニズムを分析した。メタファーの基本的な機能は、具体的な領域を抽象的な領域に写像する点にある。本章では、この写像機能の方向性に基づいて、植物に関するメタファーが、具体的な人間の人体領域から抽象的な精神領域（ないしは、性格領域）に写像される認知プロセスの諸相を明らかにした。

さらに本章では、日常言語を特徴づける概念メタファーを、＜構造メタファー、方向づけメタファー、存在メタファー＞に下位区分し、この区分に基づき、植物の起点領域から人間の目標領域への変換に、イメージスキーマの写像が関わっている事実を明らかにした。例えば、上位レベルの「恋愛は植物」（LOVE IS A PLANT）の構造メタファーには、「起点－経路－終点」のイメージスキーマが関係している。また、下位レベルの「恋は花」の概念メタファーには、「花が咲く」は「愛の喜び」、「落花」は「悲しみ」のような「上／下」のイメージスキーマの方向づけのメタファーが関係し、さらに下位レベルの「恋は実」の概念メタファーには、容器のイメージスキーマが関係している。これらの人間の思考の根底にある概念メタファーは、日中両言語で一致し、共通性が認められる。しかし、両国の民族や社会、風習などの社会･文化的要因の影響で、「恋は植物」に用いられる具体的な植物に関するメタファー表現には相違も認められる。

現時点では、認知的視点からの植物に関するメタファー研究がいくつか存在する。概念メタファーの視点からの研究としては、籾山（2005）、陳（2015）、陳（2016）などの研究がある。しかし、これらの研究はいずれも構造の類似性に基づいた考察であり、植物の領域から人間の領域への写像のメカニズムの分析はなされていない。日中両言語には、植物に関するメタファーは豊富である。特に花木の下位レベルのカテゴリーに属する「桃」、「梅」、「菊」、「桜」、「椿」等の具体的な植物のメタファー表現は、きわめて多義的であるため、この種の植物のメタファーの全体像は捉えにくい。

以上のような植物に関するメタファーの研究状況を考慮し、本研究では、認知言語学の視点から、植物に関する概念メタファーを綿密に分析し、この種のメタファによって特徴付けられる人間の概念体系の諸相を明らかにした。植物に関するメタファーは、単なる修辞的表現ではなく、人間の認知能力と関わっている。本研究では、さらにこの種のメタファーに、人間の価値観、審美観、死生観等が反映されている事実を明らかにし、メタファーと文化の関係を概観した。

以上、第三章、第四章で考察した植物の表現のほかにも、多義性と意味拡張の観点から見て、きわめて修辞性が高い植物の詩的表現が数多く存在している。植物の詩的表現についての分析はいくつか存在するが、認知言語学の枠組みに基づく、修辞的な分析は殆どなされていない。そこで、第五章では、山梨（2015）の詩的表現の分析を参考にして、和歌や俳句で用いられる植物に関する季語の修辞機能の分析を試みた。

詩的表現には、慣用化されたメタファーに基づく表現が広範に存在する。特に季語の場合には、植物の変化を通して、四季の変化の諸相が修辞的に暗示される。この季節の変化の感知能力は、人間の身体感覚と密接に関わっている。また、植物の詩的表現の代表とも言える花言葉には、「恋は花」、「花が咲く」のような慣用的な表現と違って、個々の植物に特定された意味が与えられ、詩的な言語表現として定着している。この種の言語表現の創造は、基本的には五感の感覚とその拡張に基づいている。

現在の日本のポピュラーな「花言葉」は、西洋の植物文化から取り入れられているため、ギリシャ神話やキリスト教の知識がなければ、この種の「花言葉」の修辞的な意味を理解するのは困難である。一方、中国や日本の「花言葉」にも、それなりの文化特有の意味が浸透している。

植物に関わる修辞的表現としては、「季語」、「花言葉」のような修辞表現のほかに、芸術、デザイン等の領域に関わる修辞表現が存在する。例えば、「松に鶴」、「牡丹に唐獅子」等の

表現は、日本風の表現であり、日本文化の一面を反映している。また、この種の表現には、植物に関する取り合わせの文化的な意味も反映されている。日本文化に定着している「松に鶴」、「牡丹に唐獅子」のような取り合わせは、中国の伝統文化における「松鶴長春」、「鳳戯牡丹」と何らかの関係がある。本研究では、このような日中の植物に関する伝統文化の考察を通して、日中の植物文化の歴史的な繋がりも明らかにした。

以上が、本論文の主な研究意義と成果である。まとめると、本研究では、認知言語学の枠組みに基づき、植物に関する言語表現の意味分析を通して、植物表現に反映される日中両言語の概念構造と認知のメカニズムの諸相を考察した。また本研究では、日常言語と詩的言語の植物表現を通して、人間はどのような認知プロセスを介して植物を認識し、この認識をどのように言葉で表現するかを考察した。また、人間は植物を通してどのように「生と死」、「成長」、「恋」等の日常生活に関わる経験を修辞的に表現するかを明らかにするとともに、その多様な表現の背後に存在する文化的な知識の一面を考察した。

言葉は、人間の知的な経験を伝達する道具であるだけでなく、人間の感性や創造性に関わる経験を伝える道具でもある。本研究は、特に後者の感性と創造性を反映する言葉の修辞的なメカニズムの考察も試みている。以上の考察は、言葉の意味の創造性と意味拡張のメカニズムの研究に重要な知見を提供するだけでなく、修辞的な言語表現を可能とする人間の認知能力の研究に重要な知見を提供する。

植物の慣用表現から明らかなように、日本と中国との交流には悠久の歴史がある。蓮、桃、梅などの中国発祥の植物は伝統的な中国文化を反映し、日本に伝わった後、日本独自の文化的意義が付与されて日本文化に定着することとなった。

本論文は、認知言語学の新たな視点からの研究である。現時点では、以上の線に沿った認知言語学の観点からの先行研究は殆ど存在しない。この点で、本研究が、今後の「植物言語学」、「植物文化学」の研究と認知言語学的な視点に基づく日中対照言語学の研究に貢献するならば幸いである。

日中両言語における植物表現に関する本格的な認知的研究は、まだ始まったばかりである。本研究は、特に語彙レベルと句レベルの意味分析を中心としているが、植物の語構成、語彙の統計と分布等の研究までには至っていない。植物表現に関するこの方面の研究は、今後の課題として残される。また本研究は、植物表現の言語学的な分析が主眼となっているため、文化的視点からの考察は広範にはなされていない。この方面の研究も、今後の課題として残される。

6.2 今後の研究の展望

6.2.1 文化的意味と異文化コミュニケーション

本研究では、植物表現に関する日本語と中国語の共通性と相違点に着目し、特に植物表現の修辞的機能、概念構造、植物に関わる文化的背景の一面を考察したが、今後は、さらに植物に関わる日中の文化義（ないしは文化的意味）の研究も進めていきたい。現在、中国では、言葉の文化義についての研究がなされつつある。

文化義について、楊（2008：25）は、次のように言葉の文化的意味の重要性を指摘している。

> 词语的概念意义所包含或附着的反映该语言使用民族的价值观念、宗教信仰、生活方式、审美差异、人文地理、风土人情等民族文化因素的那部分内容，词语文化义的差异性实际上就是语言民族性的表现。（日本語訳： 言葉の意味には、言語主体の価値観念、宗教信仰、生活方式、審美差異、人文地理、風土人情等の民族の文化要因が含まれている。言葉の文化的意味の相違は、実際の民族性の表現である。（筆者訳））

中国語では、植物に様々な特定の意味が与えられ、中国文化を彩っている。また、日本語は、特に花や木に対し豊かな文化的な意味を付与している言語である。中国と日本は同じアジアの国であるが、何千年もの間お互いの文化に影響を与え合い、それぞれ独自の文化を作り出している。植物に関する言葉の文化的意味の考察は、植物に関する文化をよく理解するだけでなく、異文化コミュニケーションの研究にも重要な知見を提供する。換言するならば、日中両言語における植物に関する言葉の意味研究を通して、中国と日本の文化特徴や思考法をより深く理解するだけでなく、より深い異文化間の理解も可能となる。

6.2.2 言語教育の場への応用

陳（2015）は、植物表現のメタファー分析の第二外国語教育への応用の可能性を次のように論じている。

> 对于二语学习者而言，隐喻理解的难度一方面来自于目的语文化和语言形式的陌生，另

一方面来自于母语思维文化的影响。因而理解目的语隐喻就需要把握目的语文化及思维，同时尽可能排除母语思维带来的理解性障碍（日本語訳： 第二外国語学習者にとって、メタファー理解の難しさは、対象言語の文化や言語表現の形式に対する知識がその原因の一つであり、もう一つの原因は、母語の思考法や文化の影響にある。従って、対象言語におけるメタファーを理解するためには、対象言語の文化と思考法を把握し、母語からの影響をできるだけ排除する。（筆者訳））。

（陳 2015： 171）

本論文の分析の枠組みである認知言語学のメタファーモデルは、異言語を特徴づけるメタファーの概念構造の違いや発想の違いを解明していく言語モデルである。このようなメタファーモデルの分析に基づいて、異言語間のメタファーと発想の違いを明らかにし、その知見を言語教育に適用することにより、学習者に、異文化の発想の違いや概念構造の違いをより効果的に教えていくことが可能となる。本研究では、認知言語学の意味論の枠組みに基づいて、日中両言語の植物表現の概念構造と修辞機能の諸相を体系的に考察した。本研究で得られた知見が、日本語と中国語の言語教育にも重要な貢献をすることが期待される。

参考文献

日本語参考文献

青木生子ほか校注（2015）『万葉集（一）～（五）』、新潮社.

有岡利幸（1999）『梅Ⅰ』、法政大学出版局.

有岡利幸（1999）『梅Ⅱ』、法政大学出版局.

有岡利幸（2012）『桃』、法政大学出版局.

足田輝一（1995）『植物ことわざ辞典』、東京堂.

アスペクト編（2008）『カレセン―枯れたおじさん専科』、株式会社アスペクト.

阿辻哲次（2010）『漢字と日本人の暮らし』、大修館書店.

段 静宜（2016a）「認知言語学に基づく花の慣用表現に関する日中対照研究―蓮、桃、梅を中心に―」未公刊修士論文、関西外国語大学大学院.

段 静宜（2016b）「花の慣用表現に関する認知学的研究―梅の事例の日中対照分析―」『関西外国語大学大学院研究論集』40：64-81.

段 静宜（2018）「身体性に基づく「人間は植物」の概念メタファーに関する認知言語学的研究―植物に関わる慣用表現を中心に―」学会発表論文、日本語用論学会メタファー研究会シンポジウム「身体性」.

『現代用語の基礎知識』編集部（2015）『季節のことば』、株式会社自由国民社.

Heine,Bernd,Ulrike Claudi and Friederike Hünemeyer1991.Grammaticalization.Chicago:The University of Chicago Press.

樋口康夫（2004）『花ことば―起原と歴史を探る―』、八坂書房.

石田プリシラ（2015）『言語学から見た日本語と英語の慣用句』、開拓社.

石川九楊（2016）『〈花の構造〉―日本文化の基層―』、ミネルヴァ書房.

石川忠久（2007）『陶淵明詩選』、日本放送出版協会.

伊東信久（2007）『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界 動物･植物編』、株式会社スリーエーネットワーク.

ジェシカ•タインズ（2016）「武士と女神」『関西外国語大学大学院研究論集』、40：44－63.

ジェシカ•タインズ（2019）「メディア･ディスコースとジェンダー･イデオロギーの認知言

語学的分析」公聴会ハンドアウト（2019/01/22）.
神宮館編集部（2014）『暮らしのしきたり十二か月』、株式会社神宮館.
靳 衛衛•段 静宜（2017）「日中両言語における蓮、桃に関する慣用表現の対照研究」『杉村博文教授退休記念　中国語学論文集』367-390、白帝社.
加納喜光（2006）『詩經· I 恋愛詩と動植物のシンボリズム』、汲古書院.
加藤道理（1999）『字源物語　漢字が語る人間の文化』、明治書院.
川口謙二（1982）『花と民俗』、東京美術.
川合康三（2011）『中国の恋のうた『詩經』から李商隠まで』、岩波書店.
川合康三（2013）『桃源郷　中国の楽園思想』、講談社.
川合康三訳注（2011）『白楽天詩選』、岩波書店.
金田一京助、金田一春彦ほか（2008）『三省堂国語辞典』（第六版）、三省堂.
京都大学国語国文研究室編（1967）『諸本集成倭名類聚抄』、臨川書店.
小林忠雄•半田賢龍（1999）『花の文化誌』、雄山閣出版株式会社.
Lakoff, George and Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (ジョージ· レイコフ、マーク· ジョンソン（1986）『レトリックと人生』、渡部昇一ほか訳、大修館書店.）
Langacker, Ronald W. 1993. “Reference-point Constructions,” *Cognitive Linguistics*, No.4,No.1,pp.1-38.
劉 壹（2011）「日中慣用句における比喩表現の対照研究」未公刊修士論文、遼寧師範大学大学院.
李 祖定（2009）『中国伝統吉祥図案』、説話社.
前川文夫（1973）『日本人と植物』、岩波新書.
牧野和春（2002）『新桜の精神史』、中央公論新社.
松浦友久編訳（1997）『李白詩選』、岩波書店.
籾山洋介（2005）「『人間』の捉え方と言語表現（4）―植物としての人間―」『名古屋大学日本語•日本文化論集』13：87-115、名古屋大学留学生センター.
森田良行（2010）『日本語の慣用表現辞典』、東京堂出版.
松村 明（2006）『大辞林』（第三版）、三省堂.
鍋島 弘治朗（2011）『日本語のメタファー』、くろしお出版.
中村 明（1977）『比喩表現の理論と分類』、秀英出版.

中野 進（2000）『花と日本人』、花伝社.

並木誠士（2006）『日本の伝統文様』、東京美術.

野内良三（1998）『レトリック辞典』、株式会社国書刊行会.

二宮孝嗣（2015）『美しい花言葉·花図鑑　彩りと物語を楽しむ』、株式会社ナツメ社.

大石 亨（2010）「『植物』」のメタファー再考―慣用表現に付随する意味的韻律と主観性―」『日本認知言語学会論文集』10：149-159、日本認知言語学会.

大岡 信（2002）『短歌俳句植物表現辞典』、遊子館.

小内 一（2005）『日本語表現大辞典ー比喩と類語三万三八〇〇』、講談社.

佐田公子（2008）『古今集の桜と紅葉』、笠間書院.

斉藤正二（2002）『植物と日本文化』、八坂書房.

坂本 司（2016）『女子の生活』、新潮社.

坂本祐二（2012）『蓮』、法政大学出版局.

新村 出（2008）『広辞苑』（第六版）、岩波書店.

新訂増補国史大系（1967）『日本書紀』、吉川弘文館.

小学館国語辞典編集部（2006）『精選版日本国語大辞典』（第三巻）、小学館.

谷口一美（2003）『認知意味論の新展開　メタファーとメトニミー』、研究社.

寺井泰明（2000）『花と木の漢字学』、大修館書店.

田 一汐（2014）「中日樹木に関する慣用表現における比喩イメージの対比研究」未公刊修士論文、西南大学大学院.

東郷吉男•上野信太郎（2006）『動植物ことば辞典』、東京堂出版.

辻 幸夫（2013）『新編認知言語学キーワード事典』、研究社.

宇野直人·江原正士（2012）『漢詩を読む　陸游から魯迅へ』、平凡社.

王 敏•梅本重一（2003）『中国シンボルイメージ図典』、東京堂出版.

山田忠雄[ほか]編（2012）『新明解国語辞典』（第七版）、三省堂.

山田宗睦（1989）『花ー古事記　植物の日本誌』、八坂書房.

山梨正明（1988）『比喩と理解』、東京大学出版会.

山梨正明（2000）『認知言語学原理』、くろしお出版.

山梨正明（2004）『言葉の認知空間』、開拓社.

山梨正明（2012）『認知意味論研究』、研究社.

山梨正明（2015）『修辞的表現論　認知と言葉の技巧』、開拓社.

山下景子（2007）『花の日本語』、株式会社幻冬舎.

柳下貞一（1995）『柳の文化史』、株式会社淡交社.

吉田金彦（2001）『語源辞典　植物編』、東京堂出版.

洋泉社編集部編（2015）『古事記』、洋泉社.

中国語文献

柏杨 (2015)『丑陋的中国人 (新版)』、人民文学出版社.

毕 雪飞 (2007)「日本竹文化符号及其内核特征的研究」『沈阳农业大学学报 (社会科学版)』、9 (6):981-983.

边 立红 (2006)「“君子”英译现象的文化透视」『外语学刊』、4:94-99.

曹 雪芹 (2017)『红楼梦』、商务印书馆.

陈 晦 (2016)『英汉植物词汇词义特征及其文化理据对比研究』、中国社会科学出版社.

陈 丽 (2009)「世俗女性与纯净美人——中日文学中的女性形象比较」『成都师范学院学报』、25 (7):84-87.

陈 水根 (2000)「论梅兰竹菊的人格美」『江西社会科学』、8:100-103.

陈 晓芬[译注] (2016)『论语 (中华经典藏书•升级版)』、中华书局.

陈 映戎 (2015)『英汉植物隐喻的跨文化理解研究』、中国社会科学出版社.

程 杰 (2000)「“岁寒三友”缘起考」『中国典籍与文化』、3:31-37.

窦 文宇•窦 勇 (2005)『汉字字源：当代新说文解字』、吉林文史出版社.

杜 书瀛 (1998) 『李渔美学思想研究』、中国社会科学出版社.

段 静宜 (2019) 「基于隐喻机制的中日传统组合意象的文化意蕴探幽」『齐齐哈尔大学学报 (哲学社会科学版)』、1:132-134+143.

段 静宜 (2019) 「认知隐喻学视野中“草”的惯用表现的汉日对比」『文化学刊』、1: 204-207.

段 石羽•曲 文勇•朱 庚智 (2009)『汉字与植物命名』、新疆人民出版社.

段 玉裁 (1981)『说文解字注』上海古籍出版.

方 爱萍 (2010)「论日本的山茶花文化及审美意识」『四川理工学院学报』、25 (6)：75-78.

冯 英华 (2015)「被遮蔽的美丽存在——中国古代文学中女性外貌描写的特征及其审美意蕴

探」『和田师范专科学校学报 (汉文综合版)』、1:70-74.
高 静雪 (2015)「日本古典和歌中的“藤”意象研究」硕士学位论文、南开大学.
高 琼燕 (2010)「试析《诗经》婚恋诗中的男性形象」『四川民族学院学报』、19 (2):59-64.
高 玉芬•任 维平 (2003)「汉语中的性别主义及其根源」『河北师范大学学报 (哲学社会科学版)』、26 (2):99-100.
葛 金芳 (2006)「关于中国古代社会性质、结构及其演进轨迹的思考」『史学集刊』、1:5-6.
龚 群 (2006)「中国的君子人格理想」『伦理学研究』、1:29-34.
桂 舟 (2003)「中国古典诗人与梅兰竹菊」『常州大学学报 (社会科学版)』、4 (4):37-39.
郭 守运 (2003)「病态美"的文学呈现与指真」『华南师范大学学报 (社会科学版)』、3:46-51.
韩 育生 (2017)『香草美人志：楚辞里的植物』、鹭江出版社.
郝 懿行 (1982)『尔雅义疏』中国书店.
何 明 (1999)「中国竹文化小史」『寻根』、2:13-16.
何 小颜 (2008)「花之语」中国书店.
洪 涛 (2001)「中国古典文学中的桃花意象」『古典文学知识』、2：123-128.
胡 继明•黄 希庭 (2009)「君子——孔子的理想人格」『西南大学学报 (社会科学版)』、35 (4):7-11.
黄 国贞[译注] (2017)宋词三百首 (精编本)、商务印书馆.
黄 秀升 (2008)「“花～”“～花”词性别指向和修辞阐释」硕士学位论文、福建师范大学.
蒋 书红 (2016)『汉字与植物』暨南大学出版社.
靳 衛衛 (2004)『走进日本-透视日本语言与文化』、北京语言大学.
久保辉幸•津田 量•周 晨亮 (2015)「中日文化交流中的植物要素——从梅花、菊花、茶花等谈起」『日语学习与研究』、5:54-62.
李 桂奎 (2004)「中国古代小说关于女性容貌描写的植物化比拟」『南都学坛』、24 (5):74-77.
李 国庆•梁 楹 (2016)「阴阳、天地、男人和女人——扩展比喻修辞的功能性文化语境解读」『外语学刊』、2:67-70.
李 计伟 (2010)「论量词“根”的形成与其认知语义的多向发展」『语文研究』、3:34-38.
李 乐毅 (2000)『汉字演变五百例及续编』、北京语言文化大学出版社.
李 世东•颜 容 (2005)「中国竹文化浅析」『生态文化』、6：41-45.
李 晓东 (2008)「试析中日花文化之异同」『河南理工大学学报』、9 (2):254-257.
李 志勇 (2007)「汉语动植物词汇及其语用和文化认知研究」硕士学位论文、中央民族大学.

廖 开顺 (1997)「桃花文化与中国女性、中国文人」『怀化师专学报』、16 (3):297-301.

廖 文豪 (2015)『汉字树 3：植物里的汉字之美』、甘肃人民美术出版社.

林 甘泉 (2003)「中国古代知识阶层的原型及其早期历史行程」『中国史研究』、3:5-26.

林 丽君 (2010)「唐诗中"草"的隐喻认知解读」『山东社会科学』、6:97-100.

刘 国培 (1988)「中国古代农业社会各阶级心态分析」『昆明学院学报』、3:22-31.

刘 汉东 (1993)「中国古代文化人心态探析」『甘肃社会科学』、1:160-160.

刘 洪生 (2008)「从具象到写意——中国古代诗歌中女性美描写的阶段性特征」『名作欣赏』、2:6-8.

刘 俊 (2005)「汉英花卉植物词的文化诠释」『绥化学院学报』、25 (3):104-106.

刘 立善 (2010)「日本的菊花文化」『东北亚外语研究』、9:37-38.

刘 立善 (2012)「日本茂椿的文化内涵」『东瀛文化』334：39-40

刘 孝严 (2001)「浅谈《金瓶梅》女性人物描写」『东北师大学报 (哲学)』、6:65-71.

鲁思•本尼迪克特［著］ 吕万和等［译］(2007)『菊与刀』、商务印书馆.

陆 学艺 (2006)「中国社会结构的变化及发展趋势」『云南民族大学学报 (哲学社会科学版)』、23 (5):28-35.

罗 兴 (1992)「《万叶集》中的咏花歌」『日语学习与研究』、2:49-53.

马 凤华 (2003)「女性文学话语的自述——论《诗经》女性审美特色」『江西社会科学』、2:86-89.

毛 静 (2006)「中国传统菊花文化研究」硕士学位论文、华中农业大学.

毛 静•王彩云 (2005)「中国传统美学思想与菊花文化」『中国园林』、21 (9):58-60.

潘 富俊 (2016)『草木缘情 中国古典文学中的植物世界』商务印书馆.

潘 亚萍 (2012)「从日本花文化透视日本民族的审美意识」『湖北师范学院学报』32 (1)、20-22.

彭 春梅 (2014)「中日“咏花诗歌”及文化异同比较研究」硕士学位论文、云南师范大学.

彭 燕•黄 俊棚 (2010)「论《诗经》女性形象的社会角色及意义」『北京化工大学学报 (社会科学版)』、3:60-63.

彭 扬 (2013)「试析“梅、兰、竹、菊”意象在中国古典诗词中的文化意蕴——“梅兰竹菊”君子风格的体现及其对儒家思想的继承」『湖北第二师范学院学报』、30 (12):75-77.

任 敬军 (2010)「《竹取物语》与日本竹文化」『外国文学评论』、2:124-128.

任 敬军 (2010)「日本传统节日中的竹文化表现」『世界竹藤通讯』、08 (2):41-46.

任 敬军•任 健 (2016)「《万叶集》与日本竹文化」『世界竹藤通讯』、6:42-46.

上海古籍出版社编 (1986)『全唐诗』、上海古籍出版社.

宋 健楠 (2016)「汉字徽标多模态隐喻的互动意义解析」『外语教育研究』、14 (3):8-13.

苏 海洋 (2017)「旅人对《梅花落》诗群意象的受容 ——以"梅花宴"和歌为中心」『牡丹江大学学报』、7:78-85.

孙 华燕 (2011)「隐喻视角下中西方花语的对比」『黑龙江教育学院学报』、30 (5):150-152.

孙 新平•魏 林 (2000)「日语中的花与日本人的花情节」『日语知识』、12:30-31.

孙 秀华 (2010)「《古诗十九首》植物意象统观及文化意蕴诠释」『宁夏社会科学』、5:168—172.

孙 毅 (2018)「汉英植物隐喻管轨的“同”博观与“异”微探」『天津外国语大学学报』、 (4):31-44.

孙 毅•周 世清 (2011)「跨语言爱情隐喻异同的认知理据与哲学文化渊源考辨」『西北农林科技大学学报 (社会科学版)』、11 (2)：125-129.

谭 宏娇 (2004)「古汉语植物命名研究」博士学位论文、浙江大学.

汤 显祖 (1963)『牡丹亭』人民文学出版社.

田 晓莉 (2008)「《红楼梦》植物隐喻认知研究」硕士学位论文、曲阜师范大学.

王 超 (2015) 『中华国学经典精粹：儒家经典必读本·论语』、北京联合出版公司.

王 华 (2009)「紫草在日本古代文学中的意象——以上代和中古为中心」『中国海洋大学学报 (社会科学版)』、1：71-75.

王 杰斐 (2012)「汉语植物成语研究——围绕植物成语隐喻展开」硕士学位论文、上海交通大学.

王 青 (2007)「《诗经》植物意象的文化解读」『河海大学学报』、9 (2):59-91.

王 实甫[著] 王 春晓[评著] (2016)『西厢记(中华经典名剧)』、中华书局.

王 文 (2014)「唐代花卉文化研究」硕士学位论文、华中师范大学.

王 祥之 (2009)『图解汉字起源』、北京大学出版社.

王 秀梅[译注] (2015)『诗经 (上下册精装)』、中华书局.

王 娅婷 (2014)「汉字字体本身即为一种隐喻」『中国社会科学报』、03-03 (B01).

王 寅 (2007)『认知言语学』、上海外语教育出版社.

王 云 (2003)「花在中西文化中的隐喻意义」『复旦学报』、3：47-54.

温 端政 (2012)『惯用语 10000 条』上海辞书出版社.

温 端政 (2012)『俗语 10000 条』上海辞书出版社.

吴 晟 (1997)「黄庭坚与“岁寒三友”——兼论“岁寒三友”文化义的生成」『广州师院学报』、4:11-16.

吴 雅文•张 宁•白 天 *et al.* (2015)「中日两国山茶花的渊源及异同」『世界林业研究』、28 (4):81-84.

谢 甦 (2014)「宋词植物意象翻译」硕士学位论文、四川师范大学.

徐 丽华 (2013)「《红楼梦》中“桃花”的悲情意象探析」『牡丹江师范学院学报 (哲学社会科学版)』、2:23-25.

徐 梁峰 (2016)「根-概念隐喻的跨文化研究」『宁波广播电视大学学报』、14 (1):60-65.

徐 小婷 (2006)「现代汉语“花”词族研究」硕士学位论文、山东大学.

许 慎 (1963)『说文解字』、中华书局.

阎 利华 (2014)「《万叶集》中的咏梅和歌」『北方工业大学学报』、26 (2):62-66.

杨 硕 (2008)「对比中西方文化中“花”隐喻的异同」『科技资讯』、11:174-176.

姚 文清 (2001)「中日花文化比较 桃花与樱花」『华侨大学学报 (人文社科版)』、1:89-96.

叶 文振•刘 建华•杜 鹃 *et al.* (2003)「中国女性的社会地位及其影响因素」『人口学刊』、5:22-28.

殷 隽 (2013)「从隐喻和转喻的认知角度看一词多义现象——以一词多义“花”的义项分析为例」『长春理工大学学报 (社会科学版)』、10:120-122.

于 欣 (2014)「中日女性社会地位的比较研究」硕士学位论文、哈尔滨理工大学.

袁 雨斌、王 婧 (2009)「功能和认知语言学视角下的英汉“爱情”隐喻对比」『石家庄学院学报』、11 (9)83-85.

岳 文慧 (2013)「《诗经》女性描写词汇研究」硕士学位论文、山西师范大学.

张 立英•徐 勇 (2010)「从语料库看英汉隐喻模式的异同—以爱情隐喻和理智隐喻为例」『解放军外国语学院学报』、33 (3):54-68.

张 璐 (2015)「中日与花有关的惯用句的对比研究-以《超级大辞林 3.0》和《中国惯用语大辞典》为中心 」硕士学位论文、内蒙古师范大学.

张 鹏飞 (2009)「论“荷花情结”对中国佛教文化的审美观照」『中南民族大学学报』、9:71-74.

张 荣东 (2008)「中国古代菊花文化研究」博士学位论文、南京师范大学.

郑 群•钱 宗武 (2005)「《诗经》研究的盲点:婚恋诗中男性形象的整体观照」『扬州大学学报 (人文社会科学版)』、9 (6):38-42.

中国社会科学院语言研究所 (2011)『新华字典 (第 11 版)』、商务印书馆.

中国社会科学院语言研究所词典编辑室编 (2016)『现代汉语词典 (第七版)』、商务印书馆.

中华经典名著全本全注全译丛书《庄子》 (2015)、中华书局.

钟 玖英 (1997)「女性之喻的文化阐释」『当代修辞学』、5:47-48.

周 德艳•张 淳 2009「“花”的隐喻研究」『盐城师范学院学报 (人文社会科学版)』、29 (5):68-72.

周 武忠 (2008)「中国花文化研究综述」『中国园林』、6:79-84.

周 运会 (2015)「汉字构造的隐喻研究」博士学位论文、福建师范大学.

朱 洪斌 (2010)『中国民间植物传奇』、百花文艺出版社.

朱 佳 (2006)「有关日语中和制汉字的研究」硕士学位论文、吉林大学.

朱 玲 (2001)「中国古代女性审美的话语分析」『当代修辞学』、4:24-25.

朱 荣梅•杨 亚丽 (2008)「《诗经》女性审美传统的文化意蕴」『西北农林科技大学学报 (社会科学版)』、4:116-119.

例文出典及び使用するコーパス

[1] CCL 语料库（北京大学中国语言学研究中心开发）

http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai

第 4 章：(6)、(8)、(10)、(12)、(23)a、(31)、(34)、(57)a

[2] 语料库在线

http://corpus.zhonghuayuwen.org/

第 3 章：(10)、(11)、(12)、(14)、(15)、(16)、(24)、(28)、(29)

第 4 章：(1)、(2)、(23)b.c.d.、(33)、(35) b、(56)、

[3] 中日对译语料库

第 4 章：(18)、(21)、(37)、

[4] 少納言 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス

http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_result

第 3 章：(1)、(17)、(18)、(19)、(22)、(26)、(27)

第 4 章：(3)、(4)、(5)、(7)、(9)、(24)、(26)、(27)、(54)、(55)a.b、(58)